
我が慟哭ハ、拳ト成リテ

南部 樋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が慟哭ハ、拳ト成リテ

【Nコード】

N7490Y

【作者名】

南部 樋

【あらすじ】

神官殺しで奴隷闘士となったヴァルトは、この日ついに自由を勝ち取る事ができた。

奴隷闘士となってから五年……久し振りの自由の身となった時、ヴァルトは闘技場では敵無しの【拳帝】と呼ばれるようにすらなっていた。

しかし、遠い昔に失ってしまった家族への憧れや、憤りは衰えるどころか、神への憎悪へと変貌していた。

【拳帝】 【不死者】 e t cと数々の異名を持つ。男が織り成す人

間模様を描く話。

ヴァルトは自由の中で“何を目指し” “何を成すのか” 握った拳
では何も掴めない事が解らぬまま……

自由を掴む拳

石畳を乱暴に擦る男の硬い足音だけが、陽の当たらぬ通路内で反響する。

外界へと続く薄暗い通路の終点は明るい。歩を進めるにつれ、徐々に視界が光で白く染められてゆくのが分かった。そのまま、光が満ちる方向へと真っ直ぐに向かう。

男の足取りは薄闇に名残を残すかのように、ゆっくりとしたものだった。反面、薄闇に決別を告げるハッキリとした男の意志が、力強く踏みしめる一步一步から見て取れた。

そして……遂に、太陽の陽射しが指す世界へと男の大きな足が一步踏み出された。

舗装された石畳の質が変わり、足裏から伝わる感触にも若干の違和感を覚える。それは長い年月に渡って男が追い求めていた、懐かしい感触だった。

男の顔に浮かんでいた、薄暗い闇を惜しむような表情は既に消えている。実際は、徐々に視界を覆う陽の光に眼が慣れず、細めていただけに過ぎなかったのだが……男は自分でも知らないうちに、感慨に浸っていたのかもしれない。

突然、風が吹いて男の顔を優しく撫でる。

風を感じる機会は当然ながらこれまで何度もあった。だが最後に“外”で感じたのは、何年前だったろうか。

数年振りに“外”で浴びた太陽の光——否、自由の光を全身で謳歌するように……男は悠々とした動作で大きく伸びをした。

「よう！ 拳帝様、アンタがここから出て行っちゃまうと、俺の懷が寂しくなるなあ」

唐突に背後から声が掛かる。男は声のする方向へ視線を向ける事無く、耳を僅かに動かすだけだった。

“外”の感触を肌で感じ取る男の様子を見て、暫くは口を出さなかったのだろう。

男が出てきた通路の入り口を固めるように、二人の兵士が立っていた。話し掛けたのはその片方で、男の大きな背中に向け、おどけた口調で言葉を続けた。

「あんたのお陰で、こっちは随分と儲けさせてもらったからな。正直、また別のカタイ奴を見つけて賭ける位なら、賭場に行っても博打でも打った方がマシってもんだ」

「はっ！ そんな事をすりゃ……暖かい懷も冬を待たずして、チェドラ山の山頂並みに寒くなるさ。あんた、博打が恐ろしく下手そうな顔だからな？」

「言ってる！ なあ、ここだけの話……いつでも帰ってこいよ？ 勿論、また奴隷としてだけどな！」

いくら話しかけられようが、男は決して振り返えない。

前だけを向いたまま、意地の悪い笑みを浮かべると兵士に言葉を返した。

「そんな時は、あんたの懷に氷をぶち込むためだけに雑魚に殺されてやるよ」

男が発した言葉が余程気に入ったのか……、二人分の盛大な笑い声は、男が今しがた出た通路にまで響き渡った。

「じゃあな！ 拳帝。アンタに“神の祝福があらん事を”ってな」
「ははっ！ 神か……神なんて……」

突如、轟音が鳴り響く。

男が続けざまに言い放った言葉は遮られ、兵士の耳元に届くことは無かった。

轟音の正体は、男が通路から出たのを見計らって降ろされた鉄格子の音だ。見るだけで相手を威圧するような重い鉄格子が派手な音を立てて、入り口を閉ざす。

それは、まるで——長年閉ざされた空間で、生き延びてきた男の頑なに閉ざされた心を代弁するかのようでもあった。

「おい、最後なんて言ったんだ？」

兵士は閉まる鉄格子に邪魔をされて、聞こえなかった続きを男に促す。だが男の口は、二度と同じ言葉を告げはしない。

ただ静かに、そして豪快に……

己の生と自由を勝ち取った、唯一無二の証である掌を振って答えるのみだった。

（1－1）歓声を招く拳

速めるわけでも、遅らせるわけでも無く――。

男は大通りに入った後も、闘技場を出た時と同じ速度を保ったまま堂々たる足取りで闊歩していた。

きよろきよろと見回すような無粋な真似をしなくとも、様々な情景は目に入る。

王都・アリユテーマの中心に位置する闘技場は、古来からの建築様式で用いられていた石造りだった。だが、一步踏み出すと周囲は煉瓦造りの建物が連なっている。

舗装がなされ、馬車や荷車が行き来し易いように石畳の凹凸も少ない。これが一筋裏道へと入れば状況も違うのだろうが、良い道にはより多くの人々が集まる。男が足を踏み入れたばかりの大通りも例外では無く、道端に所狭しと露店が並び活気が満ち溢れていた。

闘技場から開放されたばかりの男は知る由も無かったが、今日は月に一度の市が立つ日であったことも原因だった。

近隣の村からもこの日ばかりは街へと赴き、商人を介さず売買を行う事が許されている特別な日である。従ってその賑やかさは、普段以上のものであった。

必死に値引き交渉をしていた者。

いい品を求め露店をうろつく者。

客の懷から出来る限りの金を搾り出そうとする商人。

隙だらけの田舎者から財布を掏ろうとしていたスリ。

酔って機嫌良く歌う酔っ払い。

それぞれが市の喧騒に取り込まれ、各々の成す役割をこなす者達ばかりであったが——大通りに突如現れた大柄な男が目に入ると、彼らは無意識のうちに言葉を嚥む。そして、自然と視線で男の姿を追ってしまっていた。

伸ばし放題の赤毛に、これもまた伸びきった髭を蓄えた巨体はかなり目立つ風体だとは男自身も思うが、彼らの関心は風体では無く別のものにあっただけらしい。

最初は一人、次に二人、さらには三人……

様々な声に混じり、ぽつりぽつりと数人が男に関する言葉を口にする。

「おい、あれ……拳帝だよな？」

「拳帝が何故ここに……」

「……まさか、今日抜け出たのか？」

「陛下から恩赦を頂いたというのは、本当だったのか？」

「くっそ、アイツの所為で幾ら損をしたと……」

「あいつを殺せば、俺の名前も……」

様々な声が賑やかに飛び交う大通りを進むにつれ、男の顔がみるみるうちに不機嫌な表情へと歪められる。ついには道の往来で、歩みを止め苛立ちを露にした。

雑踏の中、自分へと向けられる視線と言葉を捕らえ、男は顔を顰めて人混みを見つめる。

最初のうちは、男も気には留めなかった。だが……こうも多くの視線と言葉を向けられれば、それだけ不快感が顕著に現れる。

——チツ、うざってえ……

心の中で悪態を吐き、男が威圧を込めた眼で人々を一瞥する。

元々男の顔は人受けが良い方では無い。眼付きは悪く体格も人一倍大きい為、黙っていたら機嫌悪く、怒っている様な印象を昔から受ける様な容姿だった。

一度は皆閉口し、それぞれの行うべき行動へと戻る。だが、結局はそれすらも短い間でしかなかった。皆が皆、威圧感にたじろきながらも男に視線を注ぎ続ける。

人々の視線に込められたものは多種多様であった。

興味、畏怖、憧憬、嫉妬。

様々な感情が入り混じっていたが、それぞれが抱いている根源は同じである。

至って単純で、人が人であるが故の感情。——闘技場にて豪腕を振るい、今まで最強を誇っていた男“拳帝”に対する好奇の眼差しであった。

男が立ち止まった為、それまで興味を引かなかった者ですらも男へと視線を向ける。結果、老若男女問わず、無数の視線を浴びる羽目になった。市の勢いも相まって男を中心に氣勢溢る、いかんともしがたい空気が漂う。

——結局、何処に行っても……貴様等が俺を見る目は同じかよ。

熱気の籠もった視線を浴びるにつれ、無意識のうちに現実と過去との去来を繰り返す。

感情を激しく揺さ振られ、男はつい先程まで自分が居た場所——闘技場に立っているかの様な錯覚に襲われた。

命を賭けたやり取りを毎日繰り返すだけの虚しい場所は、五年も過ごしたにも関わらず愛着など抱ける筈も無かった。

既に自由を勝ち取った身としても、好き好んで回想に浸る様な場所では無い。

湧き上がる記憶を持っている自分自身ですら、忌々しく感じてしまふ。あれは愚劣の居城たる場所であり、命を科して過ごした不快な日々だった。

闘技場で男が出場する度、誰もが“その時”を待っていた。

掛け金などは足を向ける些細な要因にしか過ぎない。例えば男に賭けていようとも、人々が最後に辿り着く想いは一貫したものだ。理不尽な暴力と殺戮を道楽として求める者達の願いは、ただ一つ。

最強と謳われた【拳帝】が敗北する、劇的な瞬間。

それは――男が世に与えられた、生を喪失する瞬間の他無かった。

“その時”を待ち望み、人々は血走った目を輝かせる。中央に位置する闘技空間を囲む形で設けられた観客席は、溢れんばかりの熱気で毎日が噎せ返っていた。

訪れる者達にとっては日々の労働に明け暮れ、死んだも同然の目を唯一輝かせる場が闘技場のみのだろう。

人々は口から汚い言葉を吐きかけ、各々の想いを思うがままに飛ばす。

掛札を握り締め、一発逆転を狙う者などは……中でもとびきり手に負えなかった。

賭けるのは個人の意思にも関わらず、予想が外れば理不尽な言葉を喚き散らす。挙句、男が生き残った事に恨みを乗せ、言葉と共に食い掛けの食べ物を投げつけてきた事も毎日のようにあった。

決まってそういう輩を黙らせるのは、衛兵でも周囲の人間でも無

い。唯一、彼等が黙り込むものと言え——侮蔑の思いを込めて睨んだ、男の視線だけだった。

救いの手を差し伸べる相手もいなければ、心の底から自分を認めてくれる相手も居ない。

檻に囚われる事も無く、他人に枷を嵌められて足掻く事も無く。男にとってあの場に居た人間の全てが、反吐が出る程にまで忌み嫌う存在だった。

一体、どれ程の時間を過去に縛られていたのだろうか？

つい今しがたまで向けられていた、訝しげな言葉から恨み節話。

更には剣呑な雰囲気放つ言葉などが次第に収縮していった。

男が訝しげに辺りを見回す。その動作の後に続いたのは……男が全く予期せぬ賛辞の数々だった。

「拳帝！ 拳帝！ おめでとー！」

「くっそ！ よかったな、拳帝！ まんまと生きて抜け出やがって

……俺の金を返せっ！」

「おい！ 俺と勝負しろ！ 俺と！」

中には賛辞とも言えない言動も含まれていたが、言葉の調子は共通して明るものだ。

【拳帝】の自由を祝う言葉がみると周囲の人間へと伝染してゆき——、気付けば割れんばかりの歓声が、公共市場となっている大通りを揺らしていた。

闘技場の中で受けたものとは異なる歓声に包まれ、男は細い目を

さらに細める。表情こそ変えないものの、男には思考が追いつくまでの時間が暫く必要となっていた。

——成る程、これが“自由”ってやつか。

五年間もの歳月の中、憧れては憎んだ形の無いモノを遂に得た。という実感が今更ながら胸中に湧き上がる。

そうだ、俺は自由になったのだ。

奴隸身分から解放されて、今日から立派な一市民だ。最下級の下等市民権だろうが、知ったことか。

誰に憚る必要があるというのだ？

男は自分自身へと数度言い聞かせ、大きく息を吸う。肺一杯に新鮮な“外”の空気を満たした後には、立ち止まっていることですから馬鹿らしく思えてきた。

知らず知らずのうちに口端が上がり、不敵な笑みが浮かぶ。

男は粗末な麻布で織られた服の上からでも判るほどの、鍛え抜かれ盛り上がった胸板を張る。腕に馴染んだ鋼鉄製の籠手ごと大きく腕を揺らし、再び道の真ん中を堂々と歩き出した。

歩き始めてすぐさま、押し寄せる波の如く集まった群衆に男は取り囲まれた。それでも関係無いとばかりに、男は足を動かし続ける。

各種色とりどりの歓声は既に爆音と化し、男の鼓膜を激しく刺激する。

男は負けじと声を張り上げ、足を止める事無く大声で叫んだ。

「うるせえぞ！ この馬鹿野郎どもがッ！ 寄って集って人様の鼓

膜を破る気か！

おい、よく聞けクソ野郎共！ 今日俺が自由を勝ち取った素晴らしき日よ！ 俺に言葉を向ける位なら、もっと盛大に馬鹿をやれ！ 商人は破格で売れ！ 客はケチらず、そいつらから気持ち良く買え！ 他の集った連中は飲んで歌え！ 俺の解放記念日だ！ 俺が認めてやる！

売って買って……何でもいいから騒ぎやがれッ！」

先程の歓声に負けない音量で、男が叫び終える。その頃には、その場に居合わせた全ての人間が男の言葉に聞き惚れ、静寂の時が漂った。しかし、それも僅かな間だけだった。

次の瞬間には——市場全体の熱気が、一瞬にして最高潮にまで沸き上がる。

一瞬にして沸点へと達した市場は、大混乱へと見舞われた。

商人は商品とは全く関係無い拳帝の名前を出し、売りの声を張り上げる。

客は値段も聞かずに即買いの一言を叫ぶ。

市場に居る全員が同じ様に、訳がわからない熱に浮かされたかのように暴走を始めた。

群集を擦り抜ける様にして、男は人混みから離れた場所を目指す。彼等を嚇けたのは他ならぬ男自身なのだが——、まるで熱狂したかのように騒ぎ立てる観衆の存在は素直に鬱陶しかった。

叩かれたり、身体を触られたり、服を引っ張られたり……

声だけならばまだしも、まるで『触ると御利益がある』と巷で噂される石像の様な扱いをされている事が何よりも気に食わなかったのだ。

余程自分の名を挙げたいのか、中には人混みに紛れナイフで刺し殺そうとしてきた者までいた。ある程度の腕は避けてかわしてゆくも、暴力を向けてくる相手には容赦する必要など無い。男は自分に危害を加えようとする者の手を折ってやる。三人目までは妙な関心を覚えたものの、四人目以降からは何も感じず痛めつけた。

そんな事を暫く繰り返しつつも進むんでいるうち、市の立っている大通りから道を二本ほど外れてしまっていた。相変わらず注目は受けるが、それでも人並みもまばらになっている。

ようやく閑静な場所へと出たと確認した後に、男は短く息と共に悪態を吐いた。

「つたく……うざってえんだよ！」

朝からまだ何も食べておらず、空腹も相まって苛立ちがより一層募る。

適当に大通りを歩いて目に入った定食屋にでも入ろうと思っていた矢先の出来事だったので、仕方が無いといえば仕方が無いのだが……後悔はしない性分の男も、群集を自ら煽ってしまった今回の件に関しては、流石に少しばかりの反省を覚える結果となった。

——構わず二、三人殴り飛ばして強引に食いに行った方がよかったか……

少々物騒な後悔をしながらも、何か食べる物が売ってそんな場所を求めて男は歩き続ける。

暫く歩いていると、道端の一角で行われていた興味深い光景を捕らえた。男にとって馴染み深い雰囲気放たれており、同時に食欲

をそそる匂いも嗅覚が捕らえる。

殺伐とした雰囲気には興味が無かったものの、匂いにつられて自然にそちらの方へと男の足は赴いていた。

「いい加減にしろよ！ このクソジジイ！」

最初に耳へと入ってきた言葉は、余り上品なものでは無かった。

遠目で眺めていた時には既に分かっていたのだが、露店と思わしき場所を挟んで二人の男性と店主らしき初老の男が向き合っている。簡単な木の枠組みで縁取られた店は、これもまた簡単な布で屋根を形成していた。夜になるとこれらを畳み、手間をなるべく省いて移動できる様に造られたものである。

四つ程小さな椅子が置かれており、店主と客を隔てる台の上には何種類かの串に刺さった焼かれる前の肉がそれぞれ皿に盛られている。

見る限りそれは何処にでもある、ごくありふれた軽食を出す露店だった。

闘技場で男が毎日のように聞いていた下品な罵声の類は、どうやら二人組の方が一方的に飛ばしているらしい。素行も当然の事ながら、揃って汚れが目立たない黒地の服を身に纏っているのと、これ見よがしに腰に差している短剣を見る限りは……どう見繕っても、真つ当な職の人間からはかけ離れていた。

「だからよ、誰に断ってココで商売してるんだ？ って言ってるんだよ！ え？」

「誰に断わる」もあるか！ こっちはキッチンと筋を通して商業ギルドで許可貰って、ここで商売してるんだ。お前達みたいな、ワケの分からん奴等の許可など必要無いわ！」

「何だと？ おいこらジジイ！ もう一回言ってみろ！ お前こそ、何の肉だか分からないゴミ肉売ってんじゃ……」

店主に絡んでいた二人組のうち、大声で怒鳴っていた方が唐突に言葉を止めた。脅しめいた文句を最後まで続けることは出来ず、代わりにその身体が僅かに揺れる。

「吼えるな、胃に響く」

短く低い声で、【拳帝】と呼ばれる男は吐き捨てる様に呟いた。

拳帝が男にしたことは至極単純な行動である。

叫ぶ男の肩を左手で強く掴み、飛ばないよう固定する。直後に籠手を嵌めた拳の甲で、間抜けな顔を殴り飛ばしただけのこと。身体を固定されていた為、男はその場で気絶したに過ぎない。簡単に説明してしまえばそれだけのことだが、単純ゆえにその技は脅威に値する。何故なら全ての動作を一動作で、更には殴られた張本人ですら何が起こったのか気付かせず気を失わせる程の早業だったのだ。

そして殴った張本人が手を離すと……男はまるで糸が切れた操り人形のように、地面へと倒れ付した。

店主も二人組の片割れも、一瞬何が起こったのか理解出来ずに茫然とする。そんな彼等の様子などは関係無いとばかりに——拳帝と呼ばれる男は、露店に置かれた椅子へと勢い良く腰を降ろした。

「こいつは美味そうだ。オヤジ、適当に三本程焼いてくれないか？」

腰掛けた椅子の横で倒れている男を踏みつけながら、呆然と立ち尽くしたままの店主へと注文をする。

「け、けっ……け……」

店主は口を開閉しながら言葉を告げようとするものの、余程驚いているのか満足に喋れない。

「け……拳帝、だよな？ あんた」

「おうよ」

驚きで目を見開きつつも、やっと口から飛び出した店主の問い掛けに對し、拳帝は軽く肩を竦め一度だけ返事をした。

「僕はあんたが拳帝って呼ばれる前から、ずっとあんたに賭け続けてたんだ……しかし、他ならぬあんたが食いに来てくれるなんて……待ってろ、今焼くから三本と言わず好きなだけ食べていってくれ！」

「いいのか？」

「勿論だとも！」

拳帝の返事を待つ前から、店主は嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。網の上に何本か並べていた串を裏返し、調理台に敷き詰めていた火含石（かがんせき）に水を掛けた。保温も兼ねて温まっていた火含石は水に反応し、さらに熱を発して赤く染まる。

すぐさま漂う肉の焼ける香ばしい匂いが、拳帝の鼻をくすぐった。

「やはり良い匂いだ。口の中に涎が溜まってくる」

「味は任せてくれ！ あんたが“参った”って言うまで焼いてやるよ！」

「ほう、そいつは楽しみだ」

のんびりと世間話でもするかのような口調で店主と会話を交わすが、拳帝の脚は変わらず殴り飛ばした男を踏みつけたままの姿勢である。

踏まれている男と共に店主へと詰め寄っていたもう一人の男はと

いうと……暫くの間は、事の次第を理解出来ず茫然自失となっていた。低く脅す声色で数度声を掛けるも、まるで自分達など眼中に無いとばかりに繰り広げられる拳帝と店主の会話の間には割り込めない。

存在を無視されている事に関して、男の表情には腹立だしさが募る。拳帝の脚に踏まれた連れの口から漏れた呻き声が耳に入り、ついに鬱積された苛立ちは爆発したらしい。男は椅子に腰掛ける拳帝の太い腕を掴んで、大声で捲し立てた。

「さっきから話し掛けてるのに無視とは、いい度胸だてめえ！　よくもバズをつ！」

「……うるさいゴミだと思っていたが、何だ？　貴様等みたいなゴミにもちゃんと名前があったのか？」

「うるせえ！　奴隷上がりが調子に乗ってんじゃねえぞ！？　ここを誰のシマか知ってモノ言ってるんだろぅなあ！」

「知らん。ゴミの臭い唾が肉に飛ぶとメシが不味くなる、黙れ」

「ゴミとは何だ！　もっぺん言ってみろ！　ああ！」

顔を真っ赤にして怒鳴り立てる男に対して、拳帝は何も言葉を返さなかった。代わりに店主が差し出した串を三本受け取り、そのうち一本を口へと運ぶ。

無視をされた男が怒って掴んだ腕に力を込めるが、それをいとも簡単に振りほどき、返事代わりに脚へと力を込める。短く潰れた蛙のような惨めな声が、再び足元から漏れた。

「お、美味しいな」

予想していたものよりも遥かに上質な味に、拳帝は思わず感嘆の声を漏らしてしまう。

店主を脅していた男達は“何の肉だかわからない”と言っていたが、それは極々ありふれた塩が振りかけられた鶏肉だった。表面の

皮はパリッと焼かれ、油が充分にのった鶏肉を噛めば肉汁が口一杯に広がる。

奴隷身分の時に肉を味わえたのは週一回、管理する役人が独断で指定した日のみであった。それですらも、最低限の肉体と栄養を保たなければ『観客に対して見栄えが悪い』という馬鹿げた理由からである。大抵与えられたのは――働けなくなった農耕牛か、駄馬の肉が精々だ。それこそ、何の肉だかわからない代物である。

久しぶりに味わう濃厚な味に、拳帝は目を細めて味を楽しんだ。

一方、再び無視をされた男にはそんな拳帝の気持ちなど到底知る由も無い。相も変わらず無粋な大声を発し続ける。

「俺達を散々コケにしやがって……！　　いいか、てめえは奴隷だったから知らないだろうが、ここはなあ！　俺達アルギニン一家の……」

「おいゴミ、食事の邪魔だ。静かにしろ」

「ゴミじゃねえ！」

最後の警告を含めた拳帝の一言ですら、男は真意に気付かない。ついには腰に吊るしていた短剣に手を伸ばした。だが即座に抜ける位置にへと吊るしていたにも関わらず、男が短剣の柄を手にするよりも速く拳帝が動く。

「怒りっぽくなるのは腹が減っている証拠だな。こいつは俺の奢りだ……食べえ」

若干楽しそうな色を声に含ませた拳帝は、手に持っていた二本の串肉を目では追えない速度で、かつ的確に男の口へと突っ込んだ。

男は短剣を抜く間も無く不意を突かれ、熱々の肉汁垂れる串肉を口どころか喉元深くにまで差し込まれる羽目となった。

「ウゴッフッ！」

「どうだ？　美味いか？　美味いだろう？」

「アガグッ……ウゲッツ！　ヴヴェ！」

「ちゃんと話さないか、顔と一緒に行儀の悪い奴だな」

冗談めいた口調で告げる拳帝の問いには、男が今まで感じた事もないような殺気と威圧感が放たれていた。熱で焼ける喉の痛みすらも忘れ、男は恐怖のあまりコクコクと何度も頷き返す事しかできなかった。

男の様子を見た拳帝は満足そうな笑みを浮かべ、一つ大きく頷いて真顔へと戻った。だが、殺気と威圧感は未だに放ったままである。

「よし。返事としては、なっちゃいないが……まあ今回は許してやろう」

拳帝は頭を上下に激しく振り続ける男の髪を掴んで停めると、男の顔を間近で覗き込むように睨み付けた。

「さっきはゴミと言って悪かったな。お前はアルギン一家ってヤツの下っ端なんだな？　それなら、一つお前達のお友達に伝えておいてくれないか？　“誰に断わって、此处を自分達の縄張りだと名乗ってやがる。ここで暴力を飯の種にしたいのならば、今度からは俺に断りにきやがれアルギン野郎”……ってな。ちゃんと伝えるんだぞ？」

拳帝の細い鳶色の目は、鋭い眼光と共に殺意の光が宿っている。それは時間が経てば経つ程に、男の恐怖心をさらに煽っていった。心底から恐怖を味わった男は、拘束されていた頭を離され、力無く地面へと膝を落とす。口をだらしなく開け、中に入った串が落ちた後によりやく正気に返ったらしい。熱に麻痺した口から泡にも近い涎を撒き散らしながら、言葉にならない言葉を発するだけだった。

大通り程では無いものの、騒ぎを聞きつけ集まった人垣の中から失笑が漏れる。

嘲りの目と失笑を受け、男の顔はさらに青冷める。

男は死人のような表情のまま――半ば腰が抜けた動作で拳帝が脚を乗せていたもう一人の男を抱え、慌てながらも去ってゆくことしか出来無かった。

「ん、折角貰った二本が台無しになっちゃったな。オヤジ、悪いが俺は“遠慮”という言葉が大嫌いだな……また焼いてくれないか？」
「あ、ああ。別にいいが拳帝……アンタ、あんな事を言っちゃまって構わないのかい？」

「なあに、構わんさ。今日から俺も晴れてこの街での生活だからな。一般市民としての義務ってやつだ」

二人の男が去ってゆき、騒然とする周囲の空気をもともせず……拳帝は齒に挟まった肉を串で剥きながら、店主に向かってのんびりと言い放つのだった。

「ああ、そうだ。オヤジ、あんたにも伝えたい事があったんだ」
「何だい？」

話題を自分へと振られ、店主は串を焼いていた手を思わず止めて拳帝の方へと顔を向ける。座っているにも関わらず、店主よりも背丈が高い拳帝は嬉しそうに目を細めていた。

「あんた、随分と俺を熱心に応援してくれてたんだろ？ だったら、俺のもう一つの呼び名を知ってるよな？」

「勿論知ってるとも！ 【ノスフェラトゥ（不死者）】 だろ！」
「そう、それだ」

店主の返事に満足したのか拳帝は頷き、手にしている串を店主へ

と向ける。

「俺は【拳帝】よりも、そっちの名前の方が気に入ってるんだ。次からはそう呼んでくれ、俺は【ノスフェラトウ】のヴァルトってんだ」

言葉の締めとばかりにピン、と指で串を弾く。

それが使用済みの串を入れる容器の中に弧を描いて収まった様子を見て、【拳帝】とも【ノスフェラトウ】とも呼ばれる男——ヴァルトは可笑しそうに笑う。

そして……ヴァルトは店主が手渡すのを忘れていた新たな肉串を網から勝手に取り、さも当然の様に口へと放り込むのであった。

(1-2) 女を抱く拳

少しすえた匂いが狭い部屋一帯に漂う。

野性的な匂いの原因は、火が落とされたランタンから漏れる獣脂の臭いだけでは無かった。

薄暗い部屋の中で男女が睦み合う声と、ベッドの軋む音だけが響く。

木製の窓は開け放たれており、月明かりが室内に居る男女を照らし出す。抑えもしない互いの嬌声は外へと漏れ響いている筈だが、付近に住む人々が気にすることは無い。

何故なら――、この地区一帯が“そういう場所”だからだ。この地区では悲鳴ですら、耳に入っても人々は見向きもしないだろう。

月の光が照らす女の裸体は小刻みに揺れ続け、白い肌は熱でほんのりと赤く染まり、玉の様に浮いた汗が身体の線に沿って流れ落ちる。腰程まである長い髪は少し乱れ、身体の動きに合わせてフワリと揺れる。仰向けとなった身体の上に女を跨らせていた男が激しく腰を突き上げる度、女の幾度目になる艶やかな嬌声が荒い息と相成って部屋に響き渡った。

「く、出すぞ……ッ！」

「駄目……そんなに激しくしたら、私もまた……」

最後の言葉代わりに、女は一度だけ大きく跳ね上がると男の肩に爪を食い込ませる。そのまま果てて身体を支えきれなくなったのか、

汗が滲む男の胸にぐったりと身を預けた。

筋肉質な身体の上に柔らかい女の肌を押し付けられた赤毛の男――ヴァルトは無言のまま口端を上げた笑みを浮かべ、女の髪を愛しそうに優しく撫でた。

ヴァルトが娼館へと赴き――アンジェリカと名乗る娼婦と共に、娼館の二階にある宿へと入ったのは陽が落ちてから暫くしてだった。

娼館に到着するまでにヴァルトの姿を見て商売も忘れて興奮する油売りの小僧や、仕事を終え娼館や賭場のある特別地区へと赴く労働人達から浴びる注目は相変わらずだった。そんな視線を鬱陶しく感じていたヴァルトを気遣い……アンジェリカが部屋で食事を取れる様に取り計らってくれたのには、素直に感謝を覚えた。

宿に入るなり湯場を借りたヴァルトは身体を洗い丹念に髭を剃ると髪に油を塗り、身なりを整える。数年振りに身なりを整えたヴァルトの見た目は先程までの薄汚い粗野な風貌から一転、歴戦の戦士や熟練の傭兵を連想させるまでの変貌を遂げていた。

渡されていた上質なローブを身に纏った後で食事が到着したのも、おそらく頃合を見計らっていたのだろう。口数少なく食事を頬張るヴァルトを、アンジェリカは妖艶な笑みを浮かべて楽しそうに眺めていた。

陶器のような白い肌と長い黒髪が神秘的な魅力となっており、対照的に大きくぱっちりとした黒い瞳は少女の面影を色濃く残している。その美貌は娼婦らしい化粧の匂いも薄く造られた美しさでは無く、天然がつくりだした美貌を讃えていた。

大人びた妖艶さと少女の様な愛くるしさ。アンジェリカは相反するその両方の魅力を兼ね備えた、不思議な女だった。

容姿もそうだが、立ち振る舞いや雰囲気を見ている限り……娼館の主人が『ウチで一番の娘』と、薦めてきたのも頷ける。

昼間食べた串肉とはまた違う、手間を掛けられた料理と自由になつてから初めて呑む酒に舌鼓を打っていたヴァルトだったが……突然アンジェリカに唇を塞がれ、ベッドへと押し倒された後に——店主の言っていたアンジェリカの評価を、再度違う角度から思い知らされる羽目となった。

もはや何度目かも分からない情事を終えて、ようやくヴァルトは人心地つく。

ベッド脇に備え付けられたサイドテーブルに置かれている葡萄酒の封を切った。瓶に口をつけ、直接それを流し込んで喉を潤す。葡萄酒はとうに生暖かくなっていたが、上質なそれはいささかも味は落ちていなかった。

身体を起こしたヴァルトの脇では、未だにアンジェリカはベッドに身体を投げ出し荒い息を吐いていた。アンジェリカは力の入らなくなった体を捻り、喉を鳴らして葡萄酒を飲むヴァルトを見上げる。ヴァルトは無言でその顎に手を添えると、アンジェリカの唇を自分の口で塞ぐ。そのまま、含んでいた葡萄酒を口移しで飲ませた。

「……んっ」

愛らしい声が喉の奥から漏れ、アンジェリカは驚いたように黒い目を見開く。

口の中に流し込まれた葡萄酒を飲み終えた後で妖艶な表情を浮かべ、お返しとばかりにヴァルトの舌を絡め取った。アンジェリカの

可愛い悪戯に、ヴァルトは柔らかく暖かな舌に導かれるように、舌を深く絡めていった。

「……まさか、もう一回？」

「いや……」

絡め合った舌を戻し、離れたヴァルトの口から引く糸をアンジェリカは名残惜しそうに細い指で拭った。拭った指で自らの唇をなぞりながら、アンジェリカは呟く。

ヴァルトは短く否定した後、深い溜息を吐いた。

「久し振りとはいえ、少し張り切りすぎたな」

「そうね、拳帝様だったら……激し過ぎて私、壊されちゃうと思ったもの。闘技場だけじゃなくて、ベッドの上でも本当凄いのね」

「……まあな」

多少なれども水分を取ったことで、体力もかなり回復したのだろう。アンジェリカはまるで猫の様に素早く、しなやかな肢体を引き起こして微笑む。そのまま上半身を起こしているヴァルトの厚い胸板に自身の豊満な胸を押し付け、甘えるように凭れ掛かった。

筋肉質なヴァルトの胸から次第に軽く這わせる指をおろし、最終的に下半身へと手を添える。先程までの濃厚な口付けの所為で起こったヴァルトの僅かな変化を確認した後は——アンジェリカは少女の様に目を輝かせ、胸元へと鼻を摺り寄せた。

「本当、凄いのね。さっきから何度もしてるのに、まだ元気なんだから……」

「それだけ、女の身体に飢えていただけさ。いや……違うな。“お前の身体が素晴らしいからだ”とでも言った方が気分がいいか？」

「あら、嬉しい。でも……それを言っちゃったら、効果は半減しちゃうわよ？」

「なに、口での失態は体と態度で取り戻すのが俺の流儀だ。まあ……」

：コイツは全くの嘘では無いから、失態では無いと思うがな」

ヴァルトは苦笑混じりにそう言うと、艶やかなアンジェリカの黒髪を撫で下ろす。心地良さそうに目を閉じて、されるがままになっているアンジェリカを、優しく自分の顔へと引き寄せた。

一方アンジェリカも抵抗するどころか待ってましたとばかりに、少し荒れたヴァルトの口に紅く湿った唇を合わせる。

その口付けは先程の様に深い接吻とは異なり、互いが軽く触れる程度で終わった。

「あら？」

期待外れだったのか、アンジェリカが疑問の言葉と共に形のいい唇を尖らせる。その可愛らしい拗ねた素振りを見て、ヴァルトは思わず苦笑を漏らした。

「……残念ながら、今夜は打ち止めだ。今日は色々とありすぎて、疲れちゃった」

「なあに？ 拳帝様が降参だなんて。私、不戦勝で勝っても嬉しく無いわ」

「そう言うな、一時休戦なだけだ。……少しだけ、眠らせてもらっても構わないか？ それからならば、アンジェが失神するまで犯ってやる」

「んもう……何よ、思わせぶりな素振りだけ取って放置するなんて、酷いわ……」

「すまん。だが本当に……眠気が限界でな。自由になったからといって、少々浮かれていたのかもしれない」

ヴァルトは目頭を揉みながら睡魔と格闘するも、とうに限界を迎えた眠気は抑えようが無い。その様子は傍から見ても充分なものであり、アンジェリカも諦めがついたらしい。

「分かったわ、寝かせてあげる。けど……、次に目が覚めた時は覚

えてらっしゃい」

「は……ははっ、お手……柔らかに頼……」

言葉を最後まで言い終わらぬうちに、ヴァルトは瞼を閉ざした。アンジェリカの柔肌を滑り、ベッドへと巨体を倒れ込ませる。

静寂の中、規則正しいヴァルトの寝息と外から聞こえる夜虫の鳴き声を耳に――。アンジェリカは暗い部屋で微笑みを浮かべていた。

「おやすみなさい、拳帝様……」

笑みを浮かべ、アンジェリカは僅かに開いているヴァルトの口へと自身の唇を当てる。触れるだけの軽い口付けを交わしても、寝息を立てているヴァルトは何も反応を見せない。

ヴァルトが眠りに落ちている事を確認すると――アンジェリカは座っているベッドの上で、少しだけ身体を折って腕を伸ばす。慣れた手つきでベッドの隙間から、音も無くそれを引き抜いた。

白く細い手に握られた細身の刃は、月の明かりに反射して冷たい光を放つ。

凶器を手を持ち月に照らされたアンジェリカの表情からは、先程まで浮かべていた女性らしい艶やかな笑みは消え、まるで人形のような無機質なものとなっていた。

躊躇いすら無く、無駄の無い洗練された動作でアンジェリカは刃を頭上高くに振り上げた。ヴァルトの首筋に目掛け、切っ先を勢い良く下ろす。

しかし――

アンジェリカが感じたものは、刃が肉へと沈み込む感触でも、命が途絶える前に対象の喉から上がる血に混じった声でも無い。アンジェリカがそれらを感じ取る前に直感が働き、無意識のうちに刃を止めていた。

娼婦としてのものか、暗殺者としてのものかは分からない。いずれにせよ今まで直感に幾度も助けられたアンジェリカにとって、それはどうでもいい事だった。

「ねえ、起きてるんでしょ？」

相手の命を絶とうとしていたにも関わらず、悪びれた素振りなど何一つ見せずに、アンジェリカはヴァルトに問い掛ける。その口調はむしろ嬉しそうで――手に持つ刃さえ除けば、悪戯がバレた子供の様に嬉々としたものだった。

「……ああ」

ヴァルトは閉じていた瞼をゆっくりと上げて短く答えるだけで、自分を殺そうとしているアンジェリカに対して怒る気配など微塵も無い。

「どうして……？」

「何がだ？」

面倒臭そうに顔だけを上げ、ヴァルトはベッド脇で刃を手にしたまま立っているアンジェリカを見上げる。

「さっき貴方が飲んだ葡萄酒には強力な薬を入れておいたのに……まさか、私と同じように解毒剤でも飲んでいたのかしら？」

「いや……闘技場に長く居過ぎるとな、色々と不便な身体になっち

まう。余りにも俺が負けないからと、ここ一年程は趣向を変えて様々な魔物だのを相手にさせられていた。勿論、中には毒を持った奴等もいてな、そいつらの毒を喰らっているうちに……毒が効かない身体になっちゃっただけさ」

「そう、それじゃあ普通の人間用の薬なんて効きっこ無いわね……全く、貴方ってそんな所まで規格外だったの……誤算だったわ」

「そういう事だ、商売の邪魔をして悪かったな」

「いえいえ、これは私の落ち度だもの」

長い髪を揺らして笑うアンジェリカの表情は、あくまで明るく楽しそうである。だがヴァルトの視線はその美しい顔では無く、僅かに震えている手を静かに見据えていた。

「どうした？ それを振り下ろさないのか？」

「気付かれているのに殺すなんて、そんな無様な真似はできないわ」
自分が試されている事に気付いたのか、アンジェリカは手に持っていた細身の刃を後ろに投げ捨てた。溜息交じりに首を横に振ると、つまらなさそうにベッドへ形の良い尻を落ち着かせ脚を投げ出す。

「私はね、これでも一流を自負しているのよ。相手に気持ち良くなくて貰って、幸せな気分のまま……自分が殺された事すら気付かない様に、優しく命を刈り取ってあげる。それが私の美学なの」

「そいつは、すげえ美学だな」

「……それ、本心から思ってる？」

「俺は野郎を騙しても、美女を騙す様な真似はしない。それに……そういう拘りを持つてる奴は嫌いじゃないぜ」

疑う様な眼差しを向けてくるアンジェリカに対し、ヴァルトは肩を竦めて答える。返答が不満だったのか、アンジェリカは頬を膨らませてヴァルトを睨み付けた。

「だから……気付かれた時点で私の負け、ってわけ。そういう事」
「そういう事、か……」

軽い冗談を言い合う様な口調だが、アンジェリカの告げた言葉の真意は重い。

死を覚悟した暗殺者——アンジェリカの潔い態度を前に、ヴァルトは苦笑を浮かべて両腕を頭の後ろへと組んだ。いくら月明かりがあるとはいえ、天井までは見えない。それでも、ぼんやりと何処を見るわけでも無くただ鳶色の目を瞬きさせる。

「ねえ、最後に一つだけ教えて」

「何だ？」

「最初から……気付いていたの？」

真剣なアンジェリカの口調に対し、ヴァルトは暫く言葉を頭で巡らせた。

「いや……気付く気付かないとか、俺は別にどうでもよかった。ただ……この馬鹿な体が、気配に関しては過剰に反応しちまってな」

「気配？ 殺気なんて私は……」

自分の手腕を一流だと自負している為か、アンジェリカが怒った様に反論する。

死を覚悟こそすれ、最期の時まで自分が犯した欠点を追及したいのだろう。そんな彼女だからこそ、ヴァルトは飾る事無く素直に言葉が続けた。

「違う。アンジェ、お前は完璧だった。……完璧すぎたのさ」

「何よそれ？」

「完璧だからこそ、気配を完全に消していた。だが……人としての気配まで完全に消す行為は、殺気を出してるのと同じ違う？」

「……成る程ね。一流すぎるのも考えものだわ……けど、納得できたわ。有難う」

「話は終わりか？」

「ええ、もう全ては終わり。……一流の最期としては、悪く無い終わり方ね」

「そうか、じゃあ……」

ヴァルトは言葉尻を濁し、頭の後ろで組んでいた腕を解く。脇に座っていたアンジェリカの手を掴み、そのまま細い腰を抱き寄せた。驚いて息を呑むアンジェリカを無理矢理寝かせて、強引に自分の胸元と背中を密着させる。自分の状況が理解し難いのか、戸惑うアンジェリカの首筋へと何も言わずに顔を埋めた。

香水と女の香りの中に混ざり合った、微かな雄の匂いがヴァルトの鼻腔をくすぐる。腕の中で戸惑うこの魅力的な存在に対し、さらに己の匂いをつけてやろうかとも考えるが——結局、散々満たされた性欲以上に、睡眠に対する欲が勝る結果となった。

「ちょっと、何のつもり？」

「今度こそ俺は寝る。起すなよ？　もし、殺したいのなら……今度こそ起さないように頼む」

「私を生かすっていうの？　次こそ本当に殺すかもしれないのに？　ねえ、聞いて……」

驚くアンジェリカの抗議は、ヴァルトの手がその豊満な胸を揉みしだく感触によって遮られた。

「構わないさ、女の胸で死ぬのも悪くない。それもお前みたいな、飛びきり上等の女なら尚更だ。そう……男の夢、ってやつだな」

呟きながらも、ヴァルトの無骨な手止まらない。まるで壊れ物に触れるように、優しく力強く柔らかな胸を揉み続ける。しかし、その勢いも少しずつ衰えていき——完全に止まる頃には、アンジェリカの耳元で静かな寝息をたて、眠りについていた。

「呆れた……本当に酷い人ね」

溜息と共に吐かれたアンジェリカの呟きは、諦めの気持ちよりも呆れが色濃く現れていた。

「“起こさずに殺せ” って……貴方相手じゃ無理だって思い知ったばかりなのに……」

身体を起こそうとしても、背後から腕を回されている以上それすらもままならない状態である。

そして何より……眠りに落ちる直前まで身体を触られていた為に、アンジェリカの下腹部が疼きに近い熱を宿し、火照った身体が離れる事を拒んでいた。

「こんな事なら、いつそ殺された方がマシだったわよ……」

今まで出会った事が無い程にまでアンジェリカを魅了する強烈な雄の匂いと、粗暴な外見とは裏腹に自分を大切に扱う男に抱かれ、アンジェリカは毒付く。

だが、文句言ったところで眠っている人間の耳には届く筈も無く、アンジェリカは悶々とする身体と行き場を失った気持ちで、ヴァルトの手の甲を一度だけ叩いた。

「何よ、起きないじゃない……馬鹿」

一瞬寝息が途絶えるが、すぐさま耳元を擦る感触に、アンジェリカは拗ねた様に呟くのだった。

(1-3) 優しさ溢るる拳

眠りの世界へと落ちてから、どれ程の時間が経っていたのかは分からない。

何か夢を見ていた様な気もするが、それも今となっては定かでは無い。

不意に感じた気配の所為で、ヴァルトは睡眠から現実へと引き戻された。

既に頭からは睡魔の欠片は取り払われ、意識は覚醒している。それでも目は開かず、耳に意識を集中させて周囲を確認した。

ヴァルトの肌が感じ取ったものは、明確な殺意だった。

但し、それは寝る直前まで腕に抱いていたアンジェリカのものでは無い。今でも腕に掛かっている僅かな重みと、温もりは目を開けなくとも分かる。

ヴァルトへと注がれている殺気は部屋の外——鎧戸も閉めず、開け放たれた窓の外からだ。

場所こそ漠然ながらも把握するが、殺気以外のものが何時自分へと降り掛かってくるかまでは分からない。事態に備えるかの様に、ヴァルトの身体は自然と動く。

ヴァルトの僅かな動きを悟ったのだろう。腕の中で温もりを発していたアンジェリカの腕が伸び、ヴァルトの太い首へと回された。うなじを這う髪 of 感触と首筋に掛かる息に負け、ヴァルトは閉じていた瞼を開ける。

「あら、起きちゃったの？」

ヴァルトを殺そうとしていた美しい暗殺者は、間近な距離で微笑みながらそう言う——ヴァルトの唇に軽く自分の唇を押し付けた。

「さっきまで可愛い寝顔を見せてくれていたのに……本当、貴方って敏感なのね」

「あそこまで無粋な殺気を放たれていたらなあ、死体でも目が覚めちまうだろうよ」

「……確かにそうね」

そう言うときアンジェリカは甘える子猫のような仕草で、ヴァルトの胸に鼻を摺り寄せる。

「私が仲間を呼んだ、っていう考えは無いのかしら？」

「一流の暗殺者が、お友達と仲良く手繋いで暗殺か？ ……面白い冗談だ」

無言で胸に顔を埋めたまま首を横に振るアンジェリカに対し、ヴァルトも何も言わず柔らかい黒髪を撫でただけだった。

「ふふっ……心配いらないわ。この場所は私の縄張りだって明確にしてあるから、手出しは出来無いの。そうね……私に対しての嫌がらせみたいなもの、って言えば分かって貰えるかしら？」

「嫌がらせ？」

アンジェリカの放った言葉の意味が分からず、ヴァルトは上半身をベッドから起すと訝しげな表情を浮かべる。

「そう。貴方を私に殺させない為に、わざと殺気を放ってるのよ。それで貴方を警戒させて、私の仕事を邪魔しようって算段なんですよ。ね……」

「成る程。だが、辛気臭いな……暗殺者っていうのは、皆そう陰険な奴等なのか？」

「一流どころ以外はああいう感じよ、だからアイツらは……良くて

二流止まりなのよね」

「……へえ」

ヴァルトはそれ以上は何も聞かず、ベッド脇に置いたままだった葡萄酒に手を伸ばした。残りを一気に飲み干し、豪快に口から噎気を吐く。

アンジェリカもシーツを払いのけて、ベッド脇に腰掛ける。ヴァルトと並んで座り、スラリと伸びた綺麗な足を組んだ。こちらは緩慢としたヴァルトの動作とは対照的で不機嫌そうに形の良い唇を尖らせていた。

「それにしても不愉快だわ。下劣な三流野郎のクセに……」

続けて「殺してやろうかしら？」と可愛らしく小首を傾げて呟いた物騒な台詞が耳に入り、ヴァルトは思わず苦笑を漏らす。そして宥めるように、アンジェリカの肩を抱き寄せた。

「止めとけ、止めとけ。馬鹿に構うと馬鹿がうつる。それに、あの程度の奴にお前の身体を好きにさせるのは……俺が不愉快だ」

「あら」

アンジェリカが嬉しそうにヴァルトを見上げ、言葉の真意を確かめようとする。だがその時、既にヴァルトは腰を屈めており、アンジェリカの視線を退けていた。

「ああいう輩はな……」

床に落ちていた“あるもの”を拾い上げ、それを手にしたヴァルトはアンジェリカへと顔を向ける。相変わらずの仏頂面を浮かべてはいるが、その細い目は獲物を狙う獣の様な輝きを放っていた。

「こうしてやるのが……一番だ」

ヴァルトが手にしていたものは、アンジェリカが床へ投げ捨てた細身のダガーだった。

柄を逆手に握り込み、素早く窓から身を乗り出す。

窓の外は、未だ夜明けには至らない暗闇が広がっている。にも関わらず、ヴァルトは前の五ルード（約五メートル程）先も見えない闇を暫く見据えて、相手に狙いを定めていた。

狙いを決めるや否や——ヴァルトは迷う事無く、一切の無駄を省いた動作でダガーを大きく振りかぶった。それを闇に閉ざされて、見えない筈の路地へと投げつける。

刃がまだ微かに残る月明かりに反射し、一瞬だけ鈍く輝く。

ヴァルトがダガーを投げた一呼吸後、静寂な闇の中から何かに突き刺さる生々しい音と、声を殺し切れずに叫ぶ男の声が二人の耳に入った。

抑える事を忘れた足音は途中で何度か途切れ、やがて静寂が訪れる。

先程までのあからさまな殺気は、小さくなる足音が聞こえる前からとうに消え失せていた。

「殺したの？」

アンジェリカの言葉にヴァルトは犬歯を見せ、寧猛な笑みを浮かべて振り返った。

「いや、殺す価値もない。だがあの様子じゃあ……“男”としては、死んだだろうな」

喉で含み笑いを漏らしながらも放つヴァルトの言葉で、アンジェリカは全てを悟ったようだ。愚かで不運な同業者を哀れに感じたの

か整った顔は一瞬曇るも、やがてその表情はすぐに和らぐ。次の瞬間には、心地の良い声で笑い声を部屋に響かせていた。

「あらあら、ちょん切られちゃったの？ 哀れな男ね。そうだ、次会ったらウチの店番として雇ってあげようかしら？ ふふふ……」
「それにしても……さっきの馬鹿はともかく。お前みたいな暗殺者を何人も雇うあたり、依頼主は随分と太っ腹だな？ もしくは余程、俺の事を恨んでるのか……」

機嫌良く笑うアンジェリカを横目で見ながら、ヴァルトは眉を顰めて自分の命を狙う人物に対して考えを巡らせた。

成功報酬で暗殺者を雇うには、暗黙の掟が存在している。

一度に一人しか雇わない、それが裏の世界での掟であった。無論これは、少しでも危険な橋を渡る稼業に携わっている者ならば誰でも知っているような範囲での常識であった。

“暗殺を謀るのに、一度に雇うのは一人”

これは裏を返せば——多数の暗殺者を雇うという事は、依頼した暗殺者の腕を信用していないと言われるのと同義語である。

暗殺者と呼ばれる稼業についている人間は、自尊心が高い者が多い。

アンジェリカが例外というわけでは無く、何らかの拘りを持って仕事を行う輩が多いとヴァルトは昔聞いた事があった。もしも、複数の者に暗殺を依頼していると暗殺者が知ったのならば、決して良い顔はしないだろう。事実過去に、暗殺者が複数雇われている事を知った暗殺者達が依頼人の敵に回った事件が何度もあったらしい。

勿論、複数雇う場合も状況によりは存在する。これは、前金で暗殺依頼を行う場合のみ可能とのことだ。但しそれでも、単独で行動

する暗殺者を雇う事は出来無い。分配という形を容認出来る三流の夜盗崩れ程度を雇えるのが関の山である。

これらの事例を考えれば考える程、答えを導き出す道が塞がってしまう。

前者を疑えば、アンジェリカがここまで落ち着いている事に納得がいかない。

後者を疑えば、ヴァルトから見ても腕利きである彼女を雇う事など到底出来る筈も無い。

ヴァルトの頭に浮かんだ疑問を、娼婦が持つ特有の感覚で鋭敏に嗅ぎ取ったのか……アンジェリカはヴァルトの傍に近寄ると、悪戯っ子のような笑みを浮かべて瞳を覗き込んできた。

「ねえ、何を考えているのか当ててあげる。今、貴方は“誰に命を狙われているか”では無く“何故、複数の暗殺者が襲ってくるのか？”って、疑問を抱いてるのでしょうか？」

「……よく分かったな」

「私の副業は、さっき貴方も堪能したでしょ？ 私が今まで、どれだけ人の内に抱え込んだものを見透かしてきたと思っているの？」

アンジェリカはそう言って、自慢げに豊満な胸を突き出す。

「その疑問、答えてあげてもいいわよ？」

未だ服も身に纏っていない胸は勢いで揺れ、柔らかさと豊満さをより強調させた。

「何だ？ 身体に聞け、ってか？ それなら俺も望むところだが……」

「普通そうくる？ もう……起きたてなのに元気なんだから」

冗談めかして言ったヴァルトの言葉に、アンジェリカは唇を尖らせて答える。冗談ついでにヴァルトは目の前で揺れる胸へと腕を伸ばすが、その手は簡単に叩き落とされた。

「こいつは手厳しいな。だが、冗句は置いといて……理由は話してくれると有難い。俺にはどうも……さっきの馬鹿とお前のような一流どころが、同時に同じ人間を狙う理由がさっぱり分かりそうにも無い」

「答えは簡単よ？ 私は誰かの依頼を受けたわけではないし、さっきの馬鹿も依頼を受けて殺しに来たって訳でも無いわ」

「謎掛けか？ ……さらに分からん。何だ？ “誰が一番に俺を殺すのか？” って、暗殺者の中でそういう賭けでも始めたのか？」

「そうね、そんな感じ」

「見ての通り俺は馬鹿だからよ……意地悪は止めて、さっさと教えてくれないか？」

「あらあら……」

両手を挙げ、素直に降参の意を示したヴァルトを見上げるアンジェリカは笑顔を浮かべていた。だがその顔は笑っていても、大きな眼には暗殺者としての鋭い眼光が宿っている。

「意地悪は言って無いわ、さっきの貴方の言葉は正解よ？ 【拳帝】

またの名を【ノスフェラトゥ】のヴァルト。……今、貴方の首には賞金が掛けられているの」

「自由になったその日に、めでたく賞金首かよ……」

「そう。だから今——この街にいる腕に覚えのある暗殺者や、賞金稼ぎ達がみんな貴方の虜になっちゃってるのよ」

あくまで笑みを絶やす事無く笑いかけるアンジェリカの話を理解するにつれ、ヴァルトの顔に明らかな嫌悪が色濃く現れる。

「あー……つまりは、これからも“ああいう馬鹿”が、雁首揃えてやってくるって事か？」

「あら、拳帝様は御不満？　モテていいじゃない」

「お前みたいな良い女に付け狙われるならば大歓迎だが、ムサイ男共に狙われるなんて……ぞっとしないな」

寝癖が付いた髪を何度も指で掻きつつも、口に笑みを浮かべたヴァルトはさも当然の様に言い放つ。だが世辞の類を聞き飽きているのか、アンジェリカは微笑みながら「あら有難う」と一言返しただけだった。

「でもこの街で、貴方に挑むような一流所は知れてるわ」

肩を竦めるヴァルトの方には目を向けず、上を仰ぎ思い出す素振りを見せながらアンジェリカは細い指を折り矢継ぎ早に言葉が続ける。

「賞金稼ぎなら“鉄球ゴーディ”に“双頭黒犬ラース”と、暗殺者なら“針十字スレイ”や“影踏シャルワ”……それに私こと、“毒蟲惑アンジェリカ”が有名かしら？　あとは名前も知られていない二流三流もいいとこね？」

指折り数えて告げられてゆく名前の数々に、ヴァルトは心底うんざりした表情を浮かべる。

アンジェリカのような、男にとって素晴らしい美学を持つ者に命を狙われるなら気分もまた違うのだろうか……名から漂ってくる印象の限り、到底そのような容姿はおろか、手段も穏やかなものでは無いだろう。

男、それも——陰気な性質の輩に寄ってこられて喜べる趣味は持ち合わせていない。ヴァルトは沈む気分を抱え、気持ちを切り替えようと異なる話題を振ることにした。

「賞金首ねえ……一体いくら掛かってるんだ？」

ぽつりと漏らしたヴァルトの言葉に、アンジェリカは向き直ると無言で指を二本立てる。

「へえ、金貨で二十枚とは豪気なことだ」

「残念……銀貨で二百枚よ……」

「……おい」

言い辛そうに顔を曇らせながらも訂正するアンジェリカの言葉は、最初ヴァルトは自分の聞き間違えかと思いい耳を疑った。

「そんな顔しないで頂戴よ、私だって金額は言いたく無かったんだから……」

ヴァルトの変化を見て、アンジェリカは戸惑いながらも首を横に振る。その仕草を見ても、目の前にいる暗殺者の言葉は嘘偽りが無いものだろう。

今度こそ、ヴァルトの顔は固まった。

ウグルゼ王国の王都でもある此处、アリユテーマの街に住む平民の平均的な年収は銀貨で一五〇枚程度である。質素な生活をすれば一年を過ごすのに充分足りうる額とは言え、賞金額となれば銀貨二百枚というのは異例の金額であろう。

金貨の場合、時事の相場によって変動に拠るが……平均的には銀貨五百枚前後に対し、金貨一枚と考えられている。

ヴァルトが愕然としたのは、何も自分の存在を買いかぶっていた事でも驕りでも無い。ヴァルト以外の人間がこの額を聞いたとしても、皆同じ反応を表すことだろう。

銀貨二百枚という額。それは——文明的にも発展したウグルゼ王国が所有する闘技場の覇者であり、拳帝ともノスフェラトゥとも呼ばれた男の首に掛けられる賞金にしては格安どころか、捨て値もいところの額であった。

自分でも知らず知らずのうちに、ヴァルトは殺気を漲っていたらしい。表情も硬直ですら通り越し、怒りで頬が熱を持っていた。

ヴァルトの反応は、自身の命を平民の年収より少し上程度に考えられた者としては当然のものだろう。だが、傍にいるアンジェリカとしては居心地の悪さを感じずにはいられない。

変化していったヴァルトを宥めるように、当惑しながらもアンジェリカは言葉を発した。

「ちょっと、そう殺気立たないでよ……」

「いや……お前、そりゃあ……俺の命をそこいらの浮気旦那でも殺すような値段しか掛けられてないんだ。自分がそんな目に合ってみるよ？　殺気立ちもするさ……」

「ま、まあそうだけど……」

ヴァルトが怒りを滲ませる理由も充分承知してかアンジェリカは戸惑いつつも、最後に「でもね」と付け加える。

「逆に貴方だからこそ、この値段で十分なのよ？」

「はあ？　納得いかんぞ。いくら俺が奴隷あがりの男だからって……」

「そういう意味じゃなくて、そもそも……あなた勘違いしていない？　これが殺しの依頼ならむしろ依頼人が殺されても文句は言えない値段だけど、賞金だと意味合いが変わってくるのよ？」

アンジェリカは部屋に満ちる濃密な殺気に気圧されるも、負けじとヴァルトへと詰め寄った。ヴァルトも幾分落ち着き、眉を顰めて素直に疑問を返す。

「どういう事だ？」

「あのね、まず最初に私の名誉の為にも言っておくけれど……賞金稼ぎにしろ暗殺者にしろ、無秩序に誰でも狙っていい訳じゃないわ。必ずそこに第三者の存在が関わっているってこと。そうじゃないと

賞金稼ぎもただの無頼者に、暗殺者もただの殺人者に代わってしまう」

「まあ、そうだよな」

「けれども……そこに賞金が掛けられると話は変わってくるの。例えばそれがどれ程に安い金であろうとも、殺す大義名分を得られるのよ。そして、貴方は金じゃ計りきれない価値がある存在なの」

「……“名声”ってやつか？」

不機嫌さの余り、さらに細い目を細めながらヴァルトが漏らした言葉にアンジェリカは一度だけ大きく頷いた。

「そうよ。“闘技場最強の男”“剣聖をも超える拳帝”“不死者ヴァルト”を殺した人間は、一生仕事に困ることはないでしょうね？
しかも、割の良い仕事だけを選び好みだってできる。売り込めば仕官の道だって望めるわ。それ位、貴方は有名で特別な存在なのよ」
「……とんだ迷惑だ」

怒りの矛先をアンジェリカに向けるわけにも行かず、再びベッドの上に寝転びながらヴァルトは大きく溜息を吐いた後に悪態を吐く。

「全く……これまで生きるか死ぬかって事に必死だったのに、自由になったらなったで結局これか？ 本当、世知辛い世の中だな……くそっ」

ヴァルトは手で目を覆いながら天井を仰いだ。

素直に真正面から襲って来るのなら、打ち倒せばいい。だが人の命を奪う事を生業としている人間の場合、そうで無い者が大半であることをヴァルトは知っている。

悪態の言葉も尽き、今はただ溜息しか出てこなかった。

「御愁傷様。なんなら賞金を掛けた相手を教えましょうか？」

「いや……、今は良い。折角良い女と居るにも関わらず、これ以上は無粋だろ？ そんな事は次にアホ面晒してやってくる奴にでも“聞いて”おくさ」

「まあ怖い」

「そんな事よりも、だ」

芝居掛かった仕草で口に手を当てて笑うアンジェリカの方へと身体を向け、ヴァルトは意地の悪い笑みを浮かべた。

「……口直しに約束通り、アンジェを“天国”って所に連れて行ってやりたいんだが？」

「あらっ、ふふふっ。ちゃんと約束、覚えてたのね？ 嬉しい」

ヴァルトはアンジェリカの腰に手を回して、自分の胸元へと引き寄せた。

綺麗に収まったアンジェリカの耳元へと口を寄せ、耳朶を軽く噛んでやる。甘い息を漏らしながらも、アンジェリカがそれを拒む事は無かった。

「ちゃんと今度は、私が満足する“天国”に連れて行って頂戴。もしも、私が満足出来無かったら……今度は私が貴方をさっきの馬鹿みたいにしちゃうわよ？」

「そいつは、勘弁してほしいな……」

苦笑を浮かべながらも放つヴァルトの言葉など、まるで聞こえないかの様な素振りでアンジェリカは強く胸に顔を摺り寄せてくる。

素肌の胸に押し当てられた頬も心地良いが、顎に指を沿え上を向いた唇に口付けをする感触の方がヴァルトには何倍も魅力的に感じてしまう。

口付けが開始の合図だとばかりに、ヴァルトも何も言わずアンジェリカをベッドに押し倒すと、均整の取れた肢体へとのかかった。

かくして——朝靄立ち込める娼婦街に、一際甲高い嬌声が響き渡るのであった。

朝霧も晴れ、活気が出始めた朝の街中をヴァルトはゆっくり見回しながら歩く。

横には腕を組み、寄り掛かるような形でアンジェリカが連れ添っていた。

露店に商品を並べている最中の露店商や、朝一番に仕入れの荷を載せて大通りを走る馬車などが激しく行き交っていた。それらが展開する光景の中、腕を組みながら寄り添って歩く男女の姿は、少々場にそぐわない光景となっている。だが、本人達には全くそれを気にする素振りは見られなかった。

アンジェリカは地味な服を身に纏っているも、美しい顔立ちと服越しからでも分かる魅力的な身体はやはり道行く男性の目を惹くらしい。一方のヴァルトも闘技場に居た頃とは違い、身なりは整えているが体格の良さが相まって二人の存在をさらに浮き立たせていた。

「言ってくれば、ご飯ぐらい作ったのに……」

ヴァルトの太い腕に胸を押し付けながら、呟くアンジェリカの声には不満の色が混ざっていた。朝方まで続いた情事の所為で乱れた髪と化粧も今ではすっかり整えられ、その余韻はもはやどこにも残されていない。

「いや、昨日も思っていたんだが……久し振りに自由な飯を食べるんだ。狭っ苦しい部屋で食うよりかは、お天道様の下で食う飯の方が美味く感じてな」

ヴァルトはそう言いながらも、アンジェリカが掴んでいない方の手に持っていた細長いパンへと齧り付いた。

「ん、やっぱり美味しいな」

次々と齧り付き、歩きながらだというのにも関わらずあつという間に一本を食べ終える。口を動かしながらも即座に袋を持つアンジェリカに催促をするヴァルトを見て、アンジェリカは溜息を一つ吐いて新しいパンを手渡すのだった。

それは早朝から働く商人相手の露店で購入したのだが、匂いにつられ買ってみると意外と美味しい事に驚いて、ヴァルトが迷わず袋一杯買い込んだものだ。今ではアンジェリカが持つ食べ物を入れる麻袋が、一杯になる程にまで詰め込まれている。

肉と香草を煮込んだ汁にじっくり漬け込み、そこからさらに焼き上げたパンは実に香ばしいものだった。表面は固くなっているものの、中はしっとりとしており何本食べても飽きは訪れない。無論、それなりの手間が掛かっているだけに、値段もそれ相応のものではあった。一本辺りの値段すら普通の金銭感覚を持つ人間ならば躊躇うような値段である。

袋一杯にもなるパンの値段を聞いても臆する事無く、ヴァルトが銀貨二枚を即決で払う光景を見ていたアンジェリカなど呆れ果てていた程だ。

「……ヴァルトは早くお嫁さんを貰った方がいいわね……」

「んあ？ 急にどうした？」

横目にじっとりと睨みつけるアンジェリカに、ヴァルトは心底不思議そうな視線で返す。

「いくら貴方が強くても……金銭感覚は人並みでいい、って事よ」
「何だそりゃ？」

全く以ってヴァルトが言葉の真意を理解していないのを悟ったのか、アンジェリカはこれ見よがしにもう一度深く溜息を吐いた。

「お、あそこにも美味そうなもんが……」

「ちよつと！ まだ、パンが残ってるでしょ！」

再び匂いにつられ、そちらの方へと向かおうとするヴァルトだったが、強い静止の声と共にアンジェリカに腕を引っ張られた。

「なんだよ？ 大丈夫だって、まだ食えるから……」

「絶対ダメ！ もう……パンを食べ終わるまで他の物を買うのは禁止！ いいわね！？」

「……あ、ああ。分かった……」

「本当に分かってるの？ 全く……お金を稼ぐっていうのが、どんなに大変な事か……」

ヴァルトへと詰め寄るアンジェリカの気迫は凄まじく、彼女と出会って初めて感じたものであった。アンジェリカはその勢いに乗ったまま「何時までも露店商のところにいいカモになる」と愚痴りながら露店通りから離れようと、半ば強引にヴァルトの手を引っ張ってゆく。

力では明らかに勝っているヴァルトも、流石に女の剣幕には敵わない。

戸惑いを見せつつもヴァルトはアンジェリカに引き摺られるように、街の広場に向かう道へと向かうべく露店通りを後にした。

暫くの間歩いていると飲食物が並ぶ露店通りから抜け、そこら一帯に漂っていた香ばしい匂いと人々の喧騒も随分と収まってきた頃

だった。

アンジェリカが何かに気を取られたのか、ふと立ち止まる。

「……どうした？」

黙々と麻袋の中に収められたパンを消費していたヴァルトも、アンジェリカの引っ張られるままにされていたので必然と歩みが止まる。急に足を止められた理由が分からず、隣に立つアンジェリカへと目を向けるとヴァルトの方を見る事無く、その黒い瞳はある一点へと向けられていた。

夜明け前に現れた暗殺者を撃退した際に物騒な理由を聞いていた所為もあり、自分を狙う何者かの存在をアンジェリカがいち早く察知したのかという可能性をヴァルトは疑ったものの、どうやらそうでは無いらしい。

素早くアンジェリカの視線を追った先に見えた者は、暗殺者や賞金稼ぎからはほど遠く離れた者達だった。

アンジェリカが向ける視線の先——露店通りに隣接する路地裏には、少女が幼子の手を繋いで立っていた。

おそらく、露店通り一帯に漂う匂いに誘われてきたのだろう。

路地の入り口から物欲しげに露店を伺う姿は、ボロを纏った浮浪児であることは一目でわかる。年の頃は三歳かそこの幼子の手を引いている少女も、容姿を見る限りまだ幼い表情をしている。彼女達が姉妹であろう事は、くすんで伸びた金色の髪と似通った顔立ちからすぐに分かった。

道行く人々の視界に少女達が映っているのは勿論だが、皆その少女達が見えないものの様に扱い素通りしてゆく。ヴァルトとて、アンジェリカが立ち止まらない限りは恐らく視界に入ったとしてもさほど気には留めなかっただろう。

ヴァルトが闘技場へと幽閉される前から、街にこの様な浮浪児が立っている姿などさして珍しい光景ではなかった。

世の政など知る由も無い場で過ごした五年の間で、ヴァルトが得た時事の動きなどはたかが知れている。前王が崩御し新王に代わった程度の知識しかヴァルトは持ち合わせていない。だが……例えば誰が国を支配しようと、その恩恵を受ける者などはほんの一握りの人間にしか過ぎない。という事は、自由を束縛される前からとうに知っていた世の理であった。

街に住む者としては、日常の一光景にしか過ぎない浮浪児達に何故関心を抱くのか？

隣に立つアンジェリカの意図が、全く以って分からない。ヴァルトは再び視線をアンジェリカへと戻した。

娼婦と暗殺者の二面を持つ美しい女性は、路地に佇む二人を見つめたまま目を細めている。何を考えているかは解らないものの、その整った顔に浮かぶ表情はヴァルトが最も良く知っている——とある感情を露にしたものだった。

「あのね……」

近くにあるものを見据えているにも関わらず、その先に何かを見ている様な目のままアンジェリカはポツリとヴァルトにしか聞こえない小声で呟く。

「私、孤児だったのよ。その日に食べる物も苦勞して……。あの歳位の時は私もあの子達みたいに、ああして露店を見ていたわ」

口に出して呟いているのは、ヴァルトに聞いて欲しいからなのだろう。だが、生憎ヴァルトはアンジェリカの言葉に対する返答は持ち合わせていない。

その場凌ぎに適当な相槌を打つのは簡単だろうが、それは決して

アンジェリカの求めているものでは無いだろう。だからこそ黙ってアンジェリカの独白に耳を傾けていると、腕を抱く力が僅かに強くなった。

「やっぱり私がああして立っていても、道行く人は誰も見向きもしなかったわ。そして私は、毎日神様を呪い続けた……。どうして、私がいる場所はこんなに薄暗いのだろう。どうして、光は決まった所にしか当たらないのだろう……。ってね」

一通り話し終えて我に返ったのか、アンジェリカは自分でも驚いた様な表情で軽く首を振った。続いて苦笑を浮かべると、ヴァルトから腕を放して目を伏せる。

「……ごめんね」

「いや」

一時の感情に任せて吐いた自分の過去を、笑みと共に消し去ろうとしている努力が伺える。そんなアンジェリカにヴァルトは一言だけ言葉を返すと、アンジェリカの髪を軽く撫でた。

アンジェリカもそれ以上は何も取り繕う必要が無いと理解したらしい。軽くヴァルトに頷いた後は、成り行きを見ていた少女達の方へゆっくりと歩み寄っていった。

少女達には先程の会話など聞こえている筈も無く、急に近付いてくるアンジェリカに対し明らかな怯えを見せた。少女は咄嗟に幼子の手を引いて、一旦は路地の裏へと引き返そうとする。だがその足は、アンジェリカが浮かべる優しい笑顔を見て止まった。

「そんなに怯えなくてもいいわ」

久しく人の優しさを感じていなかったのだろう、戸惑いながらも少女達は手を伸ばすアンジェリカの方を呆然とした様子で見上げている。

「私は何も酷い事なんてしないから。ね？　そうだ、お名前を教えてくださいませんかしら？」

アンジェリカの浮かべる優しい笑顔と差し伸べられた手を見る限り、自分達に危害を加える相手では無いと判断したのだろう。それでもアンジェリカから幼子を庇うように、少女が前へ一歩踏み出ると小さく震える声で言葉を放った。

「わたし、マリエラ……こっちが妹、の……ソフィア……」

「そう……マリエラとソフィアね？　教えてくれて有難う。私はアンジェリカって言うの。友達はアンジェって呼ぶわ、二人にもそう呼んでもらえると嬉しいんだけど……」

「アンジェ？」

「ええ」

アンジェリカはマリエラと名乗った少女に愛称で呼ばれると、嬉しそうに何度も頷いた後は地面へと屈む。

再び二人へと手を伸ばすが、今度は警戒される事が無いと分かったのか……アンジェリカはそのままフケと垢が浮き、汚れた姉妹の髪を何の躊躇いも無く撫でた。

新しい一日を告げる朝の街は、少し離れた場所に居る人の話し声など馬車の音や様々な雑音によって掻き消される。ヴァルトの元を離れ、路地に座り込んで浮浪児の姉妹と話しているアンジェリカの声など今ではもう耳に入らない。

ただ……アンジェリカの笑顔につられ、暗かった少女達の表情が次第に明るいものへと変わってゆく様子だけはヴァルトがいる位置からでも充分伺う事はできた。

先程アンジェリカが浮かべていた表情は、彼女達を過去の自分と

重ね合わせていたものだったのだろう。

あの時、アンジェリカがヴァルトに謝ったのは——過去を不用意に思い起こす愚かしさに気付き、迂闊にも他人の前で発露してしまった事に対してだったのかもしれない。とヴァルトは考えていた。

本来ならばあの時に諫め、過ぎ去ってしまった事を思い出す愚かしさを嘲笑してやればよかったのかもしれない。或いは、アンジェリカもそれを望んでいたのかもしれない。

アンジェリカとマリエラとソフィア。

今しがた知り合ったばかりにも関わらず、全くそれを感じさせない三人の姿。

それを遠い昔に見た光景と重ね、目を細めたまま眺めている自分に気付いているヴァルトが——過去を思い起こし自嘲していたアンジェリカに対し、何も言える筈が無かった。

(1-4) 狙われた拳

アンジェリカはテーブルに片肘を置き、頬杖をついている。

空いている方の手で磨り減って光沢を放っているテーブルの木目をなぞりながら、深く深く溜息を吐いた。

「お腹つてのは……そりゃまあ、減るものだけど……」

アンジェリカの目の前には、スープと肉を片付けた皿が幾重にも積み重ねられている。

その数はすでに数十枚と重なり、今やテーブルの一角は塔のようになってしまっていた。

「それにしても……本当、よく食べるわね……あなた“達”」

溜息を吐きながらも、アンジェリカは何度目か分からない感嘆の言葉を溢す。

次々と出される料理を片っ端から征服し、皿で出来た塔の建設をしているのはヴァルトではなかった。ヴァルトとテーブルを挟んで向かい側——アンジェリカの隣に座っている、幼い姉妹がヴァルトに負けじと必死で口に食べ物を運び続けていた。

最初の頃は面白がってアンジェリカも微笑みながら様子を眺めていたのだが……皿が重ねられてゆくにつれ、その表情は驚きと呆れの気持ちへと変化していった。

朝の街で出会ったマリエラとソフィアと名乗った幼い姉妹を連れて、アンジェリカが娼館へと戻ったのは今から一鐘（二時間）程前

の事だった。

湯を沸かし二人を風呂に入れた後、服を着せて身なりを整えてやった姉妹の姿は見違える程に可愛らしいものだった。腹を空かせているという事もあり、そのまま二人は食堂へと案内された。先程外から昼の初鐘を告げる鐘の音が聞こえたので、昼食には丁度の時間だろう。

丁度火含石の準備を終えていた事もあり、食事はすんなりと出てきたのだが……先程からそれは物凄い勢いで消化され、まさに“戦場”と呼ぶに相応しいものとなっていた。

「ちょ……おめえ！ その肉は俺のだろう！？」

「そんなの誰が決めたの？ これは私の！」

「俺が決めた！ 今決めた！」

「……大人げない……」

肉が乗った大皿をフォークで指し示し、腰を浮かせて抗議するヴァルトを見てアンジェリカがボソリと呟いた。マリエラとソフィアも無言でヴァルトを眺め——女三人の冷たい視線が突き刺さる。これには流石のヴァルトも、浮かしかけていた腰を萎らしく降ろす他無かった。

「まあまあ、食えるに越した事は無いさ！」

反論する言葉も見当たらず、バツの悪そうな顔を浮かべたヴァルトに代わり弁明の言葉が出たのはその時だった。その人物は食堂の扉を勢い良く開けると同時に現れ、威勢のいい声と共に香辛料のよく効いた香ばしい匂いも雪崩れ込んできた。

「アンジェもアンジェだよ、そう責めてやりなさんな！ これだけ図体でかいんだ、それ相応に大飯喰らいなのも合点がいくだろ？」

ほらよ、旦那。追加をやるから、コイツで手を打ちな！」

部屋に入ってきたのは啖呵に劣らず、恰幅のいい中年女性だった。豪快に笑いながら、盆に載せた厚切りの焼いた肉をヴァルトの前へとドンと置く。

「助かった……俺の味方は姐さんだけだぜ」

心底安心した様な口調でヴァルトが呟くと、その言葉を聞いた女性には満足気に頷く。目尻の皺が目立つ笑顔を浮かべ、返事代わりに大柄なヴァルトの肩を盆で遠慮する事無く叩いた。

ヴァルトが臺も立つこの女性——娼館の台所を預かる人物を“姐さん”と呼ぶのには、理由があった。この女性は見掛け通り、気も相当強く……仮にも“お婆ちゃん”などと呼ぶと鉄のお盆か、刃物を容赦無く飛ばしてくる物騒な人物であったのだ。

昨夜アンジェリカと共に宿へと宿泊した際、部屋に食事を持って来たのが彼女だったが、その際、口の悪いヴァルトがうっかり“お婆ちゃん”と呼んでしまい……有無も言わず包丁を投げつけられる羽目となったのだ。

それ以来、ヴァルトも彼女を“姐さん”と呼ぶ様に心掛けている。

「駄目よ、マゼンダさん。男は甘やかすと凶に乗るんだから！」

「ちよっと待て……俺は駄目亭主か何かか？」

「何よ、私は本当の事を言ってるだけじゃない」

「……駄目亭主なんだ」

「だめていしゅー！」

ソフィアが気に入った単語を繰り返す様子は素直に可愛らしいが、内容が内容である。先程ヴァルトが『唯一の味方』だと言っていたマゼンダですら、ソフィアが叫ぶ言葉に対し大笑いを響かせていた。

幼子にさえ馬鹿にされた様な錯覚を受け、ヴァルトはがつくりと肩を落とす。それでも、無言の抗議とばかりに、目の前に置かれた肉へと齧り付くのだった。

「ねえ、貴女達。聞きたい事があるんだけど……いいかしら？」

若干聞き辛そうな表情でアンジェリカが話を切り出したのは——
ようやく食欲が満たされたマリエラとソフィアが、満足気な笑顔を浮かべて互いの顔を見合わせていた時の事だった。

「その……貴方たちの御両親はどうしたの？」

浮浪児になった理由は大凡の検討はついているのだろうが、アンジェリカは敢えて聞いたのだろう。彼女達に両親の影が感じられないのは、最初に出会った時からヴァルトも薄々感じ取っていた。
肉を奪い合う相手が脱落した事により、ヴァルトは口に料理を運ぶ手を若干緩めながらも事の成り行きを静かに見守ることにする。

浮浪児になる理由など、少しばかり年齢を重ねてきた人間ならば誰もが容易に想像出来ることだ。

恐らく、この姉妹も親に『捨てられた』類なのだろう——多少の語弊があるが、『親が捨てた』と表すよりも、村が『捨てた』と言

った方が相応しいかもしれない。

飢饉などで口減らしが必要な際や、両親が死んで孤児となった場合、村にとっての不利益になる者を村から街へと捨てに来る場合があった。そういう経過を経た浮浪児の大半は、住居も無く街へと住み着く結果となる。勿論、市民権などはないので長期に渡る不法滞在は違法行為なのだが……広い都市でこれらに該当する人間を取り締まるには、膨大な人手と費用が必要となる。結果として、何処の国でも同じ様に実質黙認されている状態だった。

アンジェリカの言葉は重く、先程までの明るい喧噪の余韻すら消し飛ばすものだった。

室内は気まずく、重い沈黙に支配される。

二人の姉妹——妹のソフィアは何を聞かれているのか解らず、きょとんとした表情を浮かべているが、姉のマリエラは口をキュッと強く結び、黙り込んで俯く。一方のアンジェリカも、マリエラの態度を見て言葉が告げない事が伺えた。

「言いたくねえなら、別に言わなくていいんじゃないか？」

部屋に漂う沈黙を一蹴したのは、ヴァルトが放った言葉だった。

さして興味が無い素振りを取っていたが、気まずい空気の中で食事など進むわけが無い。なによりヴァルトは——俯いて眼を伏せているマリエラを前にして、無関心を決め込む気にはなれなかった。だからこそ、思わず口走った一言でもあった。

「人には聞かletakくねえ事の一つや二つあるもんだ」

「……ヴァルトの言う通りね」

ヴァルトが漂う雰囲気になんて放った一言を、自分への叱責と感じたのだろう。アンジェリカもヴァルトの言葉にすんなりと同意して謝罪を述べた。

「……ごめんなさいね、答えたくないのなら答えなくてもいいわ。ただ、今から言う言葉だけはちゃんと答えて欲しいの。いいかしら？」

そう言ってアンジェリカは、幼い姉妹の顔を一人ずつゆっくりと見た後に笑顔を浮かべる。

「今日から、貴女達二人に此处で暮らして欲しいのだけど……どう？」

「……えっ？」

アンジェリカの言葉が余程意外だったのか、マリエラは俯かせていた顔を上げて驚きの表情を浮かべる。

「何を驚いてる？」

満面の笑顔で頷いて承諾するソフィアとは異なり、驚いて言葉を失っているマリエラに対して、ヴァルトは口に料理を運びながらも平然と言い放った。

「何処の世界に親切心だけでお前等みたいな浮浪児に風呂を与え、食事を与える物好きがいるんだ？ いいか、お前達は拾われた。そして風呂に入れられ、飯も与えられた。その代価は支払うべきだろ？」

“働かざる者食うべからず” ってやつだ
「ちよっとヴァルト！ こんな小さい子に向かって……他にも言い方ってものがあるでしょ！」

齒に衣着せぬ物言いだ告げるヴァルトの言葉に、アンジェリカが慌てて訂正を付け加える。

「えっと……御免なさいね。このおじちゃん馬鹿だから、余り気に

しないでね」

「……おい」

「マリエラちゃんとソフィアちゃん。貴女達にどんな事情があるにせよ、貴女達だけだこの街では生きていけないわ。でも勘違いしないでね、私は貴女達に強制するつもりも無いから質問させてもらったの。だから……よく考えて選んで。私は貴女達に毎日食事を与える事も出来る、お風呂だって毎日入って貰っても構わない。勿論、此処に住むのなら掃除とか洗濯とか……色々と仕事してもらうけれども」

「掃除とか洗濯……ねえ」

「……余計な事、言わないで」

年齢的には余りにも無理があるとは思いつつ……てっきり彼女の職業柄、アンジェリカの示唆する“仕事”の内容をあれこれと推測していたヴァルトが思わず感嘆の声を漏らす。だがそれも、立ち上がって隣の席へと腰掛けたアンジェリカに脚を思い切り踏まれた拳、睨まれてしまったので続く事は無い。今度こそ、ヴァルトは肩を竦めて黙った。

「急に色々言って混乱したかもしれないけれど、選ぶのは貴女達よ。此処に住んで働くか……それとも、拒否をして今まで通りの見窄らしい浮浪児に戻るか。今日は泊まってもらって、答えはそれからでもいいから……ね？」

アンジェリカは、マリエラ達の瞳を正面から見据えて問い掛けた。傍から聞けば、厳しい言葉に聞こえるかもしれないが……言っている事は曲げられない事実のみである。

浮浪児達には市民権はおろか、人権ですら存在していない。

マリエラやソフィアの様な子供が路上生活を続けてゆけば、当然

の如く欲に塗れた汚い大人達の手によって餌食となるのは目に見えていた。

この国では市民が奴隷を持つ事を禁じているものの、何事にも抜け穴というものが存在している。養うと甘い言葉で子供達を誘惑して、後は奴隷同様に扱う者なども世に掃いて捨てる程いることだろう。

大きな街に行けばよくある話だ。二束三文の金さえ与えれば、奴隷とは認められず雇用しているものと見なされ、国も手出しは出来ない。

手元に置かなくとも、貴族に“奉公に出す”という手段を取り、幾ばくかの金を得る者も無論いることだろう。実の親でもその様な者は少なくは無い。“奉公”と云えば響きはいいだろうが――大概は、貴族に性奴隷として娘を売り飛ばす事を示している。

マリエラとソフィアの幼い浮浪児……しかも女の子が今まで無事であったのですら、ヴァルトは奇跡的だとも思えた。

勿論、それらの事情を解っていてもアンジェリカは、二人の意思を問わずにはいられなかったのだろう。何をするにしても、自ら選ばずに一方的に選択をさせるといふのは奴隷と同じだ。本来ならば、有無も言わさず選択権さえも奪うところだが、そこはアンジェリカという女性の優しさが充分に感じられた。

「あ……アンジェ、さん」

椅子から立ち上がったマリエラが顔を上げ、正面へと座ったアンジェリカを見据える。幾分大きめな服の裾を握る手は震え、結んでいる口と表情も硬い。だが意を決したのか、その蒼い瞳には強い意志が宿っている事が伺えた。

「私は、お父さんが帰ってくるまで待たなきゃいけないから……で

も、ソフィアだけは……」

「お父さんを待ってる？ マリエラ、一体貴女……」

マリエラの言葉を聞いて、アンジェリカの目が驚きに見開かれる。続けて理由を問うべく口を開くが、それは最後まで言い終わらぬうちに閉ざされた。

酒場と食堂を兼ねた娼館の一階——外の通りに面した扉越しに、突然強い殺気が放たれ察知したアンジェリカが言葉を止めたのだ。無論、ヴァルトもそれを察知していたのだが……皿に残された料理を片付ける作業を淡々とするだけで、アンジェリカのように表立って警戒する事は無かった。

「邪魔するぜ？」

凄まじいまでの殺気が放たれた直後、扉が粗野な大声を伴って乱暴に開け放たれる。

扉の向こうから現れたのは声と同様、粗野な外見の大男だった。体格もさることながら、頭を綺麗に剃り上げジャラジャラと音が鳴る背嚢を背負って現れたその姿は、見るからに荒事専門の雰囲気自身に纏っていた。

「……“鉄球のゴーディ”……何の用かしら？」

「おうおう。俺様の名前をご存じたあ、嬉しいねえ。あんたがアンジェって女か？ それとも俺様の名前が有名になっただけか？」

「自惚れが過ぎるわね。それと私を呼ぶ時は“アンジェリカ”と呼びなさい」

嫌悪の色を滲ませた視線で大男——ゴードイとを睨み付けながら、アンジェリカは静かに立ち上がると自然な動作で二人の少女を庇うように立ち位置を変えた。

一見すると、娼館に入ってきた客を出迎えただけの接客にも見える。ヴァルトはその気配さえ感じさせない、自然なアンジェリカの動作に内心感嘆を覚えた。

それでもヴァルトは自ら動く事をしなかった。食後の茶を啜り、我関せずとばかりにどっかりと椅子に座ったまま傍観を決め込む。

「……悪いけど、用が無いならお引取り願うわ。ここは私の縄張りよ？ それとも……貴方はそんな事も知らないお上りさんなの？」
「がっはっははっ！ 気の強い女は嫌いじゃねえぜ、なあアンジェリカ？」

氷の様に冷めた視線と言葉をアンジェリカから受けてもなお、ゴードイは愉快だとばかりに大声で笑い飛ばした。

「なに、そう邪険にすんなよ、今日は客として来てんだ。それとも……何だ、あんたが俺様のお相手でもしてくれるのか？」

「生憎と、私は特別な客専門なの。それに今はお昼だからそっちの商売は開店前よ」

「それは残念だ。じゃあ飯だけでも食わせてもらうか……勿論、嫌とは言わねえよな？ 俺様は客なんだ」

アンジェリカが放つ嫌悪の意図を汲み、ゴードイはなおかつそれを逆手に取った発言を行う。アンジェリカが無言で肯定を洩々示した後、ゴードイは醜悪な顔に笑みを浮かべさらに言葉が続けた。

「ま、たまたま闘技場上がりの奴隷が臭くて潰すかもしれんがな？」

今度は明確な殺意が座っているヴァルトへと向けられた。

ゴーディが放つ大声と殺意はハッキリとしたものであり、陰悪な雰囲気をも素早く悟った二人の姉妹はアンジェリカの背後へと隠れる。ヴァルトも醜悪な笑みを浮かべる賞金稼ぎの予先が自分へと向けられた事により、渋々と視線を上げた。

「おい……」

「なんだ？ 気安く人間様に話しかけるなよ。闘技奴隷の豚が……」
“鉄球のゴーディ” ってのは、なかなかイカした名前だな。そいつは……頭がツル禿で鉄球みてえに光ってるから、そんな二つ名になったのか？」

木製のカップに入れられた茶を一気に飲み干し、それをテーブルに置いてヴァルトは不敵な笑みを浮かべる。ヴァルトがさりと云ってのけた嘲りの文句を前に、ゴーディは暫くの間言葉を失って立ち尽くした。

「ん……だと！ 俺様は禿じゃねえ！ これは剃ってるんだよ！」

「なんだ、剃ってるのか。道理で禿のわりにはカビみてえなもんがついてるなと思ったんだ。……そうだ、今日から“カビ頭のゴーディ”にしてみちゃどうだ？」

「ぐっ……ぐっ……」

顔を頭の頂まで真っ赤に染め上げながらも、必死に自分の頭を指差し抗議するゴーディだったが……ヴァルトの毒舌は止まらない。最初は喉の奥で笑っていたヴァルトの声も次第に堪え切れなくなり、大声へと変わっていった。

「ぷっ……ははははははっ！ おい、見ろよ！ カビ頭が茹で蛸になったぞ……いや、この場合は“茹で蛸が腐ってカビが生えたぞ”がいいか？ くっくくく……こいつは傑作だ！」

「ちよつと、もう……やめてよっ！ ゴーディ……あなた、プフッ……ここは食堂なんだから腐った物は御法度よ……」

怒りで顔を染めるゴーディを指差し笑うヴァルトを見て、アンジェリカも嗜虐心が擲られたのだろう。笑いを我慢出来ず、肩を震わせながらもヴァルトの言葉に調子を合わせた。

そんな二人の様子を見て、興味が沸いたのか——それまでの間、恐怖に身を震わせていたマリエラとソフィア姉妹もアンジェリカの背後からそっと顔を出し、ゴーディの顔をまじまじと眺める。

「……本当だ、タコみたい」

「たこー！ たこー！」

「ぐああああっ！ やめろおお！」

子供ながらの残酷な言葉が、容赦無くゴーディの心に突き刺さる。茹で上がった頭は頂点まで赤を通り越し……ドス赤く染め上げて、肩をわなわなと震わせている。

勿論、可笑しさでは無い。怒りが臨界点を超えているのは、傍から見ても明らかだった。

「ゆゆゆ……許さんぞっ！」

「ほう……？ どう許さんと言うんだ」

怒りによってゴーディの巨体から溢れ出す怒気と殺気ですらさして気にせず、ヴァルトは一層からかった口調で問い掛ける。

問い掛けに答えたのは、言葉では無く——宙を切る音と共に向けられた鉄球の洗礼だった。

その鉄球は黒々と光っており……ヴァルトが腕を回し、一抱えするのがやっと思える程の大きさであった。鉄球には太い鎖が付けられており、伸び切ったその先端をゴーディの手が握っている。

初撃で仕留め損なった事に対するゴーディの舌打ちも耳に入るが、ヴァルトは無言で床へと視線を移した。そこには、無残な姿を晒しているテーブルと椅子だった物が転がっている。荒くれ者も多く訪れる娼館だけあって、堅いキサの樹で頑丈に作られていたものだろう。だがそれらは、今では粉々に粉碎されていた。

「……やってくれる」

一気に膨れあがった攻撃の気配を察して、ヴァルトは咄嗟に床を蹴り、椅子を飛び越える形で後方へと飛び退いたのだが……どうやらそれは正解だったようだ。

何の材質で出来ているかは解らないが、ただの鉄で出来た鉄球程度ならば頑丈な家具がここまで粉々になるとは思えない。いくらヴァルトが頑丈だとしても、不意打ちでこんなものを喰らえば無事で済む筈が無かった。

「よくぞ、座った状態からアレを躲せたものだ！」

「お前……馬鹿だろう。こんな狭いところで、そんなにデカイ物を振り回せるのも思っているのか？」

「ふん！ この鉄球は俺様の手と同じよ！ どんな場所であろうとも振り回せぬ場所があるろうものかッ！」

言うが早い——、ゴーディは相当な重さがあるだろう鉄球を一気に自分へと引き寄せると、器用にもそれを小さな円運動だけで振り回し始めた。

大きな鉄球がゴーディの周りで回転し、空を切る不気味な音だけが食堂に響く。

「へえ……器用なもんだ」

「俺様の鉄球は自由自在ッ！ 幾ら障害物が多い室内とはいえ、安

心せぬ事だな！」

ゴーディの周囲を羽虫が如く纏わり付き、振り回される鉄球はその勢いをどんどん増してゆく。ついには常人の目には映らない速度となった時に、一際大きな音を立てるとその硬く重い鉄球が放たれた。

一抱えもある巨大な鉄球は暴力的なまでの勢いで、空気を押しわけヴァルトへと押し寄せる。遠心力も相成り、破壊的な勢いを保ち迫ってくる鉄球は見た目よりも大きく感じ、ヴァルトの距離感を狂わせた。

しかし、そこは幾度の死線をくぐり抜けてきたヴァルトである。身体へと当たる寸前に片足を横に素早く踏み出し、その攻撃を躲す。そのまま重心を前方へと傾け、ゴーディとの間合いを詰めようとした次の瞬間だった。

背後で何かが衝突する鈍い音がした直後、ヴァルトの首筋にチリチリとした嫌な感触が走る。本能が告げている警告に従い、ゴーディへと間合いを詰めていた身体を咄嗟に横へと倒すようにして無理矢理床を転がった。

「……ッ!？」

倒れる様に床へと這いつくばったヴァルトの上を、黒い物体が音を立てて通り過ぎる。その勢いは振るわれた時と全く変わらず……ヴァルトの上を通り過ぎた鉄球は、またもやゴーディの手元へと収まり周囲に不気味な音を撒き散らした。

——こいつは、一体……

これまで数多の手練れや魔物達と戦ってきたヴァルトも、初めて

味わった違和感を前に思わず眼を細める。どうも腑に落ちず、振られた鉄球がぶつかったであろう場所を確認するも……木製の壁は微かにヒビが入っているだけで、不思議な事に砕けていなかった。

あれほど大きな鉄球が全力で振るわれたのだ。鉄球に掛かる力は必ず何かに当たらなければ、勢いは止まらないだろう。

油断無く起き上がる寸前に、ヴァルトは床にも視線を走らせる。壁ではなく床へと落ち、鉄球の勢いが殺されたところをゴードイが素早く引き寄せた可能性を考慮しての事だった。だが、床に鉄球が落ちた形跡は何処にも見当たらない。

ヴァルトが感じた違和感の原因は、もう一つあった。

ゴードイの初撃を受けたテーブルと椅子の砕け散った姿、そして先程見た壁のヒビが脳裏を掠め、ヴァルトの思考に疑問として引っ掛かりを覚えている。

それぞれ二つの事柄が、一つの武器から繰り成されたものとして成り立たない事柄であった。だが事実、その成り立たない事柄が目の前で起きている。

つまり——ゴードイと呼ばれる目の前にいる男は、家具をも粉碎する鉄球を操れるという事だ。さらには、勢いを付けた二撃目は壁にヒビを入れる程度に抑える事も出来る。

それは……勢いを失った鉄球が床へと落下する直前で、あり得ない力で自分の手元へと引き寄せた事になる。

とてもではないが、人間程度の力では出来る芸当では無かった。力に関しては絶対ともいえる自信を持つヴァルトですら、同じ事をしろと言われたら即座に首を横に振るだろう。

鉄球を振るい、その勢いを殺すまでなら出来る。

……だが、振り回された勢いと同様の勢いを保ったまま手元へと

引き戻す術など無い。

「おい、カビ蛸頭……てめえ、どんな手品を使ったんだ？」

「クククッ……さあてな？」

「ヴァルト、気をつけて！ その鉄球は変よ。壁に当たって跳ねた様に見えたわ！」

「跳ねるって……鉄球がか！？」

アンジェリカの声にヴァルトは思わず、そちらへと視線を向ける。だが自分に忠告を発してくれるアンジェリカの姿が見える前に、視界の端で鉄球を振るうゴーディが映った。

「余所見は頂けねえな？ なあ、拳帝よお！」

声と同時に上段から振り下ろされた鉄球は、再び凄まじい勢いでヴァルトを地面へと叩き潰そうと飛来する。しかし、最初からその軌跡を読んでいたヴァルトにとっては、幾ら常人の目に止まらぬ速度の鉄球とて、躲す事はたやすい。

「……当たるかよッ！」

その場から大きく一歩だけ、後に跳ぶだけで悠々と鉄球を躲した——筈であった。

空しく地面へと突き刺さる筈の鉄球は、勢いもそのままにヴァルトの腹へと直撃する。

またもや首筋に嫌な予感が走るも、余りにも遅過ぎた警鐘を遥かに凌駕する痛みがヴァルトを襲った。

「ぐがっ……！」

「ひやははっ！ 殺ったあ！」

予想もしていなかった上、着地した直後で無防備だったヴァルトの腹を硬い鉄球が突き上げた。鉄球はそのままヴァルトの巨体をも易々と持ち上げて、食堂の壁へと叩き付けられる。

——あの鉄球、あいつは……!?

ヴァルトは鉄球が自分に届く前に確かに見た光景を、薄れてゆく意識の中で思い返す。

地面へと激突した硬いはずの鉄球がグニヤリと形を変えて、確かにアンジェリカの言った通り地面から跳ねていた。

聞いた限りでは信じられぬ出来事だったが、見えたものは紛れもなく事実である。……それはまるで子供が遊ぶ、荒糸で作った球の如く軽快に跳ねたのだ。

常識から逸脱した鉄球の不可思議な動きの原因を探る前に、新たな衝撃と激痛がヴァルトに襲い掛かった。失い掛けた意識が衝撃と痛みの為、再び強引にヴァルトを現実へと引き戻す。

断熱のために作られた木の壁を突き破り、その外側にある本来の石壁までめり込ませられたのだが、そんな事など分かる筈も無い。ただ喉からは声にもならない空気が胃から漏れ、先程平らげたものが込み上がってくる不快感も同時にヴァルトへと襲い掛かった。

痛みと不快感を押し殺して立ち上がろうにも、どういうわけかヴァルトの身体は全く動かなかった。何度か動かそうと試みるも、頭を強く打ち付けられた所為で身体が命令を受け付けない。他にも、直撃を受けた瞬間に肋骨が数本折れたのか……激しく咳込もうとする度に生暖かい、闘技場に居た間散々味わった鉄の味がヴァルトの口を蹂躪した。

ヴァルトは視界を確保しようと、埃と痛みで滲んだ鳶色の眼を何度か瞬きさせる。

だが……その視力が回復する前に、視界が黒い“何か”で一面を覆われた。

「これで……終わりにしてやるぜえええ！」

ヴァルトの視界を覆ったもの――、それはゴーディが再度振り下ろした鉄球であるという事にヴァルトが気付いたのは……耳鳴りが収まらない聴覚が辛うじて聞き取った、下卑たゴーディの叫びを聞いてからのことだった。

(1-5) 悲涙を生み出す拳

鉄球の一撃を食らったヴァルトを、壁へと叩き付けた後――。

ゴーディはすぐさま壁へとめり込んだ鉄球を引き寄せ、悠長に勢いをつける事無く再びそれを勢い良く振り下ろした。

砕け散った木材と埃が舞う壁穴に、再び大きな鉄球が吸い込まれてゆく。

鉄球が繰り成す鈍い衝撃は、二階建ての娼館そのものを揺るがした。

その振動が収まる前に再度、衝撃が走る。

娼館を破壊するかの如く、ゴーディは鉄球を振るい続ける。

誰も何も……言葉を告げる事が出来ないまま繰り返された凶暴な破壊行為は、十を数えた頃によりやく終わりを迎えた。

ゴーディは手元に引き寄せた鉄球を地面へと降ろした後、荒い息を吐く。

鉄球の大きさだけならば恐怖で身を寄せ合う姉妹の姉――マリエラ程度だが、その重さは呆然と壁の穴を凝視したまま固まっているアンジェリカの体重をも遙かに凌駕する。そんなものを先程までずっと振り回し続けていたのだから、呼吸が酷く乱れるのも当然だった。

肩で大きく息をしながらも、ゴーディは娼館の壁に開いた大穴か

ら視線を外さない。

追撃に追撃を重ねた甲斐があったのか、壁の大穴からはヴァルトの気配が完全に消えていた。

あれほどにまで強烈な、まるで砲弾と見紛うばかりの攻撃を幾度も喰らったのだ。さしもの拳帝といえども、今では息も絶え単なる肉の塊になっている事は想像に難くない。

「……………」

息を整えながらも、ゴードイは無言で内心から湧き上がる快哉に酔い浸る。

あの無敵無敗と恐れられ、“不死者”や“拳帝”と呼ばれた男を今まさに自らの力で殺したのだ。これから自分が歩くだろう栄光の道程を思い浮かべるだけで、顔がにやける事など我慢できる筈も無かった。

「へ……へっへへへっ！」

「……ゴードイ……あんた……っ！」

いち早く我へと返ったアンジェリカは、殺気にも似た怒気をゴードイへと放つ。しかし、当のゴードイは禿げた頭を満足気に一撫でして、にやける面を隠そうともしない。

「おうおう、怒ってるのかアンジェ？ 獲物はこの“鉄球のゴードイ様”が頂いちまって悪かったなあ！ まっ、壊しちゃった壁はきちんと弁償してやるから安心……」

だが、ゴードイの言葉は続かない。

今しがた浮かべていた笑みも次の瞬間には凍り付き、真っ赤になるほど血の巡りが良かった頭からは血の気が一気に失せる。“茹で蛸”と嘲笑われていたその顔は一瞬で氷蛸へと変化した。

「な……なっ……!？」

アンジェリカもゴードイ同様——声は抑えるも全身から血の気が失せ、突然膝が震えだす。

唐突にゴードイが開けた穴の奥から溢れ出した濃密な気配が、百戦錬磨の賞金稼ぎと一流の暗殺者をも恐れさせた。

それは殺気でも無く。

怒気でも無く。

ましてや……闘気でも無い。

——だが、それらの“全て”を含んだ気配だった。

云うならば——“歓喜”

それは、狂おしいまでの喜び。

狂喜、とでも云うべきものが漂っていた。

戦いの場にある事自体、似つかわしく無い喜び。

逆に……戦いの場であるからこそ、ぴったりと納まる狂気である。

その混沌とした気配が『見える』と錯覚できる程に濃密さを漂わせ、穴の中から霧の様に溢れ出す。食堂とその場にいる者は、混沌に犯され誰も言葉を発する事など出来なかった。

「……あ、……ああ。フオ……イ………全、く……」

未だに埃が舞う穴の中から、くぐもった低い声が聞こえる。

乱暴に破壊された――木の繊維が剥き出しとなり、ささくれだっている穴の縁を大きく無骨な手が掴む。皮膚に木が刺さり、手から血が滴り落ちた。

だが傷付く事すら構わず身体を起こし、姿を現したのは――“拳帝”と呼ばれ“不死者”とも呼ばれ、闘技場で畏怖された者ではない。

それは、世間で呼ばれた名からは余りにも掛け離れた……男の姿だった。

「楽しいなあ……ああ、全く楽しい！　なあ、そうだろう？　フオルトナ？　ルシィ？　こんなに楽しいのは……そうだ。花節の祭で、湖へ遠出に行った時以来だ……」

「ヴァル……ト？」

「なんだ？　……アンジェ、俺は今楽しいんだ。邪魔しないでくれ」

震える声でアンジェリカが無意識の問いかけに対し、これまでヴァルトと呼ばれていた男は軽く一瞥しただけだった。

口調とは裏腹にヴァルトの細い瞳に濃く漂う、憂いの色に気付いたアンジェリカが再び口を開くも――興味が無いとばかりに視界から姿を追いつき出され、喉元まで出掛かった言葉を嚥む。

アンジェリカは大きく二度三度と瞬きを繰り返し、穴から這い出てきたヴァルトを見つめる。なおも押さえようのない震えと奥歯が恐怖で鳴っていたが、それすらも忘れて凝視を続けた。

穴から這い出てきた男は、昨夜ベッドで幾度も肌を重ねたヴァルトに間違い無い。

断言も出来る。

だが——暗殺者と娼婦の二つの勘が違ふモノだと訴えかけてくる。そして、先程から“逃げろ！”と本能に警鐘を鳴らし続けていた。

アンジェリカは、まるで底の見えない井戸の闇を覗いてるかの様な錯覚を受ける。

“あれ”は恐らく、本来ならば人間風情が直視してはいけないうモノだ。深淵とも、闇にも感じられる気配に引き摺り込まれては……二度と陽の当たる場所へと戻れないかもしれない。

「——つくつそおおおお！」

突如、雄叫びと共に鎖が伸びる鈍い音がアンジェリカの耳へと届く。見るとゴーディが体の震えを押さえて、絶叫に似た叫びを挙げながらも鉄球を振り回し始めていた。

アンジェリカはなおも定まらぬ思考で、ゴーディを内心賞賛する。これほどにまで異質な気配を感じて、まともに行動……しかも、敵対行動をとれる者などそうはいない。もしいるとするのなら、超一流の戦士か……もしくは底が抜けた大馬鹿者ぐらいだ。

アンジェリカが感心したのも一瞬だけ、ゴーディが後者だということはずぐに知れた。

鉄球を振り回すゴーディの瞳からは、正気の色が全く伺えない。

——恐怖に心が飲み込まれてる……

アンジェリカが抱いた思いを裏付けるかの如く、ゴーディが振り回す鉄球にも怯えが表れ、先程まで流れるような鉄球捌きの色彩がなくなっている。今のゴーディの鉄球を見る限り、力任せにただ振り回しているだけなのは明白だった。

「フォルトナ、ルシィ……大丈夫だよ。心配しなくていい。もうすぐだ……もうすぐ、きつと……」

「なん……何だよ！ 何だ！？ お前は……！ 一体何なんだよお！」

完全に穴から姿を現したヴァルトの姿は、思わず眼を背けたくなる程に凄惨なものだった。着ていた服は擦り切れ、上半身は殆どの箇所から肌が露出している。さらに至る所からは血が流れ出ており、立っているのが信じられない程だった。

だが、問題はそこでは無い。

アンジェリカやゴーディの目に見えている目の前で、身体中に刻まれたヴァルトの傷がはつきりと塞がってゆく様子が、何よりの“異常”だった。

その目の前で行われている異常な光景が、ゴーディの恐怖感をさらに加速させる。

「なあ、お前……もっと強いんだろう？ もっと隠した力があるんだろう？ それを見せてくれよ、俺を殺せる力を……この、忌まわしい生を終わらせる力を……」

ゆっくりと……一歩ずつ床の感触を確かめる様に、ヴァルトはゴーディへと歩み寄る。顔は満面の笑みを形作り、両手も相手のすべてを抱き留めようとするかの如く大きく広げていた。

最初はヴァルトが錯乱しているのかとアンジェリカは疑っていた

が、先程こちらを見て名をしっかりと呼んだ時点でその可能性は否定されている。

意識がしっかりとしているからこそ、今ゴードイへと歩み寄っているヴァルトの存在は狂気染みた恐ろしさが秘められていた。

折れてあらぬ方向へと曲がっていた指は戻り、血が流れ出ていた傷口も既に塞がっている。

アンジェリカはその光景を、呆然と眺める他無い。まるで夢を――それも、とびきりの悪夢を見ているかの様な気持ちに包まれた。

「ノ…… “ノスフェラトゥ”」

脳裏にふとある名前が思い出され、アンジェリカは知らず知らずのうちに口ずさむ。

それは、誇張されて伝わったとばかりに思い込んでいた――目の前に立つ、常識から逸脱した存在に授けられた名であった。

ゴードイの精神が持ったのは、後退りを続け……丁度最初にヴァルトと対峙した時の距離を保った時だった。

恐怖心からずっと振り回していた鉄球を、遂にヴァルトに向かつて投げ放つ。それは攻撃と呼べるほどのものではない。恐怖の対象を自分から遠ざけるためだけの行動であり、力任せに投げられた鉄球は、ただ力自慢の素人が投げ放った様に勢いがなかった。

だがゴードイも、一流と呼ばれているだけあり体が覚えていたのだろう。放たれた鉄球は狙い変わらずヴァルトに向かって飛んでゆく。先程直投の軌道を見切っていたヴァルトを前に、単に投げただけという直線的な攻撃が当たる訳も無い。アンジェリカはそう判断していたのだが……一方のヴァルトは避ける素振りすら見せず、その場に立ち尽くしていた。

アンジェリカの後ろへと隠れ、震えていたマリエラとソフィアが小さく悲鳴を上げてアンジェリカの服を一層強く掴む。今は幼い姉妹達の身を第一に考えるべきなのだが、アンジェリカ自身も未だ身体に力が入らない。

この後起こるであろう惨事に対して、アンジェリカは懸命に瞳を閉じようとする。だが黒い大きな瞳はそれを拒否し、まるで魅入られたかの様に目の前で展開される光景から眼を離す事が出来なかった。

「こ、今度こそ……」

いくら力任せに投げただけとはいえ、大の大人以上の重量を持つ鉄の塊である。当たれば確実に先程同様、この薄気味悪い相手を壁まで吹き飛ばせるだろう。

ゴーディの醜い顔が、ようやく覚えた安堵に歪む。

だがそれは、ほんの一瞬にしか過ぎなかった。

「……何だ、これは？」

鉄球がヴァルトに襲い掛かり、再び壁際へと叩きつけられる音はいつまで経ってもアンジェリカの耳には入ってこない。代わりに聞こえてきたのは、ゴーディが恐怖の余り引きつらせて出す呼吸音と、静かに問い掛けるヴァルトの声だけだった。

「こんなものじゃないだろう？ さっきの勢いはどうした。骨を砕き肉を潰す……あの鉄球の破壊力はどこにいったんだ……？」

ゴーディに問いかけるヴァルトの声色には、心底不思議に思っている色があった。それと同時に、ただ無邪気に質問しているだけでも聞こえる。

しかし——、その無邪気な声色とはほど遠い姿は、見ている者に戦慄を与えた。

「……鉄球の中に刻印を仕込んだ刻印魔具で自在に硬度を操っていたのか、成る程。だが、こんなものじゃないんだろ？」

鉄球は当たる寸前で、ヴァルトが挙げた手によって止められていたのだ。それも片手のみで、一歩も下がること無く止められている。「どうした？ ほら、その程度じゃ……俺は死なないぞ？」

もう一度問い掛けるヴァルトの声色。そして、自分が絶対の自信を持っていた鉄球をいとも簡単に片手で止められている光景を前に——ゴーディに残されていたなけなしの理性が、今度こそ完全に吹き飛んだ。

「う……うあ……あああ。うわああああああっ！ 化け物。この化け物おっつ！」

半狂乱になりながらも、ゴーディは鉄球を戻そうと繋がっている鎖を力の限りに引っ張る。だが鎖は、引っ張られる度に鈍くジャラリと金属の音を響かせるだけだった。いくらゴーディが力任せに引こうとも、鉄球はヴァルトの手に吸い付いて離れない。

否——吸い付いている様に見えるが、実際は違った。

「どうして……そんな……」

アンジェリカはその目で見ている光景が現実とは思えず、ただ驚きのばかり目を見開く。

ヴァルトは鉄球を片手で防いでいた訳では無い。先程大柄なヴァルトをも容易く吹き飛ばした凶悪な塊を片手で“掴んで”止めていたのだ。黒い鉄球に指を食い込ませ、言葉通り“掴んで”いた。

「まさか、この程度なのか？ お前も弱いのか？ お前も俺を……殺してくれないのか？」

いくら引こうが寸分も動かぬ鉄球と、鉄が上げる軋みの振動が鎖を通じてゴードイへと伝わる。

この時、ゴードイにほんの僅かでも理性が残っていたのなら、直ちに鎖を離して“逃げる”という選択肢を迷わず取れていただろう。だが、恐怖によって完全に凍結された思考は……最も安易であり、最も最悪な選択を取ってしまった。

「ほら、早く……もっと楽しませてくれないか？ でないと、フォルトナとルシイが……また、消えちまう……」

「ひいひい……離せっ！？ いいから離しやがれっ！ こっ、この化け物っ！ 死ねシネシネ！ 死ぬええええっ！」

震える手へとより一層力を込め、恐怖で白くなった唇から短い言葉を呟きながら、ゴードイは鎖の持ち手に刻まれている刻印を撫でる。それが魔具を発動をさせようとしている事にアンジェリカが気付いた時には、鎖から鉄球へ紫電が走っていた。突如走った雷は、容赦無く鉄球を掴むヴァルトの身体へと襲いかかる。

紫電は青白い火花を散らしながら、ヴァルトの肉を焼き身体の芯である骨を焦がした。当然、ヴァルトが味わっている痛みは普通の人間ならば、一瞬の悲鳴の後に衝撃で息絶える程のものだ。

但し、“普通の人間”ならばの話である。

食堂内に食肉を焼く香ばしさとは異なる、人の肉が焦げる不快な臭いが立ち込めた。

「へ……へへっへへえへへ……っ！ ひいあ！ ひいいい……」

誰もが、臭いと人が目前で焦げてゆく異様な光景に唾然と言葉を失う中。ジャリ……と、床を擦る音だけが鳴り響く。それは今も紫電を大きな身体に纏わり付かせ、至る所から煙りとも水蒸気とも分らない揺らぎを立ち上らせている男の方から聞こえてきた。

ゴーディの目には信じられないものが映り、今度こそ絶句する。有り得ない。それは、決して有ってはならない事だ。

今まさに、ゴーディの抱く“常識”という常識全てが、根本から音を立てて崩れ去っていった瞬間だった。

今ゴーディが魔具であった鎖を通じ放った雷は、成人男性よりも数倍の身長を持つトロールですら絶命させる事が出来るのだ。人間ならば骨の髄まで焦がし、殺せるだけの力がある筈だった。

しかし、目の前の男は——“拳帝”と呼ばれた元奴隷闘士は……その雷を闘気のように纏い、何事も無いかのような素振りで一歩ずつゴーディへと歩み寄っていた。

ヴァルトが一歩進む度に、床に黒い足跡が焦げ残る。それは……死神の足跡を彷彿させる程、黒く禍々しく感じられた。

「これが、お前の力なのか？ こんなものが……？」
「っ……！ ひぐうっ！」

ゴーディは身体が恐怖で硬直し、指一本満足に動かす事も出来無い。既にゴーディの数歩前にまで歩み寄ってきていた男の雰囲気と言葉と共に一変し、死への恐怖がより身近へと迫る。

得体の知れない気配は掻き消え、代わりに怒気が——触れるだけで殺されてしまうかの様な殺気へと変わっていた。

——殺されるッ……！

ゴーディがそう思った時には、ヴァルトはもう手の届く所まで近付いていた。

「……もう、いい。もう……ルシイもフォルトナも“消え”ちまったよ……。お前じゃ無理だったんだ……。だから、お前もこの世から死んで消えろ……」

諦め、蔑み、失望。

それらの感情が全て混ざった瞳で、ヴァルトは目の前で震える男へと向かって空いている方の腕を伸ばす。ゆっくりとゴーディの禿げた頭を、血が残るも今では傷が完全に癒えた手でヴァルトは掴んだ。

未だ魔具から流れヴァルトの身体を走っていた紫電が、腕を通じてゴーディの顔へと流れ込む。

「……アワヴュッ！」

ゴーディが短く悲鳴を上げると、手から鎖が落ちた。魔具から魔力が途切れ、ヴァルトが握ったままの鉄球は雷を発する事無く単なる鉄の塊へと戻る。だが、ヴァルトは構わず指に力を込め続けた。鉄球にすら穴を開ける力で、ギリギリとゴーディの頭を締め上げていった。

「あが……あがっ……」

無言で口端を上げ犬歯を見せた笑顔を浮かべているものの、ヴァルトの眼は正反対の色を浮かべたままだ。それでも、命の灯火を握り潰すのを楽しむかのようにゆっくり……ゆっくりとゴーディの頭を締め上げる。

ヴァルトの指に力が籠る度、小さい悲鳴と骨の軋む音が食堂内に

木霊した。

「ヴァルト！ ……駄目っ！」

その時——我に返ったアンジェリカが声を張り上げ、咄嗟に静止の言葉を叫ぶ。

舌打ち混じりにヴァルトはつまらなそうな表情を浮かべ、そちらを一瞥する。その目に映ったのは美しい顔を蒼白に染めたアンジェリカと、妹を庇うように抱き締めたまま黙ってヴァルトを見据える姉のマリエラの姿だった。

「……邪魔するなよ、アンジェ。お前だって人の命を——」

吐き捨てる様に言い放つも……唐突に頭の奥が鈍い痛みを訴え、ヴァルトは言葉を止めた。

『俺にはな……俺には待ってる娘達がいるんだッ！　なのに、こんな所で……こんな所で……っ！』

過去に聞いたある男の声が頭の奥に響き、ヴァルトは半ば無意識に掴んだ頭を握る力を緩めていた。

——畜生っ！　こんな時に、何なんだ……

苦々しく頭の中で木霊する声に悪態を吐くと、ゴーディをその手から解放してやる。ヴァルトの手から離れたゴーディは声をあげる事無く、その巨体を倒れ込ませた。

絶命した可能性も示唆して、アンジェリカがその巨体の胸元を注視する。幸いにもゴーディはただ気絶しているだけの様で、口から

は泡を吹いているが呼吸は安定していた。

一方のヴァルトは深く溜息を吐くと、視界の端でアンジェリカと抱き合う姉妹へと目を向けた。先程まで身体を支配していた震えをようやく制御したアンジェリカと目が合う。震えこそ今では止まっているものの、黒く大きなアンジェリカの瞳に明らかな怯えの色が窺えた。

アンジェリカと姉妹の様子を見た後、ヴァルトは小さく自嘲の笑みを浮かべる。

ヴァルトはもう興味は無いとばかりにゴーディの体を跨ぎ、部屋の隅に置いておいた自分の装備一式が入った背負い袋を手にとった。無言で背負い袋に入った装備の音だけを鳴らし、食堂の出口へ向かって歩みを進める。

「世話になった……もう二度と会う事も無いだろう」

「あ……ちよっ！」

大通りに面する扉の前で立ち止まり、ヴァルトは振り返らずにたった一言だけ呟く。状況に思考が追いつかないも、制止の言葉を告げるアンジェリカを無視して扉へと手を掛けた。

その時、ヴァルトの身体に軽い……本当に軽い、衝撃が走る。

小さな気配がこちらへと向かって来ていた事は、ヴァルトも気付いていた。だが、敵意の無い薄い気配を避ける必要は無いと思いきのまま放っておいただけだ。

「マリエラちゃんっ！」

「……何だ、チビ」

ヴァルトは怒る素振りも見せず、感情を殺した瞳を腰の辺りへと

降ろす。破れて形を殆ど残していない服の腰辺りに小さな手が添えられて、小柄な人物——マリエラがしっかりと掴んでいた。先程の軽い衝撃は、出て行こうとするヴァルトを慌てて止めようとマリエラが体当たりした結果だった。

裾を掴むマリエラが浮かべる表情を見て、ヴァルトは思わず足を止める。

マリエラは震えながらも口を真一文字に結び、蒼い双眸には力強い輝きが見えた。揺るがない強い意志を宿した瞳のまま、マリエラは自分より遥かに大きなヴァルトを見上げて叫ぶ。

「……お父さんっ！」

「……えっ!? ヴァルト貴方……」

マリエラの放った一言に、アンジェリカは思わず動揺の声をあげる。だが、当のヴァルトは至って冷めた目でマリエラを見つめるだけだった。

「あの……おじさん、闘技場に……いたんですよね? その人が言ってたから……あの、お父さんを……グランと言う人を知りませんか……?」

ゴードイが現れるまでは大声を放ってヴァルトと料理を取り合っていたマリエラだったが、先程の光景を見て恐る恐る言葉を選んで尋ねている様子が伺える。手こそしつかりとヴァルトの服を掴んでいるが、その足は未だ恐怖の為か僅かに震えていた。

「……名を言われても分からん。何か特徴はねえのか?」

冷めた視線を送ったまま、それでも話を聞く気になったヴァルトに対してマリエラは必至に首を捻りながら言葉を選ぶ。

「えっと……えっと、あ! お父さん、首の所に大きな傷があって……それと、指が一本無いんです! 知りませんか? 何でもいい

んです、知ってたら教えてくださいっ！」

「……首に傷、指が無い……か」

ヴァルトは訝しげに呟くも、少女から聞いた特徴に当てはまる男を思い出す素振りは見せない。必至に特徴を挙げるマリエラからの言葉を聞いた瞬間には、既に頭の中で一人の男が浮かび上がっている。

それは不可思議な事に……今しがた頭の中で響いていた、声の主と完全に特長が一致していた。

マリエラの顔を見下ろしながらも、ヴァルトは過去に出会った男と交わした会話を思い出す。

『お前……奴隷しては目が生きてやがるな？ 面白え……』

『俺は奴隷じゃ無い！ 金が……どうしても金がいるんだ！』

『成る程。金に目が眩んだ“志願闘士”……か』

『うるさい！ 家族を守るためには……未来を勝ち取るためには金がいるんだ！』

『……どうした？ もう終わりか？ ……“未来を勝ち取る”んじやなかったのか？』

『俺にはな……俺には待ってる娘達がいるんだッ！ なのに、こんな所で……こんな所で……っ！』

鮮明に思い起こされるのは、会話だけでは無い。

自ら振るった拳と、男の命を終わらせた瞬間の感触まで——全ての事柄が鮮明に記憶として蘇り、ヴァルトの五感を刺激した。

——この娘達は……あの男を待っていたんだな。そしてあの男も、この娘達を守る為に……成る程な……これが、俺の罪に対する罰なのか……

マリエラが必至に見上げる中、ヴァルトは一度だけ瞼を閉じる。一つ大きな溜息を吐いた後、変わらぬ表情でマリエラを見つめ直した。

「知っている……」

「ほん……とう、ですか……？」

「……ああ」

驚きと喜びに眼を見開くマリエラを無表情で見つめながら、ヴァルトは自然と重くなる口で現実を述べる。

「その男なら、俺が殺し……」

「マリエラちゃんっ!？」

自分でも知らぬ間に眼を細め、真実を述べようとしたヴァルトだったが……突然自分へと寄り掛かってくる少女の身体と、彼女の名を呼ぶアンジェリカの叫びによって言葉が遮られた。

咄嗟にヴァルトは手を伸ばし、小さな体が崩れ落ちない様に受け止める。アンジェリカが駆け寄り、白くなった顔色を伺う間もヴァルトはその光景をぼんやりと眺めているだけだった。

気を失っているだけだと分かり、アンジェリカが安堵の息を吐く様子もヴァルトは眼に入らない。その視線は呆然と、ヴァルトの服

の裾を掴み決して離そうとしないマリエラの小さな手だけを見つめ続ける事しか出来無かった。

氣を失っても、しっかりと服を握っているマリエラの小さな手。それはまるで――離してしまうと最後、父との繋がりが切れてしまうのでは無いかとばかりに強く、強く握られたままだった。

(1-6) 目的定まらぬ拳

先の出来事から結局——気を失ったマリエラがヴァルトにしがみついたまま、離れる事は無かった。さらには妹のソフィアも先程ゴ―ディと対峙していた時に漂っていたヴァルトの尋常成らぬ気配に当てられて、いつの間にか気を失い床へ横たえられていた。

その所為で出て行く気が削がれたヴァルトは、アンジェリカに指示されるがまま洪々マリエラを抱きかかえて、二階にある宿の一室へと連れて行かれる羽目となったのだが……

——パンツ！

姉妹を一つのベッドへ寝かせた直後。

ヴァルトが溜息を吐く間も無く、アンジェリカから平手打ちが飛んできた。

突然軽い音と共にヴァルトの頬に衝撃が走り、アンジェリカの手で容赦無く打たれた頬が赤く染まる。

躲すのも億劫でされるがままに打たれたヴァルトは、その事に対しては何の感慨も浮かばない。ただ、“何故自分が打たれたのか”という疑問だけがヴァルトの頭に浮かんでいた。

「……何故か、聞いてもいいか？」

「ヴァルト……貴方、さっきマリエラちゃんに何を言おうとしていたの……？」

昨夜行われたばかりの情事が嘘の様に、アンジェリカの視線は冷たい。黒い大きな瞳は怒りの余り細められ、まるでヴァルトを蔑んでいるかのようだった。

ヴァルトは小さく息を吐くと、アンジェリカが想像していた通りの言葉を告げる。

「こいつらの親父は……俺が殺した。それを言おうとしただけだが」「やっぱり……ねえ、一体どういうつもりでそれを言おうとしたか聞いてもいいかしら？」

「“どういうつもり”もあるか、事実を言うに理由などいるのか？」「——ッ！ ヴァルト、貴方……その“事実”を言う時に、一瞬でもこの子達の事を考えた？」

アンジェリカはヴァルトが平然と告げたあまりの言い草に、思わず声を荒げそうになる。だが、すぐ脇のベッドで寝息を立てている二人を起こさぬように息を吐いて心を落ち着かせた。

「……この子達の、唯一のお父さんなのよ？」

「だったら何だっていうんだ？ 俺が殺したのは事実だ。俺がこいつらの親父を殺した。……それとも何か？ お前は殺した俺が悪いとでも言うのか？ このガキ達から父親を奪った俺が悪いのか？」

「ちょっと、何も私はそんな事言っていない……」

「お前が言っているのはそういう事だ！ 闘技場に上がればそこは殺し合いの場だ。こいつらの親父は自ら望んでそこに上がり、結果負けた。そして死んだ。弱かったから死んだ！ 生きるか死ぬかしかな選択の無い馬鹿げた場所に立ったから……俺に殺される羽目にな

ったんだよ!」

なるべく小声を心掛けるアンジェリカとは対照的に、ヴァルトは徐々に声を荒げ感情任せに言葉を吐く。胸の内に抱いていた感情を声に出して紡いでゆくうちに先程の鈍痛がまた蘇るが、今度は関係無いとばかりに捲し立てた。

「……うつ……うつん……」

声を抑えず早口で喋るヴァルトを慌ててアンジェリカが制止した時だった。

ベッドに寝ていたマリエルの中から小さな呻きが漏れ、僅かに寝返りを打つ。その声が耳に入った時には自然と、アンジェリカとヴァルトはベッドに視線を向けていた。

ベッド脇で行われた言い争いで目覚めるかと思ったマリエルだったが、幸いにも目覚める気配は見られない。二三言口を動かした後には心地よさそうな寝息へと戻り、再び深い眠りの底へと落ちていった。

目が覚めかけた不快感からか、少し眉を潜めた寝顔で眠るマリエルの頭をアンジェリカはそっと優しく撫でる。眠っていても頭を撫でられ、多少は安心したのだろう。マリエルの寝顔が安らかなものになったのを確認すると、ジェリカはドアへと歩み廊下へと足を踏み出した。

此处で話をしていたら、そのうち目を覚まさせてしまうに違いない。

何も言わず“場所を移そう”と視線のみで意図を伝えてきたアンジェリカに対し、ヴァルトも無言で廊下へと足を向けた。

廊下へと出てドアを閉める間際、僅かに見えた隙間からは姉妹仲

良く眠る姿を確認したアンジェリカは目を細める。

「あの子達はもう……二人っきりになっちゃったのね……」

寂しげにアンジェリカは呟くと音を立てない様にそっと扉を閉ざし、ヴァルトがいた方へと振り返る。てっきりそこにヴァルトの姿があるものだと思っていたのだが、下へと続く階段を降りる大きな背中が目に入りアンジェリカは目を見開いた。

「……ヴァルト！」

慌てて名を呼びながら後を追って階段を下りるも、ヴァルトは振り返る気配すら見せない。背負い袋を肩に掛けたヴァルトは大腿で半壊した食堂を通り過ぎ、アンジェリカの制止も聞かず外へと続く扉を押し開いていた。

「ちょ……ちょっと！ 話をするなら食堂で十分でしょう？」

「話？ なんの事だ？ 話す事は……もう無い」

ヴァルトは扉を押し開いたまま、振り返らずに答えた。あくまでも対話を拒否するその姿勢を前にアンジェリカは呆れ半分、憤慨半分に足音荒く外へ出ようとするヴァルトへと近付く。

「ヴァルト。貴方、さっきから少しおかしいわよ」

「……あのガキには“お前が”“好きに”言えればいい。優しい暗殺者様は、あいつらに偽りの希望を与えてやりたいんだろ？」

「私の事は別と言ってもらっても構わない。だけでも……相手はまだ、子供なのよ！？ 希望を持たせてあげて何が悪いって言うのよ！」

「いいか悪いかは、真実を知った時にあいつらが判断する事だ。違

うか？ ……それは兎も角、お前から話せばいいだろ？ お前は事実を既に知った、後の事は知らん……元々、ガキは好かねえんだ」

それだけを言い捨てるように吐くと、ヴァルトは開いた扉から外へ出ようとする。

幾ら制止しても聞かないヴァルトをアンジェリカは強引に押し止めようと手を伸ばすが、ごく自然な動作でアンジェリカの手をするりと躲して、ヴァルトは娼館から足を踏み出した。

腕を躲されたアンジェリカはヴァルトを呼び止めようと口を開く。だが、一瞬だけ後ろを振り返ったヴァルトと目が合い、その動きは完全に凍り付いた。

「ヴァルト、一体何が貴方を……そこまで意固地にさせているのよ？」

無然と手を伸ばしたままの姿勢で固まったアンジェリカは、呆然と呟く。

だが、答えなど到底返ってくる筈も無く——ただ立ち尽くしたまま、大通りの人混みに紛れてゆくヴァルトを見失うまで眺める事しか出来無かった。

ヴァルトは人通りの少ない中通りを、あても無く歩き続ける。

今歩いている特別地区は娼婦や男娼などを扱う店と、賭場が設け

られている下層地区である。他にも傭兵の様に余り品がいいとはいえない連中が集う酒場や店が多い為、まだ陽も高い今からでも店を開けている所の方が多い。それに伴って、大通り以外は必然的に道行く人の数も少なかった。

道のあちこちにある吐瀉物の残骸や汚物の所為で空気が淀み、一言では表現し難い臭いが鼻を不快にさせる。奴隷の時は日常的に嗅いでいた悪臭も、今のヴァルトにとっては不機嫌さがさらに増すばかりだ。

さらに――先程から、いくつもの気配や視線を感じていた。無論、好意的なものでは無い。いずれも、ヴァルトの隙を窺うような不快なものばかりである。

「……死ねやああ！」

突然、路地にいた男が洗練さの欠片も無い殺気と共に白刃を煌めかせて躍りかかって来る。ヴァルトはその男に一瞥もくれず……相手が振りかざした長剣を躲して、焦点の定まらない目をした顔面に無言で裏拳を食らわせた。

「……ゲブウツ！」

間拔けな声を出して地面へと倒れ込む男に視線を向ける事無く、ヴァルトは握った拳をさらに強く握り締める。

――畜生、苛々する……

通りにいる者達を怯えさせるヴァルトの舌打ちと眼光の鋭さは、何もこの場所が不快に感じるからだけでは無い。先程まで居た娼館でのやり取りが、いつまで経っても脳裏から離れなかったのだ。

『……この子達の、唯一のお父さんのよ?』

『俺にはな……俺には待ってる娘達がいるんだッッ!　なのに、こんな所で……こんな所で……っ!』

頬を叩いた後で告げられたアンジェリカの言葉と、悲痛な表情。

さらには過去に戦った男の言葉が頭に反芻し、こびり付いてヴァルトの脳裏から離れない。

八つ当たりと解っているながらも、裏拳を食らい脳震盪を起こして倒れている男の襟首を掴んで持ち上げると、その男を路地の一つへと放り投げた。男が飛んでいった路地の奥から何かが潰れる音と別の短い悲鳴が聞こえ、ヴァルトを窺っていた気配が一つ消え失せる。

それでもヴァルトの気は少しも晴れず、それどころか逆に苛立ちが募るばかりだった。

——もういいだろう。もう……過ぎた事じゃねえか!

心の中で言い知れぬ不快感に毒付きながらも、もう少しで特別地区を抜けた大通りへと出る寸前だった。不意に、路地側からヴァルトに向かって声が掛けられた。

「……よお……ノスフェラトゥ。今日は……随分とご機嫌斜めじゃないか……」

「……あ?」

突然掛けられたくぐもり掠れた声に、ヴァルトは睨み付けながらそちらへと視線を向ける。決して敵意の無い言葉に対しても、陰悪

な態度を露にするが……汚物に塗れた路地裏の隅に見た事のある姿を捕らえ、ヴァルトは目を僅かに見開いた。

それが路地裏に転がる酔い潰れた人間や、厄介事に巻き込まれて物言わぬ冷たい肉塊になったモノならば見慣れたものだ。さして驚きもしないし、構う事も無い。

だが……そこで自分へと声を掛けた人物が、奴隸という身分から開放された日に、初めて美味しい物を食わせてくれた——気の良い串焼き屋の店主ならば話は別だ。

「あんたは……」

「……よお。お互い……一日会わないだけで……散々な、変わり様……だな」

路地裏で座って壁に背を預けながらも、弱々しくヴァルトに向かって手を挙げる串焼き屋の店主は決して酔い潰れていた訳では無い。その姿を見れば、彼の身に何があったかは一目瞭然だった。

衣服は胸元から縦一直線に破れており、辛うじて服の体裁を保っていた。その服でさえも所々が血で滲み、破れた箇所から見える肌には何箇所も内出血で変色している。

暴行を受けてから結構な時間が経っているのか……顔は大きく腫れて内出血を起こしており、ヴァルトも声を聞かねば一瞬誰だか判断に迷った程であった。

「おい、昨日の串焼き屋じゃねえか！ 一体、何があった!？」

ヴァルトは慌てて駆け寄り、壁に背を預けているが今にも倒れこみそうな店主の不安定な身体を起こしてやる。

「……うつ、痛っつ！ ……はは……、無骨なのはいいが、こっちは怪我人なんだ。もう……少し、手加減してくれ……ぐっ……」

口に笑みを浮かべ、まだ軽口を叩くだけの余裕はある様にも見える。だが、その身体は予想よりも酷かった。ヴァルトは店主の身体を抱きかかえて初めて、片方の腕が折れ本来なら曲がらない方向を向いている事に気付いた。医術士に見せない限り断言はしかねるが……大凡の見立てですら、胸の骨も折れている事が分かり、生きている事が不思議な程である。

「……何があった？」

言葉に少しばかりの怒りを滲ませて、ヴァルトは静かに問い掛けた。

「へっへ……。何、ちょっとした商売上の揉め事ってヤツさ。……それより悪いが、こうしてまた再会出来たのも何かのよしみって事で……家まで送ってもらえないか？ 昨日から帰って無いもんで……カカアが心配しちまうといけねえ……」

「分かった、案内してくれ」

ヴァルトは呻きながら半身を起こした店主に手を貸し、立ち上がらせる。幸いにも折れていたのは片方だけだったので、そちらの腕を抱えて歩き始めた。

互いに言葉を交わす事も無く。時折方向を指示する店主の言葉に頷く程度のやり取りで、二人は道をゆっくりと進んでゆく。

やがて、ゆっくりながらも街の中心に近い大通りから一本外れた場所——店主が露店を出していた中通りにまで到着した。

元が店であったかの判別さえしかねる程に、露店も散々な状態になっていた。

店主と同様、無残に破壊された露店の前に、屈み込んで懸命に片付ける年配の女性の姿を捉えた店主が大声で女性の名を呼ぶ。

名を呼ばれた女性は驚いた様に顔を上げ、ヴァルトに肩を借りて歩く店主の元へ慌てて駆け寄る。女性がこちらへと来る様子を見て店主は顔を上げると「うちの力カアだ」と片眉を上げてヴァルトにしか聞こえない声で囁いた。

駆け寄って来た女性に対し、店主はなるべく明るい声で言葉を告げる。

「あっ！ あんたあ……！」

「よお……心配掛けてすまなかったなあ」

「心配って……あんたっ！ 大丈夫なのかい！？」

「……ん？ へへっ……少し手酷くやられちまったが……まあ、何てこたあねえよ」

無事な事を表現しようとしたのか、店主はヴァルトの腕から離れると腕に力瘤を作る真似をする。だが当然ながら腕が半分も上がら無いうちに、痛みで顔を顰めて呻いた。

「おいおい、あまり無理するな。あんた、腕だけじゃなく胸の骨も折れてんだぞ……」

心配して顔を覗き込む妻に店主の身体を預けた後、ヴァルトは屋台の様子を見渡し店主へと問い掛けた。

「しかし、あんただけじゃなく店までこの有様とは……一体、何があつたんだ？」

「……へへっ、こんな事はよくある事でさあ……」

「あんた！ いい加減にあいつらと事を構えるのはよくなって、この前言ったばかりじゃないか！ ……このままじゃ、いつか本気で死んじゃうよ！」

「うるせえ！ こっちにだって商人の意地ってもんがあらあな！」

おめえは黙ってろ」

「“あいつら”……？」

唐突に始まった夫婦喧嘩を眺めながらも、ヴァルトの脳裏に昨日出会った二人の男が蘇った。ヴァルトが屋台へと赴き、店主に言いがかりをつけていた二人組だ。顔は思い出せないが、彼等の言っていた言葉が頭の隅に引っ掛かりを覚える。

「なあ、オヤジ。聞いてもいいか？ “あいつら” って、昨日あなたの屋台で難癖つけていた奴等か？ 確か、アルギ何とか……一家とか言ってたが」

眉を顰めヴァルトが訝しげに問い掛けると、串焼き屋の店主は伏し目がちにも笑顔を浮かべて言葉を返した。

「ははっ、情けねえ話でさあ…… “ごろつき風情に屈してたまるか” って、突っ張った挙げ句がこの様なんで…… 笑い話にもなりやしない。へへへっ……」

「俺の……所為か？」

屋台の破壊に加え、店主への暴行が行われたのが昨日の今日である。

ここまで大胆な狼藉をいきなり働くような輩ならば、店主は当の昔に酷い目に合わされていたことだろう。それが急に行われたとなれば、何かしらきっかけがあつての事に違いない。

ヴァルトはその“きっかけ”が、昨日自分が起こした事件である可能性が高いと考えたのだ。

「……別にアンタの所為じゃないさ。……そろそろ、潮時だっただけなんだよ。奴等に突っ張り続けて此处で売するのも……限界だったって事さ」

「そうか……分かった」

あくまでもヴァルトの所為では無い。と笑って言い放つ店主の横顔を見て、ヴァルトはそれ以上返す言葉が見当たらなかった。奥歯を噛み、夫婦から見えない位置で拳を握り自身の爪を皮膚へと食い込ませる。

「まあここで嫁さんに会えば、後は何とか帰れるだろう？ ……俺は少し野暮用が出来たから、ここらで行かせてもらうぜ」

「“野暮用” って、ノスフェラトゥ……まさかお前さん……」

ヴァルトから漂う雰囲気は僅かに変わったのを悟ったのか、店主が顔を上げて驚いた様にヴァルトを見上げる。その視線と言葉の意図に気付いたヴァルトは、小さく肩を竦めて返事を返した。

「勘違いするなよ。俺は昨日アイツ等に言ったんだ、あんたも聞いていただろ？ “暴力を飯の種にしたけりや俺に断ってやれ” っとな。こっから先は俺の得意分野さ」

「……だけでも」

口端を上げて皮肉めいた笑いを向けるヴァルトに対し、店主はさらに言葉を続けようと慌てて口を開く。だがそれより早く、ヴァルトは懷から取り出したモノを指で弾いて店主へと投げ渡した。

「……俺がうっかり渡し忘れる前に、取っといてくれ」

「こ……こりゃあ!？」

慌てて受け取ろうとして地面に落としてしまったそれを拾った後、落ち着いて手の中にあるモノを見た店主が驚きで素っ頓狂な声を出す。主人の変貌に傍で支えていた女性も店主の手を覗き込み、そこに輝く一枚の貨幣を見て小さな悲鳴を上げた。

「きつ、金貨じゃないか……! ……あんた、この人に一体何をしたんだい？」

「オヤジさんに、昨日の串焼きの代金を払い忘れていたんでな。こいつはその代金だ……取っといてくれ」

「あれは、儂の奢りだと……それに金貨なんて大層なモンは貰えねえ！」

「借りを作ったまんまっつてのは、どうも俺の性に合わ無えんだよ。それとな……オヤジ、あんたの串焼きは本当に美味かった。またそれで俺が食いに来た時、焼ける様にしといてくれや」

「旦那……」

腫れた顔を歪ませ、目からはボロボロと涙を流して泣き咽ぶ店主の肩をヴァルトはそっと叩く。

人に感謝などされる行為からは何年も遠ざかっていた為、胸の奥にむず痒い気持ちがある。だがそれを悟られない様に、ヴァルトは悪戯っぽく笑った。

「俺は“ヴァルト”だ。親しい奴にはそう呼ばせてる。オヤジ……あんたとは肩書き抜きで、これからも楽しく付き合おうじゃないか」

そう言っただけでヴァルトは行き場の無い感情を誤魔化す為、肩からずれていた背負い袋の紐を戻しながら、泣き続ける店主とその妻に対して優しい言葉を掛けるのだった。

寄り添って自分へと感謝の言葉を述べる二人の夫婦を眺めているうちに——不思議と先程までヴァルトが内に抱いていた不快な感情は消え失せていた。

（１－７）暴風撒き散らす拳

ヴァルトは大通りを暫く歩いているうちに、自らの馬鹿さ加減に頭を痛める羽目となった。

迷う事無く進めていた足をピタリと止め、眉間に皺を寄せて短く切った赤毛を乱暴に搔く。

——……そういや、アルギ何とか一家のアジトって……何処だ？

昨日まで闘技奴隷として街はおろか、五年の間に渡り闘技場の外へ一度も出た事の無いヴァルトが、無法者達のアジトがある場所など知る筈も無い。また、それを知っている人間など極めて少数だろう。

今日は市が立つ日では無いし、今ヴァルトがいるのは大通りだが特別区に近く中央へと向かう大通りの中でも、ここは端に位置する場所だ。時刻は夜の初鐘には少し遠く、通りは閑散としており人通りが殆ど無い。

仮に行き交う人が多くいたとしても……昨日痛めつけた男達かその仲間では無い限り、アジトの場所を知っているとは到底思えなかった。

ヴァルトは近くにあった民家の壁に寄りかかりながら一人考える。昨日遭遇した様な輩の姿でも目に入れば、叩きのめして居場所を無理矢理にでも聞けば良い。ただ、こういう時に限って運良く視界に現れる気配は無い。

幾ら無い知恵を振り絞ったところで解決策など思いつくわけも無く。脳裏に少し前まで一緒にいたアンジェリカが存在が浮かび上がる。彼女の様に裏の仕事を請け負っている者に聞けば、恐らく場所程度は知っているだろう。

ヴァルトは浮かび上がったそんな考えを、首を振って打ち消した。当然ながら、ヴァルトにも意地というものがある。喧嘩別れの様な形で去った相手の元へと戻って、事情を話すなど到底出来る筈も無い。

通りを歩く人が難しい顔をして考え込むヴァルトを見て、何事かと視線を向けるがヴァルト本人は自分から滲み出ている険悪な雰囲気には気付いて足早に去ってゆく。そんな中、不意に上がった陽気な声に、ヴァルトは思考を中断させられた。

「やあ、こんにちは。難しい顔をしたそこの人」

「……誰だ？」

不意に掛けられた声の方へ視線を向けると、ヴァルトから数歩離れた場所に若い男が立っていた。見たところ二十代前半だろうか？

顔には如何にも好青年だという人の良さそうな笑みを張り付かせ、皺一つ無い仕立てのいいスーツに身を包んでいる。男は軽く目が合ったヴァルトに対し、丁寧な会釈をした。

一つ一つが丁寧な仕草を見せる男とは対照的に、ヴァルトは無愛想な視線で男の様子を観察する。その視線に警戒の色があるのは、急に声を掛けられた所為だけではない。ヴァルトは男に話し掛けられるまで、その存在を全く感じ取れなかったのだ。

それだけならば、アンジェリカとて出来るだろうし、さして警戒はしなかっただろう。しかし……男を視界に納めてこうして対しているにも関わらず、今でもその気配を全く感じる事が出来無いの

だ。今日に入っている存在感ですら虚ろなもので、少しでも目を離せば瞬く間に見失ってしまうのではとさえ感じてしまう。

「お前……見掛けによらず、変な特技持ってるんだな」

「初対面なのに、随分なご挨拶ですねえ。僕は通りすがりの者です。……と言っても信用できませんよね？ ……ああ、そんなに睨まないてください。危害を加えるつもりなんてありませんし、加えられるとも思ってはおりませんから」

「……へえ、中々殊勝なこった。本気でそう思ってるのなら、大したものだ」

ヴァルトは終始好意的な笑みを見せている男に対し、おどけた様子で肩を竦めてみせる。だが、相変わらず男に向けている目は鋭いままだ。

「本当に思っているんですけど……ねえ……」

男は困った様に顔を歪めると、後頭を掻いて苦笑した。指が動く度に、絹の様に細かい銀色の髪がさらりと揺れる。整った容姿に合わせたその仕草は妙に似合っており、本来ならば嫌悪を抱く動作では無い。それでも男から終始漂う違和感は拭い切れるものでは無かった。

「それで、俺に一体何の用だ？」

「これは申し遅れました。僕の名前はラズーロ。……姓も持たない、しがない街の厄介者ですよ。本日は“ノスフェラトゥ”のヴァルトさんに御挨拶に伺いました」

「おいおい、俺は見も知らぬ奴に挨拶される覚えはねえぞ？」

「これは耳に挟んだのですが……貴方が昨日仰ったのでしょうか？」

“暴力を飯の種にしたければ断りに来い”と

男——ラズーロの言葉にヴァルトの口端がピクリと跳ねる。その

まま片方の口端を上げ、不敵な笑みを描いた。

「そいつは律儀なこった。……丁度良かった、俺も聞きたい事があるってお前等を探してたんだ」

「おや、そうだったんですか？」

「……お前達のアジトを教えて貰おうか」

そう言うと同時に、ヴァルトの身体は動いていた。

壁に背を預け傍から見ると自然な仕草だったのだが、密かに後ろ足で溜めていた力を爆発させて、片脚の臂力のみで一気にラズーロへと迫った。後足の置かれていた石畳に足の形が刻み込まれた事からも、その間を詰めた凄まじい威力が解る。

ヴァルトは殺さぬように、尚且つ気絶させないように手加減をしながら右手をラズーロの腹部へと狙いを定めて打ち出した。

「……お前、面白い事をするな」

笑みを浮かべたヴァルトの口から、思わず感嘆の文句が零れる。腹部へとめり込む手ごたえは訪れない。右手にはただ虚しく空を切る感触だけが残り、ラズーロの姿は拳の先には無かった。

速度といい打ち出した間といい……普段と寸分変わらず完璧な突きを繰り出してしまい、ヴァルトはもう少し手加減をした方がよかったか、と少し後悔した程の突きだった。にも関わらず、拳は当たる事無く空を切っている。

「音に聞いていましたけど、本当に貴方は短気なんですね。僕はやり合う気が無いっていうのに……」

風に混じるように、呆れた調子で告げるラズーロの声がヴァルトの耳孔に届いた。ラズーロもヴァルトと同様、声に楽しさが滲んで

いる。

「……気味の悪い野郎だ。もう殴らねえから姿を見せろ」

「困った人ですね……でも、やっぱり貴方は面白い人だ。あ、そう
だ……アルギニン一家のアジトでしたら、僕がお教えしましょうか
？」

「どういう事だ？ お前はそのアルギニン一家の人間じゃねえのか
？」

姿は見えないものの、耳元で聞こえるラズーロの言葉につい毒気を
抜かれそうになる。だがヴァルトは声色を低くして、相手を威嚇
する姿勢は決して崩さなかった。

「あははははははっ……面白い冗談です。僕をあんな低俗な小僧共
と一緒にしないで下さいよ。さて……東の三番地区で、ジョッキに
三本の傷が入っている看板を掲げた酒場があります。そこをお尋ね
ください。貴方が求めるものは、きっとそこにありますよ」

心底楽しそうに笑うラズーロの声だったが、相変わらずその姿は
ヴァルトには見えなかった。明確な敵意が無い事は判るものの、相
手の姿も気配も察知出来無い。にも関わらず声だけがヴァルトの耳
横でハッキリと聞こえる。

ヴァルトはその不可思議な現象に対して、嫌悪の色を露にした。

「そうか。素直に礼を言いたいとこだが……どうして、わざわざ俺
の前へ出向いてそんな事を教える？ お前は何者なんだ？」

「僕の名前は、ラズーロです。それ以上でもそれ以下でも無い、今
度からちゃんと名前と呼んで下さいね。お教えする理由は簡単な事
ですよ。一つは“利害の一致”ですかね？ 僕もあの低俗な奴等が
気に食わないんで。もう一つは……僕はこの街の傍観者として、貴
方に興味を持ったからです」

「……お前みたいな奴に興味を持たれても、大して嬉しくねえよ……」
「ラズーロ、です。……まあ、今回はいいですけど。……いずれ、また会った時はちゃんと名前で呼んで下さいね」

その言葉を最後に、ラズーロの澄んだ声が空気に溶け込むように消えた。

ヴァルトは素早く感覚を研ぎ澄まし、周囲の気配を探る。幾ら探っても、何の気配も感じられなかった。

そこで漸く、ヴァルトはおかしな事に気付く。

——“気配が全く無い” などある筈がねえ……

ヴァルトが素早く視線を動かし、周囲を見回しても結果は同じだった。ラズーロはおろか他の大通りを歩く人の姿も無ければ、馬車が走る様子も無い。

“何の気配も感じない”

それは大通りの端とはいえ……夕方に近い今の時間では決して有り得ない事だ。

ヴァルトはそのおかしさに気付き、背中に冷たいものが流れる。すると——激しい耳鳴りが襲い掛かってきた。耳鳴りが収まった直後、ヴァルトの五感が様々な気配や道を歩く人々の姿を捕らえる。

「成る程。……世の中には面白れえ事が出来る奴もいるもんだ」
何度か細い目を瞬きさせた後に、ヴァルトはゆっくりと溜息を吐いた。異常だった世界が元に戻った現象に対しては、過ぎてしまった事なのでさして興味も無い。

「さて……東三番にあるジョッキの看板に三本の傷ねえ」

ヴァルトは人知れずニヤリと獰猛な笑みを浮かべる。これからする事に対する準備運動代わりに首を大きく一度鳴らしながら、その場を後にするのだった。

その場所はまさに“寂れた”と表現するに相応しい場所にあった。

貴族街区と中等民区の丁度狭間——そのどちらともいえない場所で、互いの区を分ける隙間で隠れる様にひっそりと酒場が建っていた。

一見普通の酒場に見えるのだが、酒場の入り口には屈強な男二人が並んで門兵のように見張っている様子はただの酒場ではあり得ない光景である。

「おい」

真っ直ぐ上へと立てた長い槍を握る手に力を込め、片方の男がもう一人の見張りへと声を掛ける。首を傾げつつ問う男の視線の先は通りへと向けられていた。

「……今日は客が来る予定聞いてるか？」

「いや、聞いてないな？」

答えたもう一人も槍を持つ男と同様に、通りの一点を見つめて訝しげな面持ちで答えた。その手はいつでも抜き放てるように剣へと添えられている。

二人の視線は動く事無く、大通りからも外れている酒場へと大股で近付く一人の男を捕らえていた。

「おい！ 止まれ！ 酒場に用なら出直せ！ 今日貸し切りになっっている！」

槍を手に持つ方の見張りが声を張り上げて、酒場へと近付く男に向かつて制止を促す。その言葉を聞いても男は歩みを止める気配は見られない。

入り口を預かる二人の男には見えなかったが——男はなおも続く制止の言葉をものともせず、ニツと犬歯を見せる不敵な笑みを浮かべるのであった。

扉が弾け飛ぶと大きな音と衝撃が、酒場の一階を揺らした。

粉々になった扉の破片と共に、それらを破壊した大きな物体が勢いを衰えさせずに酒場の中を舞う。等間隔で並んであったテーブルを豪快に薙ぎ倒しながら、“それ”は頑丈に作られたカウンターへと衝突した。

「なんだ！？ 何が起こった！」

酒場で酒を酌み交わしていた男達が一斉に立ち上がり、突如飛び込んだ物体に目を向ける。最初は何が起こったのか分からなかったが、カウンターの横に転がる“それ”を見ると一様に息を飲んだ。

それは――扉の前で見張りをさせていた男の一人だった。扉をぶち破った拳句、あちこちにぶつかった所為か無残にも装備は所々が裂け、鉄の胸鎧が大きく窪んでしまっていた。

一見死んでいるようにも見えたが、辛うじて息はある様で苦しげに呼吸する音が聞こえる。

男の有様と突然の出来事に、騒がしかった酒場が波を打った様に静まり返る。だがその静けさを打ち消すかの如く、重い足音が壊れて役割を果たしていない扉の向こうから響いてきた。

非現実めいた光景とただならぬ雰囲気、誰かが唾を飲み込む音が聞こえる。その音が合図であったかのように……扉を失い、外から光が差し込む入り口に陰が差した。

「すまん。ほんのすこしばかり、ノックが派手だったな？　まあ邪魔するぜ」

ほんのりと色が付き始めた陽を背中に背負いながら、ヴァルトは扉が壊れ埃が舞う酒場の中へと一歩踏み出した。

床に転がる扉の破片を豪快に踏み碎きながら入るヴァルトを見て、それまで呆然としていた男達は我に返った。それぞれが別の動きで、唐突に現れた侵入者に備えて動き始める。

まず初めに行動に移したのは、入り口付近のテーブルで酒を飲んでいた男だった。

跳ね上がる様に立ち上がると同時に、隣に置かれていた椅子をヴァルトへと向かって投げつける。不意を襲った筈の攻撃も、ヴァルトは右手に握っていた獲物で難無く受け止め、椅子を弾いた後はそのまま近くにいた男を受け止めた方の手で殴りつけた。

「エギユッ！ ガラッパッ！」

「おいおい……、酷い事をするなあ。仲間だろう？」

椅子を防ぎ、男を殴りつけたヴァルトの“得物”を見た者達は全員目を見開き、戦慄を覚える。先に倒れた二人に続き、ヴァルトに攻撃を仕掛けようとした者もその正体に気付いてからは一步を踏む事を躊躇した。

ヴァルトが握っていた“獲物”……それは、カウンターの前で転がる男と一緒に酒場の見張りをしていた筈の男だった。

死んでいるのか気絶しているだけなのかは、一見したところで分からない。男はヴァルトに足を捕まれ、胴を床に落としたまま全く動かなかった。

「てめえ！ ……よくもっ！」

「何だ、ちゃんと友達甲斐のある奴もいるじゃねえか？ 鬼畜外道ばかりじゃ無いと解って、少し安心したぜ」

ヴァルトはニヤリと凄みのある笑みを浮かべ、怒りを顕わにしている無法者達に向かって見張りの男を投げて返してやる。空中へと投げ出された男は、抵抗も見せず不規則に手足を揺らしながら、固まる無法者に向かって一直線に飛んでいった。

「なっ……プゴッ！」

咄嗟に飛んでくる男を避けようとしたが酒場内でテーブルや椅子

が乱立し、障害物に気を取られた瞬間には勝敗が決まっていた。無法者の一人が短い悲鳴を残して、飛んできた見張りに押し潰される形で酒場の壁まで吹き飛ばされた。

瞬く間に四人もの仲間を失い、漸く周囲の男達は剣やナイフといった得物を抜き放つ。

あちこちで鞘から刃が抜かれる音が重なり、酒場の中が俄に殺氣立ち始めた時の事だった。

階下で起こった騒ぎを聞きつけたのか……二階へと続く階段横の扉が勢い良く開き、顔に包帯を巻いた男が飛び出してきた。

「おい！ さっきの音はなんっ……っ！？ け……拳帝いいいい！？」

昨日、拳帝の顔面を殴られた男は、ヴァルトを震える指先で差す顔を怯えか怒りで引きつらせながら、上擦って珍妙な声を張り上げた。

その声にヴァルトは二階へと目を向ける。一瞬その男が誰だったか思い出せず、少し頭を捻って考える素振りを見せた。

一瞬だがヴァルトの行ったその動作が隙だらけに見えたのだろう。ナイフを持った男が声も無く躍り掛かってきたが、ヴァルトはそちらへ一切視線を向かず無造作に太い腕を払っただけで、哀れな男を離れた壁まで吹き飛ばす。

「……ああ、思い出したぞ！ お前昨日のゴミ虫じゃねえか！ 丁度良かった、一緒にいた奴とお前。それと……お前等の親玉に用があつて来たんだわ」

緊張感を壊す言葉とは対照的に、ヴァルトは眼光鋭く包帯男を睨み付けながら、店に入って初めて大きく歩みだした。包帯男の叫び

声を聞いていた他の者達は、ヴァルトが纏う常識から逸脱した威圧感と“拳帝”という二つ名に身を震わせ動きを止める。

「こ……殺せえ！ そいつは賞金首の拳帝だ！ 殺して名を上げろお！」

「はぁ……。邪魔くせえ野郎共だ……」

ヴァルトは面倒臭そうに深い溜息を一つだけ吐くと、鋼鉄製の籠手を嵌めた腕を何度か動かし感触を確かめる。その後は身体を沈み込ませると、一気に近くの男へと間を詰めた。

そして――束の間だが、阿鼻叫喚の饗宴が始まった。

重苦しい足音が床を軋ませながら、二階へと続く階段を上る。

足音は二階にある扉の前で狙いを定めた様に止まった。

一呼吸空けて静かにドアを叩き、来訪を中にいる者へ知らせる。ドアを叩く音で来訪者に気付いたのか、中で派手にゴソゴソと響いていた物音が途端にピタリと止まり静寂が落ちた。

「だ……誰だ……？」

部屋の中にいた人物が怯えの入り混じった声で誰何を問うが、扉の前に立ち止まっている人物は何も答え無い。再度、静かにドアを叩く音が部屋へと響き渡る。

「誰だとき……聞いているんだ！」

しかし返ってくるのは再度ドアを叩く音だけで、それ以外の答え

は無い。ドアを叩く音は少しずつだが大きくなっていき、最後にはドアを殴り付けるかのような音へと変わっていった。

「ひうつ！ ひいいいい！ やめ……やめろお！」

恐怖が上回り、殆ど悲鳴に近い声に応えるかのように、ドアを叩く音がピタリと止まった。ようやく止まった音に対し、部屋の中にいた小男が不思議そうにドアを見つめる。

豪華な装飾を施された服を纏い、一心でドアを凝視する男の顔からは血の気が失せ真っ白になっていた。鼓動が脈打ち、速くなるばかりの息を抑え切れない様子から男の小心さが伺える。

全く音が聞こえなくなったドアの向こう側に近付こうと男が足音を殺し、ドアの方へと歩んだその時だった。

大きな音と共に突然穴が開き、そこから血まみれの部下が穴から顔を覗かせた。

「—————っ！ ンギヤロギユツダアツ！！！」

小男は言葉にならぬ悲鳴を上げて、体を後ろに投げ出す形で床へと倒れ伏す。

腰が抜け、起き上がれないまま口を何度も動かして言葉を告げようとするが、それすらも目の前に突然現れたモノに対しての恐れが勝り上手く話す事が出来無い。

扉に突き刺さった形で上半身を出している血まみれの男の様子は、傍から見ても凄惨なものだった。何度も頑丈な扉に打ち付けられた

所為で鼻は潰れ、顔一面にはドアの破片が刺さって、人とは思えぬ形相となっていた。

「おいおい、仲間の顔を見てその態度は無いだろ？ それにしても、部下が必死に戦ってたつてのに、仕え甲斐のない親分だなあ。お前……」

「きつ、きつさ……貴様が拳帝なのかつ！」

ようやく言葉を発する事が出来た小男の問いに、ヴァルトは皮肉げに片方の口端を上げる事で答えてみせた。まるで人喰い虎の如く、寧猛なヴァルトの笑みを前に、小男は情けなくも起き上がった身体を再び支える事も出来ず、尻餅について脚の力だけで弱々しく後退する。

「なななな……何の恨みがあつて……こここんな……こんな酷い事をっ！」

「恨みか……恨みは特にねえなあ。強いてあげるなら……“八つ当たり”って奴だ」

「な……ななななっ！」

平然とヴァルトから放たれた残虐非道な言葉に対し、小男は何も反論の術が思い浮かばない。それでも常識から逸脱した文句を向けられている事に対しての憤りは、時間と共に胸中を掻き乱していた。

「おいおい、そんな顔すんなよ。あんただって経験位あるだろ？ ムシヤクシヤして路上のゴミを蹴飛ばした事とかよ……それと同じだ。元々あんただって好きでゴミ山の大将気取ってんだろ？ だったら潔く諦めな。あんたは今まで散々この街を汚してきたんだ。“そろそろ掃除のされ頃”だってな？」

「き……貴様のような奴隷あがりの豚がつ！　貴様も儂と変わらんだろうが！」

憤りに任せながらも、ようやく反論をぶつけてきた小男をヴァルトは見下ろして瞬きを何度か繰り返す。そして静かに俯き、突然喉を鳴らして笑い出した。

「くっ、くくっ……ははははははっ！　違い無え、その通りだ！　なかなか良い事言ってくれるじゃないか！　だけどなあ、一つだけ違うところがあるぜ？　俺はな……お前の様な綿埃みたく軽いゴミじゃなくて、石畳に長年こびり付いた血の染みみたいに頑固なんだよ。　お前みたいなの、それこそ風が吹けば飛んでっちまうようなゴミと一緒にするんじゃないやねえよ！」

笑う事から一転、ヴァルトは怒りの咆吼をあげて鋭い視線を向ける。ついに小男は短い悲鳴と共に背中を床に打ちつけ、盛大にひっくり返ってしまった。

「か、金……金ならいくらでも出すっ！　だから……どうか……どうか、命だけはああ！」

小男は必死の形相を浮かべ涙を流し、姿勢を正した後は床に額を付けて懇願を始める。

「何だ……やる気を出せば、少しは洒落た事も言えるじゃないか……」

長年に渡り磨き上げられて輝いた木製の床に額を擦り付け、光沢を涙で曇らせながらも必死に命乞いをする小男を前にヴァルトは肩を竦めた。暫し考える様な素振りを見せた後、大きく一度頷き、明るい口調で返事を返す。

「よし、分かった！　それで手を打ってやろう！」

「え、えっ！？　本当ですきゃ！？」

「ああ、俺はこう見えても物分りがいい方だな」

満面の笑みを浮かべたヴァルトの返答が耳に入り、小男の表情に光が射す。

まさか最後の祈りを込めた提案が通じる相手とは思っていなかったのだろう。小男は顔を勢い良く上げると、露骨に安堵の表情へと変わっていった。

先程までの恐怖は止まったのか、素早く部屋の中央へ置かれたテーブルへと駆け寄り、自分が持ち出そうしていた――金の入った大きな袋をヴァルトの前へと差し出す。

「こっ、これを……！」

恐縮した面持ちで、体躯には似合わない袋をヴァルトへと差し出しながら小男は顔を伏せた。声は萎縮しているが、顔を伏せヴァルトへと向けないその表情には僅かばかりの笑みが漏れている。

小男は内心、ヴァルトの事を嘲笑わずにはいられなかったのだ。

確かに金を失うのは痛い、だがそれも一時の事である。命さえ奪われなければ自分の背後に付いている貴族に頭を下げるだけで、目の前にふんぞり返っているこの憎らしい男を再度奴隷送りにしてやる事など造作も無い。そう思えば、自然と浮かぶ笑みは抑えきれなかった。

しかし……それも次の瞬間には、ヴァルトの放った一言によって雲霞の如く霧散する羽目となった。

「よし、じゃあ遠慮無く貰っていくぜ。“命だけ”でいいんだよな

……」
「……………へ？」

予想だになかったヴァルトの言葉に対し、金を差し出したままの体制で小男は顔を上げる。その瞳に映ったのは、より一層獰猛な笑みを浮かべて指の骨をならすヴァルトの姿だった。

「自分の命と引き換えに仲間を救うとは……あんた、見掛けによらずいい男じゃねえか」

「へ……へっ……？　ちがつ……」

渾身の力を込めて、自分へと振り下ろされる鋼鉄の拳。それが、小男が見た最期の光景であった。

昼の終鐘が大きく三回、街中で鳴り響く黄昏時。

大通りを一人の男が、ゆっくりと大きな歩幅で歩いていた。

歩く度に背負った大きな袋から豪華な音が鳴っている。

逆光で他人が表情を伺う事は出来無いが——すつきりとした笑みを浮かべた男は、斜陽を背負う様に大通りを闊歩し、特別区の方角へと消えていった。

(1-8) 拳より零れた過去

大通りから特別区に続く中通りに一軒の屋台があった。

店を立ち上げた当初、場所代の安い特別区付近に屋台を構えて商売をしたのが始まりである。稼ぎも年数と共に僅かばかりだが増え、今では中央付近へと屋台は移動していた。だが、場所を変えども昔から馴染みのある顔は時々顔を見せてくれ……いつの間にかそれが、店主にとっていつの間にか最大の生き甲斐となっていた。

——色んな人々に美味しい串焼きを食わせたい。

ただそれだけを思い、屋台の店主は意地も手伝って十数年間頑張ってきたのだ。

しかしその屋台は無残にも破壊され、店主の生き甲斐は屑物と成り果てた。

——筈だった——

「馬鹿野郎っ！ 石の並びが全然なってねえと、さっきから何度も言ってるだろうが！」

大通り程の広さはないが、路地程の狭さでも無い。そんな中通りに空気を震わさんばかりの怒声が響き渡っていた。

怒声の主は地面に置かれた木箱に腰を下ろし、折れた左腕を首から提げた布で吊っている。先程から遅々と進まぬ作業に苛立ちなが

ら、串焼き屋の店主は鉄箱に敷き詰められる火含石を指差して指示を飛ばす。

火含石の順序など味にどう関係するかも分からない、経験の無い者にとっては何れも一緒に見える。店主に指示をされている少年の表情にも、その疑問がありありと浮かび上がっていた。

「……並べ方なんてどれでも一緒だろ！ 父ちゃ……」

「ふざけた言葉を垂れるな！ 串焼きの美味さはなあ！ 石の並べ方一つで変わっちゃうんだよ！ そんな雑な並べ方じゃあ焼きむらが出来ちまって肉汁が逃げちゃうんだよ！ こん馬鹿垂……いつ……」

一際大きな怒声を上げた時に骨の折れた胸が痛み、苦痛の声と共に言葉が止まった。胸を押さえ、前屈みに蹲る店主に向けて傍にいた女性が気遣いの声を掛ける。

「あんた、療士様からも“暫くは大人しくしてるように”って言われてるだろう……それにまた、あいつらが来たら……今度こそ死にまうよ……」

「……っ……そんな時は……そんな時だ。俺はな……ノスフェ、ヴァルトと約束してんだ。おちおち休んでられるかってんだっ！」

ついには木箱から膝を落とし地面へと蹲りながらも、顔だけは上げて心配顔を浮かべている女将さんを強く睨み付ける。頑固な亭主の姿を見て、女将さんは石を並べ続ける息子と顔を見合わせた。結局二人共『何を言っても無駄』だという結論を得て、顔に諦めの表情を浮かながらも小さく溜息を吐く。

いつだってそうだったのだ。

この頑固者は言い出したら、誰の言葉も聞きはしない。

女将さんと息子を見上げた状態で顔を苦痛に歪ませる店主だったが、突然驚いた様にその目が見開かれた。年月と共に刻まれた口と目尻の深い皺がより一層深くなり、顔が笑みへと変化してゆく。先程まで苦痛に顔を歪めながらも怒声を放っていた店主が見せた表情の変化に、女将さんと息子が再び顔を見合わせた時だった。

「あんまり無理すんじゃないよ……ったく、怪我人はいいいから大人しくしてろっての」

「無理無茶はアンタの特権だろう？ 聞いたぜ？ 派手にやり合ってたってよ！」

「おいおい、もうこんな所まで話が広がってんのかよ？ 物騒な事を言わんでくれ、俺は単に“話し合い”に行っただけだぜ？」

店主が向ける視線の先——驚きで目をぱちくりさせている女将さんの後から低い声が聞こえた後、豪快な笑い声が降り注いできた。女将さんは突然の声に大きく目を見開くと、慌てて振り返る。

いつの間に現れたのか、一抱えもある革袋の紐を持って背負ったヴァルトの姿があった。もう片方の手をポケットに突っ込んだまま、店主の言葉にヴァルトは肩を竦めて豪快に笑い声を響かせた。

「まあ、穏やかにはいかなかったがな」

「くっははははっ！ アンタらしいな。何にせよコイツは祝わなきゃならねえな！ おい、ダン坊！ 今から酒屋に行っただけの酒買ってこい！」

「ちよっと！ あんたっ！」

店主が満面の笑みで息子に使いを頼む姿を見て、女将さんが顔を顰め声を荒げて諫めようとする。だが、陽気に笑う店主がその程度で怯むはずも無かった。

「いいじゃねえーか！　こんなめでたい日に祝い酒を飲まずに生きて、楽しい事なんざあるものか！　ダン坊も今日は飲ませてやっから早くひとつ走りしてこい！」

「はあ……。本当、あんたって人は言い出したら聞きやしないんだから……」

父親の言う事に従うべきか迷っていた息子のダンも、母親の呆れと諦めの籠もった溜息を聞くと薄暗くなり始めた路地を駆けだす。

成人の儀をまだ済ませていないダンにとっては酒を口にする機会などは滅多に無く、祝い事でも無い日に飲めると分かれば足取りは軽い。全速力で駆け出し、あっという間に路地から酒屋のある大通りへと消えていった。

「今日は潰れるまで返さねえから、覚悟しやがれ！　ヴァルト」

まだ傷が痛むだろうに笑顔でそう言い放つ店主の言葉は、まるで十年來の友人の样にも感じる。ヴァルトは胸の奥にこそばゆいものを感じて苦笑を浮かべると、自慢の胸板を叩いて答えを返した。

「……望む所だ！」

暑い陽節も終わりを迎える今頃は、昼間は暑く感じるが明け方はやはりまだ冷える。

明け方の風に肌を撫でられ、ヴァルトの身体は朝冷えによって目が覚めた。震えた身体をゆっくりと起こした後、周囲を見回した。

「……随分、派手になったもんだ」

目の前に広がる光景に、思わず独り言がヴァルトの口から漏れた。一晩を外で過ごした所為か、その声は僅かに掠れている。

大人が縦に並んで二人寝ても少しばかり余裕がある広さの中通り
は、酔い潰れた大人達で一杯になってしまっていた。ある者は酒樽
を抱えて幸せそうに眠りこけ、またある者はナイフを握りしめて苦
悶の表情で気絶している。

陽も落ち、夜が訪れた頃。

店主の息子であるダンが酒の入った樽を満載した荷車を引っ張っ
てきてから、狂乱の宴は幕を開けた。

最初、ヴァルトは呆れ顔を浮かべながらも店主と差し向かいに飲
んでいた。だが暫くして酔った店主が道行く者を次々と誘って捕ま
え、一人、また一人と……次第に酒を酌み交わす人数が増えていっ
た結果が今の目前に広がる惨状である。

中には隙有りとばかりにヴァルトの命を狙う馬鹿もいたが、ヴァ
ルトが手を下すまでも無く。周囲の酔っ払い達に殴り蹴飛ばされて、
酒も飲めずに夢の世界へと旅立つ結果を迎えただけだった。

そして気がつけば、夜を徹した宴会も今では酔い潰れた者がその
まま路上で寝ている有様と化していた。

ヴァルトはもう一度、寒さに身を震わせる。一瞬だけここにいる
者達を片っ端から叩き起こしてやろうかとも考えたが……この季節
なら凍死する事もないし、精々が風邪を引く程度だろうと思いつま
った。

——まあ、馬鹿は病も避けて通るって言うしな……

気持ちが良い程の馬鹿騒ぎに付き合ってくれた、気のいい馬鹿共を眺めながらヴァルトは苦笑を浮かべる。朝の新鮮な空気を肺一杯に吸い込み大きく伸びをしていると、少し離れた所から走ってくる気配に気付いた。

「あっ！ ヴァルトさん、おはようございます！」

「おう、おはようさん。お前は……えっと、ダンだったか？」

生意気な盛りを迎える店主の息子——ダンは有名人であるヴァルトに名前を覚えてもらえた嬉しさからか、足取り軽くヴァルトの方へと駆け寄ってくる。

まるで犬みたいだな……と思いつながらヴァルトは軽く手を振った後、足下に置いてあった革袋を持ち上げた。袋の口がしっかり皮紐で閉じられているのを確認すると、それをダンの方へと放り投げた。

「え？ うわっ！」

かなりの重量がある革袋は、まだ子供の容姿が抜けきらぬダンには重過ぎたようだ。受け止めるまではよかったのだが、受け取った体制で後へとよろけ、尻餅を付く形になった。

地面に当たった衝撃で、受け止めた革袋から重い金の音が鳴る。鈍いその音が耳に入り、袋の中身が何であるか大よその検討が付いたダンは、驚いた様にヴァルトを見上げた。

「ヴァルトさん、これって……！」

「悪い……すまんが、そいつをお前のオヤジが起きたら渡しといてくれないか？ それと“達者でな”と伝えておいてくれ……」

「へっ？ ヴァルトさん、これからどこに行かれるんですか？」
「まあ、そんなところだ。オヤジさんと仲良くしろよ。……じゃあな」

ヴァルトは口だけで笑い、そう言っただけで軽く手を振ると踵を返して大通りに向かって歩き出した。ダンが驚いてヴァルトを引き留める言葉を掛けるも、それを聞こえないふりをして無視する。酔っ払い共を踏まぬ様に避けて、ヴァルトは中通りを抜けていった。

ヴァルトは商人達が朝の準備で忙しく走り回る大通りを一人で進んでいた。

足取りは迷う事無く真っ直ぐと、ある場所へと向けられている。やがて周囲の風景も少しずつ変化してゆき、気付けば大きな建物が均等に並んだ閑静な場所へと変わっていた。

そのまま暫く歩き続けると、目的の場所へと到着する。この街で昔から変わらず、そして——唯一、ヴァルトが忘れられない記憶として残っている場所へと足を踏み入れた。

そこは街の中心から少し離れてはいるが、充分整備が行き届いている広場だった。石畳が敷き詰められ、その中央には剣を天高く掲げる剣士の石像が建てられている。

“ 剣聖の広場 ” と名付けられているこの広場はアリユテーマの街にある名所の一つで、闘技場と並んで人気がある場所だった。

広場は市でなくとも毎日露店が並び、食べ物や土産物を売る商人が声を上げている様な賑やかな場所である。

だが今は朝早い時間とあって、露店商達は開店の準備に追われて走り回っている時間だろう。広場に店を構える者達がこちらに来て準備を行うのは、それらの時間よりもまだ後の事だった。

人が殆ど居ない広場を見回すと、ヴァルトは広場の端にある石のベンチへと腰を下ろした。少し湿気を含んだ朝の涼しい空気を頬に感じながら、ゆっくりと空を仰ぐ。

たまに吹く風に固い髪を微かに揺らしながら、ヴァルトは珍しく穏やかな表情を浮かべていた。そのままゆっくりと瞳を閉じて、物思いに耽る。

——あの時も、確か今ぐらいの季節だったな……

その広場は観光を目的とした人間や、出稼ぎに来た者達で溢れ返っていた。

露店商達は声に匂いに、様々な手段を用いて客を呼び込もうと必死になり、周囲が活気に満ち溢れている。その騒ぎは村から出てきた者にとって、祭りかと勘違いさせる程にまで熱狂的なものだった。

そんな騒ぎに沸き立つ人込みの中を……一組の男女が人込みに押され、遅い足取りながらも進んでいた。

「……はあ、少し来る時期を間違えたなあ……」

男の方は二十代半ばで、体格の良い赤毛の青年だった。ヴァルト

という名の青年は、額に微かな汗を浮かべて溜息を吐く。

そして、荷物を持っていない方の手で繋いだ女性へと気遣わしげに振り向き問い掛けた。

「フォルトナ、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫……と言いたい所だけど、こんなにも人がいると流石に……ね？」

フォルトナと呼ばれた女性は笑みを浮かべているが、明らかに人に酔った様で普段は明るい笑顔も弱々しく見える。群集の熱気もさることながら、まだ陽節の暑さも残っており、フォルトナの伸びた長い黒髪が汗で頬へと張り付いていた。

「少しベンチで休もうか？」

ヴァルトはフォルトナの身を気遣い、丁度目の前で人が立ったベンチへと誘う。

フォルトナも素直に頷くとベンチへと腰を下ろして、上着のポケットから布を取り出して流れる汗を拭った。

「……こうしていると風が気持ちいいわ……」

「そうだな。でも、上着は脱ぐなよ？　汗で身体を冷やすとお腹の子供に悪いからな？」

「ふふっ……分かってるわ。本当にヴァルは心配性なんだから……それとも、もうパパって呼んだほうがいいかしら？」

細かく様子を気遣うヴァルトに対し、フォルトナはからかうように身を寄せた。離れていたヴァルトの大きな手に自分の細い指を再び絡めると、悪戯っ子の様な笑みを浮かべる。

ヴァルトはベンチに置いた手に感じたフォルトナの体温と『パパ』

という単語に動揺して、慌てて顔を背けた。

「と……ところで……村への土産はもういいのか？」

「あっ、話を逸らしたあ。うふふ、許してあげる。そうね……村長さんへのお土産も買ったし、産婆のシエラ小母様には糸でしょ、塩は直接馬車に積み込んでくれるようになってるから……うん！ 買い忘れないわ」

「……結構痛い出費だったな……。けど、これから出産とかで何かと世話になるから仕方無いか……」

引っ手繰られないように土産を包んだ荷物を脇に抱え、ヴァルトは少し目立ち始めて来たフォルトナの腹部へと視線を向けた。フォルトナもヴァルトの視線に気付いて、微笑みながら自分の腹を優しく撫でる。そこにある確かな命の鼓動を感じ、二人は無言で視線だけを交わした。

二人のそんな姿に、周囲を歩く人々も優しげに見つめて通り過ぎてゆく。

その時に丁度、昼時を伝える次鐘が広場へと響き渡った。

「もう昼時か……この人の多さだと、昼飯を食うにも少し時間を外した方が無難かもな」

「そうね。……それにしても、今日は何かあるのかしら？　こんなにも人が多いなんて……」

フォルトナは不思議そうな面持ちで、広場を行きかう大勢の人波を見つめて呟く。

「ああ、今日は年に一度の闘技大会がある日らしい。さっき、鎧を

着た奴が“勝ちあがれた”とかで盛り上がっていたよ」

「闘技大会？」

「ん？ ああ、そうか。フォルトナは知らなかったか？ 年に一度、国中の腕自慢が集まって戦い、その力を見せ付け合う試合があるんだよ」

ヴァルトは視線を遠くに移し、辛うじて見えている闘技場の外壁へと視線を向ける。

細めたヴァルトの瞳には微かな感情が混じり、まるで遠い昔を懐かしむ様子に伺えた。

「……出た事、あるんだ」

「ああ……昔に一度だけ、な？」

「結果はどうだったの？」

ポツリと漏らしたフォルトナの言葉を聞いたヴァルトは、突然その場で立ち上がる。ヴァルトが突然起こした行動が“触れられたく無かった過去”なのかと、フォルトナは少し表情を固くするが、それは全くの杞憂だった。

立ち上がったヴァルトはフォルトナの前で両手を広げて、まるで道化師の様にわざとらしく大きな動作で嘆いてみせる。

「それは……十八の頃。傭兵として漸く一人前になり、ヴァルト青年はそこそこの腕を自負していた無謀な若者だった。しかし、自信に満ちた若かりしヴァルトは……意気揚々と闘技大会へと参戦し、哀れ一回戦で無残にも負けてしまったそうな！ 嗚呼、なんたる情けなさ！」

声の抑揚を強調し、吟遊詩人が物語を語るかの様な口調で一気にヴァルトは語り終えた。続けて蹲り地面を叩きながらも、大げさに

涙を流す演技をする。

突然始まった喜劇の様な夫の振る舞いを見て、フォルトナは目を何度か瞬きさせる。だが、余りにも似合わぬヴァルトの語り口調と流役者以下の演技を前に、その驚きはやがて笑みへと変わり、最後にはクスクスと笑い声を上げていた。

ヴァルトは笑い声を聞いて顔を上げると、フォルトナと同じように笑い出した。

「ふふふつ、ヴァルったら。もう！ ふふ……」

「これ位ふざけてないと……余りの情け無さに、本当の涙が出そうになるからなあ」

「だからって……ふふふつ。貴方って、本当役者には向かないわね」

ひとしきり笑って収まったのか。フォルトナは満足気に溜息を吐いた後、再び隣へ腰を下ろしたヴァルトを見上げて話を続けた。

「ねえ、その闘技大会って優勝したら賞金でも出るの？」

「優勝したらかあ……まずは間違い無く、国への仕官の道は開けるだろうな。それに何より——傭兵としては“名が売れる”って事に意味があったのさ。まあ、結果として俺は単に恥を掻いただけだったけどな？」

フォルトナと向かい合って、ヴァルトはそう言いながらも恥ずかしげに頭を掻いた。

「ふふつ、また闘技大会に出たい？」

「まさか！ もう俺なんかが出たところでまた初戦敗退が関の山だし、何より今の俺は傭兵じゃ無く……単なる農夫だからな」

「そうね、剣よりも鋏を握っている方が様になってきたしね。そし

て何より……今の貴方は私の自慢の旦那様だわ」

そう言って再びヴァルトの手に指を絡め、フォルトナは満面の笑顔を浮かべてヴァルトの瞳を見つめた。大きな黒い瞳がヴァルトの返答を促すかの様に細められる。

フォルトナがヴァルトを試すかのような言葉を投げ掛けるのは、これまでも何度かあった。今回も不意に訪れた甘い言葉を聞いて、ヴァルトは耳まで真っ赤にさせて言葉を濁らせる。

「……ああ……うん。ははっ……こうもハッキリと言われると、その……」

「ああっ！ 照れてる！ うふふふっ、あはははは……」

「フォルトナ！ お前っ！ ああ……くそっ！」

からかうフォルトナの顔も満足に見れず、照れ隠しに拗ねた素振りですでにヴァルトは横を向く。暫くして、その頬に柔らかく暖かい感触が落とされた。

「あらあら、拗ねちゃった？ ごめんなさい。でも、言ったことは全て本当の事よ。これから私を大切に守ってね。私だけの最高の傭兵さん……」

——……フォルト……トナ。

湧き水の如く、記憶の彼方から次々と浮かんでは消えてゆくフォルトナの笑みは、瞳を閉じていても目の奥に焼き付いたまま決して離れない。その笑みが幻視という事位、ヴァルトにも判っている。

何度もそう自分に言い聞かせるも、押し寄せる衝動は押さえ切れなかった。

ヴァルトはゆっくり瞳を開け、視線を空から落とした。

明け方で殆ど人のいない広場で手を前へと突き出す。記憶の中で消えてゆく笑みを取り戻そうとするかの如く、ゆっくりと指を曲げる。

だが、握り込まれた掌は何も掴めず——ただ、固い岩の様な拳を形作るのみであった。

渦巻く思いを堪えるように奥歯を噛み締め、眉根を寄せると、ヴァルトはよく晴れた早朝の青空を再び仰ぎ見た。

拳と噛み締めた奥歯が、ギシリと鳴る。

——何が守るだ……何が最高の傭兵だ……ッ！ 結局俺は……俺は何も守れなかったじゃねえか！ フォルトナも……ルシィでさえもッ！ ……なのに、なのに。何で……俺はこうも無様にまだ生きてるんだ！

ヴァルトは空を見上げたまま、身体を小刻みに震わせる。牙を剥いて声無き声で咆哮を上げるその姿は——まるで天にいる神に向かって吼え噛み付こうとするようにも見えた。

青一色に染まった視界が滲み、瞳から溢れそうになった涙だった……それが零れ落ちる事は無い。朝の澄んだ空気に声が響き渡り、空を仰ぐヴァルトへと向けて放たれる。

「あ——！ こんなところにいたあ！」

場に似合わない声は子供のものだった、ヴァルトは仰いでいた空

から声のした方向へと視線を移す。そこには、質素な町娘の服を着たマリエラが立っていた。息を弾ませながらこちらへと走り寄る少女の様子が目に映り、ヴァルトは思わず目を見開く。

「……ルシ……ィ……?」

一瞬だけ、また過去の幻視かと見紛う。

髪を後ろに結び、馬の尻尾のように後ろに垂らしたそれを弾ませながらこちらへと来るマリエラの姿を、ヴァルトは暫く遠い過去に失った女の子と重ねてしまっていた。

「もう、ずっと探していたんだからね! アンジェさんは“放っておきなさい”とか言うし、お父さんの事を話してくれるって約束したのに、勝手にどっか行っちゃってさ! このダメオヤジ!」

「……出会って一言目がそれか? 本当、オマエは大人に向かって口の聞き方がなっちゃいねえな……」

「約束を破る人よりかはマシです! ベーっだ!」

ヴァルトはそう言いながら、こちらを見上げて思い切り舌を出すマリエラを見て苦笑を浮かべる。だがそれは、マリエラへ向けたものではなく……もうこの世には存在しない者の名を思わず口にした、自分に対して放った自嘲の笑みだった。

——どこをどう見たら、見間違えるんだ。俺は……

髪の色も、長さも、歳も……全てがヴァルトの知っていた少女とは異なるにも関わらず、つい見間違えた事に対する自嘲の念は消えない。

だがマリエラが怒っている仕草を前にすると、何故か脳裏に浮か

んだ姿と重なってしまったのは紛れも無い事実であった。

今は亡き――愛娘の姿と見間違えられた事に、マリエラは到底氣付く筈も無い。

ただ苦笑を浮かべたままヴァルトの口から出てきた言葉と表情が氣に食わないのか、再び腰に手を当てて頬を膨らませていた。

「あつ！ アンジェさん、こっちこっち！ こんなとこにいたよー！」

マリエラがヴァルトの後ろに視線を走らせると、大きく手を振ってその場で飛び跳ね自分の場所を知らせた。その行動が誰に対してのものかは、振り向いて確認せずとも判る。

ヴァルトは広場の入り口付近に怒氣を孕んだ氣配を二つ感じて、大きな手で額を覆うともう一度、天を仰いだ。

「お父さんの事教えてくれるまで、もう何処にも行かないでよね！」

とどめとばかりに、マリエラがヴァルトの太い腕をしっかりと掴んで強気な一言を放つ。子供程度の力で捕まれた程度ならば簡単に振り払って逃げる事も出来るが……不思議とヴァルトはそれが出来なかった。

深く長いヴァルトの溜息と、特徴のあるアンジェリカの怒声が閑散とした広場に響き渡ったのは……ヴァルトが諦めを覚悟した時と、ほぼ同時だった。

(119) 優しい拳・前編

それは“屋敷”と呼んでもおかしく無い程の建物を、ヴァルトは呆然と見上げていた。

丁度通りを挟み、一般街と貴族街が隣接する場所だとは向かう途中で聞いていたので、ヴァルトは一般街に佇む素朴な家だとばかり思っていたヴァルトだったが……予想を大きく上回る建物を前に疑わしげに目を細める。

それもその筈だ。下級貴族か商会の建物にも見える二階建ての屋敷は、外見を見る限りかなりの年代を感じる。しかし建物もやや広めの庭園も良く手入れがされていて、今にでも玄関ホールから使用人が顔を出しそうだった。

「本当にここが……？」

ようやく言葉を発したヴァルトは、視線を建物から前で笑みを浮かべているラズーロへと移す。ラズーロは笑顔を崩さず、大きく一度だけ頷いた。

「ええ、此処が今日から貴方達の家になります」

「良い家じゃない……良かったわね？」

ヴァルトの隣に立っていたアンジェリカは、ヴァルトには無く、自分の横に手を繋いで並んでいたマリエラとソフィア姉妹に向かって優しく微笑み掛けた。

嬉しそうに顔が無邪気に輝かせて「家」へと走っているソフィアを、慌ててマリエラが制止の声を放ちながらも追いかける。だがマ

リエラの顔もソフィア同様、嬉しさと期待を隠しきれていなかった。明るい笑い声を放ちながら、手入れのされた庭へと走ってゆく二人の姉妹を見てヴァルトは深い溜息を吐く。その顔に有り有りと浮かんでいた色を読み取ったのか、アンジェリカが小さく笑いながらヴァルトの腕を取って自身の身体を寄り掛かせた。

「ねえ、今、貴方が何を考えてるか……当ててあげましょうか？」
「……いや、当てられても結果は一緒だしな……」

ヴァルトが見せた心底嫌そうな反応に、もう一度アンジェリカはクスクスと笑う。

「変わらない結果なら、そんな嫌そうな顔しないの。全く、貴方って人は……」

言葉の端々から漂うアンジェリカの嬉々とした様子に、ヴァルトはもう一度大きく溜息を吐いて——今日から新たに自分達が住む事になった家を見上げるのだった。

剣聖の広場でリエラに見つかり、さらにはソフィアを連れたアンジェリカにも捕まる結果となった。

そして、アンジェリカの怒声と罵声によって注目を浴びてしまったヴァルト達は、少し離れたカッフェへと移動する。

一般街にある商人達の為に早朝から営業している洒落たカッフェは、その見た目とは裏腹に至る所で商人達が荷の相場情報を交換し

ている。時間が変われば客の幅も変わり、ヴァルト達は注目を浴びたかもしれない。だが時間も幸いして、客として座っている人々は話に夢中で、ヴァルト達の存在を気にも掛けはしない。

ヴァルトはなるべく人目に付かない角の席に着くと、無然とした表情で腰を下ろした。

マリエラとソフィアがヴァルトを逃がさぬ様挟んで座り、正面向かいにはアンジェリカが柳眉を逆立ててヴァルトを睨み付けている。

「もういいでしょう？ お父さんの事を……話して下さい。お父さんは……お父さんは元気なんですかつ！？」

マリエラは席に着くなり、給仕が注文を取りにくる前に勢い込んで問い掛けた。

その様子にヴァルトは面倒臭そうに溜息を大きく吐くと、こちらの様子を伺っている給仕の娘を指で呼びつける。

「焦るな……お姉ちゃん、悪いがこのチビ達には果実水を、俺とこっちの女には葡萄酒を。……それと、あまり話を聞かれるのは好きじゃねえ。ここに人を寄せんでくれ」

ヴァルトは迷惑そうに顔を顰めた娘の前に、銀貨を一枚置いた。その上で手を二、三度振って“釣りはいらぬ”との意思表示をする。最初はヴァルトの失礼な物言いに、明らかに不機嫌な表情を浮かべていた娘も、銀貨を見るや否や満面の笑みを浮かべてみせた。

「畏まりました。お飲み物を届けるのは、後ほど頃合を見てからで宜しいでしょうか？」

「ああ、また呼ぶからその時でいい。すまん」

「いえいえ。では、交渉に幸を……」

娘の言葉を聞いて、ヴァルトは苦笑を浮かばずにはいられなかった。どこをどの様に見たら商人に思えるのかは理解し難い。だが給仕の娘は会話の内容から察して、一見すると親子にも見えるヴァルト達をこれから商取引をする商人達と判断したのだろう。

——まあ、これから話す事は“交渉”に違いねえかもしれんな……

内心毒付くヴァルトの気持ちを他所に、マリエラは給仕が立ち去るなり直ぐにヴァルトの腕に捕り付き、ヴァルトを上目遣いで見上げる様に睨み付ける。逆にソフィアはカッフェに入るのが初めてなのか、椅子に大人しく座って蒼い眼を輝かせながら始終キョロキョロと周囲を物珍しげに見回す。

ヴァルトは二人に視線を彷徨わせた後に、アンジェリカへと向き直った。

アンジェリカは腕を組み、丰满な胸を誇示するように押し上げて、ヴァルトの視線を正面から受け止める。化粧は殆どしていないが、整った顔と大きな両眼は静かにヴァルトの言葉を急かしていた。

「アンジェ……俺はお前に話す様に、頼んでいた筈だが？ “お前の思うままに話せ” ってな……」

「あら、頼まれた覚えなんて無いわ。いい歳した男が、まるで拗ねた子供みたいな捨て台詞を言って逃げたのは聞いていたし、知ってはいるけど……？」

「……………」

「……何？ もしかして、事実を言われて怒ってるわけ？」

売り言葉に買い言葉とばかりに、暗い闇を思わせる静かな剣呑さ

を視線に含ませ、互いが無言で睨み合う。焼けるような、それでいて凍えるような視線の応酬の末――先に折れたのは、意外な事にヴァルトの方だった。

ヴァルトは溜息を吐いて、眉根を寄せる。

そして最後の確認とばかりに、アンジェリカの黒い瞳を見据えて言葉を放った。

「構わないんだな？ 本当に……」

「ヴァルト。私はね、解ったのよ……これは、部外者である私如きに関わっていい問題じゃないって。貴方が何を話し……それに対し、この子達がどういう選択をするかは分からないわ。けどね？ どういう結末を迎えようが、私は最後まで付き合おうって思ったの。この子達を拾った責任もあるしね？」

「責任、ねえ……」

一晩で随分と冷静になったのか、落ち着いた様子で胸中を語りかけるアンジェリカの表情は穏やかなものだ。だが、瞳に宿る覚悟の色だけはヴァルトにも充分伝わってきた。

「お前は、単にこの二人と自分を重ねているだけじゃないのか？」

「……違うとは言い切れない。いいえ、貴方の言う通りなのかもね。けど……私は貴方と違って、自分自身の心にまで嘘をついて騙したく無いの。したいようにしていると胸を張って言えるわ」

その瞳に輝く強い意志の光にヴァルトは自分の負けを悟って再度、深い溜息をテーブルに向かって吐いた。遠くからこちらをチラチラと窺っている給仕へと視線を向けると、指先を曲げる仕草で呼び寄せる。

給仕はヴァルトの仕草に含まれた意図を悟ると、一度カウンター

の奥へと引っ込む。再び姿を現した時には、薄い色の果実水と葡萄酒の入った水差しを盆に載せて近付いてきた。

ヴァルト達は給仕が丁寧に置いてゆく飲み物を前に、一言も話そうとはしない。唯一、状況が判っていないソフィアだけが、果実水を前にはしゃいだ声をあげる。

給仕は無邪気に喜ぶソフィアを微笑ましげに見つめてから、一礼すると後は無言でテーブルを後にした。

「お父さんの事を、話してください……」

先程まで目の前で繰り広げられていたヴァルトとアンジェリカのやり取りから、子供なりの解釈で悪い結末だと察したのだろう。マリエラは唾を飲み込むと、置かれた果実水には手もつけようとせずに重く口を開いた。その表情こそ硬くなれども、先まで浮かべていた決意の色は一向に失われていない。

ヴァルトは覚悟を伺えるマリエラの様子に鼻を鳴らし、アンジェリカは心配気にテーブルを挟んだ先に座った二人を見比べていた。

「どんな話をされるか……覚悟はしているようだな？」

「……は、はい……どんな些細な事でも知りたいと思っています！」

マリエラの蒼い瞳にもアンジェリカと同様、揺るがない決意が伺える。ヴァルトは、どう切り出そうかと瞳を閉じて息を吐いた。

「お前の父親……グランは……帰ってはこない」

率直に事実のみを告げるヴァルトの言葉に、マリエラは眼を見開いて言葉を失う。

「……初めから話そう。俺がグランと戦い、そしてどうなったか……あれはそう、半年前だったか……」

ヴァルトは静かに淡々と……自らの感情を殺す様に、少しずつ言葉を紡いでゆく。下手な誤魔化しや優しさすら無く、ただ事実のみを話始めた。

ヴァルトがかつて闘技場でマリエラ達の父親——グランと出会い、死闘を繰り広げた時の出来事をゆっくりと語る。自分でも意識しないうちに、あの時の情景が明確に浮かびヴァルトの口を介してその様子が語られた。

話を始めて、一体どれ程の時間が流れたのかは分からない。

とうとう最後の決着がつく箇所まで話し終えたヴァルトは、一旦言葉を止めるとマリエラの顔を見つめる。

多少覚悟はあれども、ここまでを聞いてマリエラも結末が薄々解ってきたのだろう。両の目には涙を浮かべ零れ落ちない様、小刻みに震えながらも膝に置いた手を色が変わる程の力で握り込んでいた。

「……アイツは、グランは強い男だった。単純に“力が”とかじゃない。生きようとする力、“生”への執着と……“希望を掴もうとする意思”が半端無かった。それが、俺を苦戦させた一番の原因だったよ。だが結局は最後、俺はアイツを……お前達の親父に……」

結末が近付くにつれ、ヴァルトは自身の口が徐々に重くなってゆくの分かる。自然と視線をアンジェリカの方へと向けると、美しい暗殺者はヴァルトを真剣な眼差しで見つめ固唾を飲んで見守っていた。

無論、昨日話した通り事の結末をアンジェリカは知っている筈だ。その所為か身体から、一流らしからぬ殺気が漏れ出していた。これがアンジェリカが決めた“姉妹に最後まで付き合う結果”としての表明なのだろう。

「俺は……」

アンジェリカの視線と殺気をものともせず、ヴァルトは最後の言葉が続けようと口を開く。

だが、肝心の言葉を出す前に――ヴァルトの脳裏にか細い声が響き、それを遮った。

『お父、さん……早く……帰ってきてね？ 絶対……だよ？』

遠く昔に失った声が、脳裏に響き渡る。

その掠れた幼い声は遠く、記憶の彼方からヴァルトの感情を激しく揺さぶった。

一瞬が数秒に……そして、数時間にも感じる。

——そういえば、あの時は……何で俺はルシィに“ああ”言われたんだっけなあ……

「……お父さんは、し……死んじゃった……の？」

何時まで待ってもヴァルトから答えが出てこない事に不安を抑え切れなかったのか、涙で掠れたマリエラの声が耳に入り、一瞬にしてヴァルトは現実へと引き戻された。

ついに堪え切れなくなった大粒の涙を、両目から零しながら震える声で問い掛ける。

「俺は……ヤツに大怪我を負わせちゃったんだ……」

無意識のうちに放っていた言葉の意味を理解するには、何度も思考を咀嚼する時間を要した。ようやく自分自身がマリエラに告げてしまった言葉に対し、ヴァルトは驚き鳶色の瞳を大きく見開く。

——俺は今……何て、言ったんだ？

ヴァルトは驚きに染まった顔のままに、アンジェリカへと視線を走らせる。正面から隠す事無く殺気を放っていたアンジェリカもヴァルトと同様に、顔を驚きの表情で埋め尽くされていた。

「……えっ？ お父さん……生きてる、の」

向かい合った大人二人が、驚きで固まった事に対しては気付いてないのだろう。

マリエラもヴァルトの口から零れ出た、予想していなかった言葉に対して驚いた声を上げ、ヴァルトの腕を掴んで続きを促していた。マリエラから与えられた軽い衝撃で、ヴァルトも我へと返る。ぎこちない動作で無理矢理、口端を上げて予定外の言葉を繋いだ。

「あー……つまり何だ。グランの野郎があんまりにも強くってな？ 死闘の果てに、俺がアイツに死んでもおかしく無い程の大怪我を負わせちゃったって事だ。アイツは……今は、その……遠く聖王国の医療都市で治療を受けなきゃ駄目な状態だったから、お前達に何も言えないまま行っちゃって……直ぐには帰ってこれないって事だ」

さも「参った参った」といった感じで大袈裟に手を振った後、ヴァルトは後頭を掻き毟りながら苦笑いを浮かべる。

しかし当然の事ながら、マリエラとアンジェリカは驚きの表情を浮かべたまま硬直している。唯一ソフィアだけが、周囲の空気を理解出来ずに可愛らしく小首を傾げてヴァルトの服を引っ張っていた。

「いや、流石にやり過ぎちゃったから……死んでもおかしくない傷だったし、安心させる意味も込めて“娘達の面倒は俺が見るから、安心して療養してこい”なーんて、言っちゃってな？ でも……面倒だから、いっそアンジェに押し付けちまおうって考えてたんだな……これが！ なっ？ そうだろ、アンジェリカ！」

「……えっ？」

言い訳としては余りにも無理があるヴァルトの言葉と仕草に、アンジェリカは呆然としていたが、突然ヴァルトに話を振られて困惑を隠せない。声を上擦らせながらも、ヴァルトの言葉に慌てて調子を合わせる。

「……えっとね……うん、そうそう！ そうなのよ！ 何も言わずに出て行っちゃって混乱したわよね……？ 全く……酷いと思わない？ マリエラちゃん、ソフィアちゃん！」

大人から見れば、充分アンジェリカの言い訳にも苦しさが漂っているのだが……マリエラにとっては自分達姉妹に優しく接してしてくれたアンジェリカの言葉は、それを事実として受け止める鍵として存分に働いたようだ。

「本当……なの？」

声に若干震えが残っているものの、マリエラはヴァルトにもう一度確認の言葉を投げ掛ける。

「お父さん……死んでないの……本当に!? でも、アンジェさんの家では……名前言っても“解らない”って……」

「あ……あれは……ほら! あのムサ苦しいグランの野郎に、こんなにも可愛い娘がいるなんて信じられないだろ!? だからてつきり、名前が一緒な別の人間の話かと……思っ……その、な?」

「この……ば、ば……ば……」

慌てて弁明するヴァルトとは対照的に、マリエラは俯き肩を震わせる。言葉を告げようにも上手く言えないのか、何度か詰まりながらも……ついに感情の爆発と共に大声を上げて立ち上がった。

「ば、ば……ば……ばかあああ! ダメオヤジい! 馬鹿っ! ばかああああ! お父さんはムサ苦しくないもんっ! 私はお父さんが……お父さん、死んじゃったんじゃないかって……思っ……じゃない! この、馬鹿ダメオヤジい!」

顔を怒りで真っ赤にしながらも立ち上がったマリエラは涙を浮かべて、葡萄酒の入った銀製の水差しを握る。中身が入っているのも構わず、それをヴァルトの頭へと渾身の力で振り下ろした。

「ヘアッダッ! てめっ、おいこらチビ助! 突然何しやがる! ……酒が勿体無いだろうがっ!」

「だって、ダメオヤジが悪いんだもん! 死ね! 今すぐ酒を被って死んじゃえ! バカああっ!」

「おまっ……! 馬鹿って言う奴が馬鹿なんだよ! つーか、酒を被っただけで死ぬか! バーカ!」

「“ヘアッダッ”なんて変な悲鳴上げる人間に言われたくない! バカはダメオヤジでしょっ!」

突然二人の間で勃発した幼稚な言葉のやり取りに、アンジェリカ

は制止するのも忘れて固まっていた。だが驚いていたのは、彼女だけでは無い。カッフェに居合わせていた全ての人間が、水差しが床へと落ちる音と突然上がった少女の叫び声を聞いていた。それぞれの席で行っていた商談や情報交換を止め、あからさまに好奇心を漂わせながらもヴァルト達のテーブルを盗み見ている。

カウンター傍で待機していた給仕も突然の大声に対し、流石に注意をしようか迷っている素振りを見せている。だが先程貰った銀貨という望外な金額を受け取っている事もあり、こちらは明らかに声を掛け辛そうにしていた。

「あー……マリエラちゃん、ダメオヤジさん。もうちょっと静かにしましょうね？　お店に迷惑が掛かるから、ね？」

ようやく硬直の解けたアンジェリカが、周囲から注目されている事に対し居心地の悪さを感じて、慌てて二人に注意をする。

「だって……このダメオヤジが……」

「誰がダメオヤジだ！　アンジェ、お前もだ！　どさくさに紛れて変な呼び方するんじゃないよ！」

「あら、事実じゃない」

「お前……」

「はいはい、続きは館に帰ってからにしましょうね。これ以上はお店にとっても迷惑だわ」

アンジェリカは二人に呆れた視線を向けて立ち上がると、異様に大人しくしていたソフィアへと向き直った。

「ソフィアちゃん、帰りましょう？　……って！？」

浮かべた笑みを張り付かせ、アンジェリカは正面に座っているソ

フィアの様子を見て絶句する。

そこには、先程と同じ姿勢で行儀良く座るソフィアの姿があった。だがヴァルトに掛けられた葡萄酒のあおりを受け……金色の髪からは葡萄酒の滴を垂らし、頬を紅潮させた姿へと変貌していた。

「びしょびしょらんれ？　おいちいみじゆのかえういの……？」

濡れた髪をぴったりと額に張り付かせて、とろんとした虚ろな目でテーブルの上にある果実水に向かって、ソフィアはブツブツと独り事を呟き続けている。

「ちよつと！　……大変！　ソフィアちゃん？　お酒飲んじやったの！？」

「あんじえー、ぽたぽたぺたぺたあ！」

普段は落ち着いた物腰のアンジェリカが見せた余りの狼狽っぷりに、ヴァルトとマリエラも言い争いを思わず止め、互いの顔を見合わせる。次の瞬間、二人は同時に嘔き出していた。

アンジェリカが給仕から借りた布と水の入ったカップを持ち、慌てて戻って来た頃には――テーブルには三人の笑い声で満ち溢れていた。

「なあ……チビ助」

「なによ。ダメオヤジ」

二人揃って、アンジェリカから厳しい小言を貰った後。

暫く無言で席に座り、ソフィアを介抱するアンジェリカを眺めていたヴァルトだったが、ボソリと隣に居るマリエラへと声を掛けた。

無愛想な返事を即座に放たれながらも、話を聞く気があるマリエラの意思を汲み取ったヴァルトは、言葉を選び先程から考えていた事を告げる。

「その……だなあ……あー、なんつーか……一緒に暮らすか？」

「はあ！？何を急に言うのよ！ダメオヤジは、まさか幼女愛好家なの……？」

「ちげえよ！何でそんな難しい言葉知ってやがるんだ！？いや、じゃなくて……その……お前の親父と約束しちゃったからなあ。“面倒見る”ってよ……」

ヴァルトの口から零れた突拍子も無い言葉を聞いて、マリエラが再び大声で叫んだ。ヴァルトも負けじと声を張り上げようとしたが、寝息を立てているソフィアを抱いて髪を拭いているアンジェリカに一睨みされる。言葉の最後は告げる事自体に激しい抵抗を覚え、殆ど小声になってマリエラの耳にしか届かないものとなっていた。

「……やっぱり、嫌か？」

「本当、自分勝手なんだね。最初アンジェさんに私達を押し付けようとしてたくせに……っ」

「ああ……そいつは悪かったと思ってるよ」

「だったら……！」

なるべく目を合わせない様にヴァルトが話している間、テーブルへと視線を落としていたマリエラだったが……ヴァルトの口から飛び出した謝罪の言葉を聞いて、反射的に顔を上げて睨み付けようとした。だがその勢いは、ヴァルトが浮かべる表情を見て失速してゆく。

「……そうだな。逃げるのはもう……終いだ。逃げるなんざ……昔

「つから、俺の性に合わねえんだよ……」

そう言ってマリエラの顔を見つめながら自嘲の文句を漏らすヴァルトだったが、浮かべている表情は何かを堪えている様でもあり、悲しんでいる様でもあった。マリエラがヴァルトと出会って初めて見たその表情に言葉を失う。

「それに……ガキ相手に情けねえところを見せられねえしよ。……特にチビ助、お前にはな！」

マリエラが抱いた心境を余所に、ヴァルトが浮かべていた先程の表情は既に失せ、一転してニカツと意地の悪い笑みを浮かべていた。先程までの調子とは裏腹に、からかうような口調でマリエラに明るい言葉を放つ。

「ば……ばっかじゃないの！ このダメオヤジい、筋肉ダルマ！」
「はい、そこまで！」

口火を切ったマリエラだったが、言葉の応酬が続くことは無い。再び漂う空気を察したアンジェリカが、今まさに子供の言い争いになろうとしている二人の背後に立っていた。顔は笑っているが、腰に手を当てる仁王立ちになっている。

アンジェリカは二人を見比べた後は、パンパンと手を打ち鳴らす。迫力のある笑みに気圧されて、二人は罰の悪い表情を浮かべると黙り込んだ。

「子供の喧嘩はおしまい！ いい加減、帰るわよ？ ソフィアちゃんは今が抱っこして帰るんだから、これ以上の面倒は起さない事！ いい？」

アンジェリカはそれだけを言い放ち。さっさとソフィアを抱き上

げると店の出口に向かって大股で歩き出した。その颯爽とした後姿に、ヴァルトとマリエラは呆然と見つめる他無い。

その時、マリエラの頭に軽い衝撃と共に、暖かい感触が降り注ぐ。

「……帰る、か……」

不意に告げられた言葉に、マリエラが驚いて見上げる。

マリエラの頭に、その大きく暖かな掌を乗せたヴァルトが優しい笑みを浮かべていた。

もう半年以上も顔を合わせていない父親とヴァルトの笑みが、一瞬だけマリエラの思い出の中で重なる。マリエラはされるがままになり、無言で小さく頷いた。

(119) 優しい拳・中編

開いた窓から、月の光が柔らかく静かに降り注ぐ。

夜の眠鐘はとうの昔に鳴り終わり、時間は深夜となっている。時間もさる事ながら、もうじき訪れる麦刈りの季節を漂わせる風が少しだけ冷たい。しかしその冷たい風は優しく、昼間の暑さで疲れた身体を癒してくれる様に頬を撫でてゆく。

娼館の一室、いつもならば嬌声が響き渡るこの部屋も、一人であると少々寂しさを感じる。だが今の気分には、これ位の静けさが丁度良かった。

ヴァルトは無言で椅子に腰掛け、月明かりの中で自身の右手へと視線を下ろす。月明かりの中で、鳶色の瞳は大きく無骨な手を静かに見据えて動かない。

その胸中は、幾度も昼間の出来事に想いを馳せている。

—— “ 帰る ” …… か。 …… いつ以来だったか、そんな言葉を吐いたのは……

無意識のうちに自分が苦笑を浮かべていた事に気付き、ヴァルトは右手から視線を戻す。小さなテーブルの上へと置かれた水差しから葡萄酒をグラスへと注ぐと、それを勢い良く喉へと流し込んだ。

そうした事を何度かヴァルトが繰り返していると……後ろの扉が静かに開き、アンジェリカが扉の隙間から顔を覗かせる。ヴァルトが気配に気付きながら何も言わない事を、肯定と受け取ったのだろ

う。アンジェリカは静かに、部屋へ滑り込むように入ってきた。

「一人っきりで月見の宴？ うふふ……そんな趣のある事を貴方が嗜む人だったなんて、初めて知ったわ」

月明かりの中でも色鮮やかに映える、深紅のドレスは仕事用のものだろう。普通の女性が身に纏ったならば派手さが際立つそれすらも見事に着こなしているアンジェリカは、ヴァルトの返事も待たずにもう一つの椅子へと腰掛けた。

「……茶化すな。たまには、こうして静かに飲みたい時もある」
「そうね。……お酒を飲むにはいい夜ね」

アンジェリカは微笑を湛えながらもそれ以上は何も言わず、水差しを手取る。飲み干されて空になったグラスへと、慣れた手つきでドレスと同じ色の液体を注ぎ入れた。

ヴァルトも無言で月を見上げたまま、グラスを手にとって夜空へと翳す。透明な水晶で出来たグラスに血のように赤い液体が満ち、その向こうに月が赤く輝いている姿は幻想的であった。

「……何で、あんな事を言っちゃったのか……」

ポツリ、と誰にともなく……ヴァルトが独り言を漏らす。グラス越しの月に向けられていた目は僅かに細め、今日の出来事に思いを馳せ呟いた。

「マリエラちゃん達の事？」

「ああ……」

放たれた言葉の意図が分かったアンジェリカが静かに尋ねると、ヴァルトは無言で頷く。

「そうね、私も驚いたわ。貴方があんな事を言うなんて、ね？」

「そんなに意外だったか？　ははっ、そりゃあそうか。なんせ……」

「驚いたことは驚いたけど……私が驚いたのは、貴方がマリエウちゃん達に“一緒に暮らそう”って言った事よ。貴方があの子達の父親を殺したって事は、多分……貴方なら伏せて話す様な気はしてたわ」

「そいつは……慧眼だな。それも娼婦としての勘ってやつか？」

「勘じゃないわ、確信よ？」

アンジェリカの言葉に、ヴァルトは鼻を鳴らして視線を向ける。静かに落ち着き払った調子で言い放つアンジェリカの顔を見ると、その美しい顔に柔らかな微笑みが浮かんでいた。

「貴方って、いつも豪快で……子供みたいにふざけた事ばかり言ってたけれど……ずっと、悲しそうな目をしていたもの……」

「……っ！……」

「だから、きつとヴァルトもあの子達の悲しみを理解出来るんじゃないか？　って思ってたの。貴方はすごく優しい人だもの」

「アンジェ……俺を買いかぶりすぎだ。“優しい人”か……。もし、そんな人間なら俺は五年も前に死んでいる。此処にいるのは、幾ら望もうが死ぬ事のできない。ただの愚か者だ……」

自嘲気味に笑いながら、やっと声に出せた長年の想いをヴァルトは初めて告げた。言った後、誤魔化すような素振りで幾度か首を振っていたが、テーブルの上に置いていた左手が仄かな温もりに包まれて動きが止まった。

最初は訪れた温もりの正体にヴァルトは戸惑うも、やがてそれはアンジェリカのものであると気付く。アンジェリカは暗殺者とは思えない、長く綺麗な指でヴァルトの左手をそっと包み込んでいた。

アンジェリカはただ、手を握るだけで何も語る事は無い。幼さの残る顔には似合わず、大人の女性としての柔らかな微笑みを浮かべているだけだった。

ヴァルトも小さく笑みを浮かべると、掲げたままのグラスに入った葡萄酒を一気に飲み干す。

テーブルへとグラスが置かれる音の後——無言のままにアンジェリカはグラスにまた酒を注ぎ、再びヴァルトがそれを静かに飲み干す。

月明かりの中で、互いに言葉を交わさない静かで緩やかな……優しい時間だけがゆったりと部屋を満たし、そして流れていった。

二人で静かに酒を酌み交わした夜から、アンジェリカはヴァルトとマリエラ達姉妹が暮らせる家を、仕事と併行しながらも必死に探す作業に追われていた。

しかし、理想の条件に合った家などそう簡単に見つかる筈も無く。無常にも時間だけが過ぎ去り、気付けば数日が流れていた。ヴァルトは家自体“どんなにボロ家でも構わない”と言っていたのだが、それを全力で反論したのはアンジェリカだった。

アンジェリカ曰く——

「女の子が暮らす家なのよ！　ちゃんとした家じゃないと駄目！」
そう言いながら、ヴァルトに向かって鼻息荒く語ったのは記憶に新しい。

ヴァルトが大人しくアンジェリカの提案を受け入れたのは、彼女の言う事に一理あったからだ。

三下とはいえ、部下に大怪我を負わせた自分に対して恨みを抱いたアルギニン一家が、賞金を掛けたとばかりに考えていたのだが……それは勝手な思い込みだった様で、アルギニン一家が崩壊した後も賞金は取り下げられる事がなかったのだ。

“賞金を取り下げられない”という事は、間違い無く賞金を掛けた人間は別に居て、これからも賞金稼ぎがヴァルトを狙ってくる事を物語っている。

さらには賞金稼ぎといえども、殆どは無頼者の集まりである。“鉄球のゴードイ”の様に正面から正々堂々と戦いを挑んでくる輩の方が珍しい。大抵彼等が取る方法は不意打ち、若しくは……外道な方法として“人質を取る”といった手段を躊躇わないだろう。

“住めれば何でもいい”と面倒臭そうに言っていたヴァルトだったが、アンジェリカと二人きりの時に“家を選ぶ基準に拘るも一つの理由”として話を切り出された事により認識を改める事となった。

やはりアンジェリカと暮らすべきだろうと意見を変え、一度はマリエラとソフィアにもその件について一度は語ったのだが——誰であろうマリエラが、ヴァルトの提案を真っ向から拒否したのである。

「俺が面倒を見る”って言ったんだから、ちゃんと最後まで責任を取りなさいよね！ このダメオヤジ！」

……と、この様な調子で反論の余地さえ与えず、ヴァルトはマリエラに怒鳴り返された。姉妹達の身を案じて告げた提案を一刀両断された事に関しては、何も返す言葉も出ない。

流石に“もう逃げない”と言って、心にも誓った限りは、今更『危険だから』という理由のみで、二人の意思を無視してアンジェリカへと押し付けるわけにはいかず……仕方無くアンジェリカに家の

件は一任する事にしたのだ。

しかし、“家なんかどうせすぐに見つかるだろう”と樂觀していたヴァルトだったが、数日も経つと気持ちに焦りが生まれる。

「色々と当たってみたけれど、やっぱりこの金額じゃ……ロクな家
が買えないわね……」

「……だわなあ」

アンジェリカはテーブルの上に置かれた、ヴァルトの全財産に目を向けたまま溜息を吐いた。

先程から何度も繰り返されるアンジェリカの行動を見て、ヴァルトは苦笑を浮かべて同意の返事を返す。横目でアンジェリカに睨まれると、後頭をボリボリと掻き毟って諦めを隠し切れないアンジェリカから慌てて目を逸らした。

「ねえ、ヴァル？ 貴方、恩赦として金貨を三枚頂いて闘技場から出てきたのよね？」

「ん？ ああ……そーいや、お前には話しちゃってたんだな」

「余りにも貴方の金銭感覚が破綻していたから、最初に聞かせて貰ったわよ……」

「……ああ、うん」

「で……」

次第に会話の雲行きが怪しくなり、適度に誤魔化す文句をヴァルトが考えようとした時にはアンジェリカの方が先に行動を起こしていた。

「金貨三枚もの大金を持って出てきて数日で、どうして今はこれっぽっちしか残っていないのかしらね……！」

「ははっ……わっははははっ！ 正直すまん！」

“すまん”で済むなら、騎士団なんかいらないうてのよ！」

堪えていた怒りが頂点に達したのだろう、アンジェリカは座ったまま両手で勢い良くテーブルを叩いてヴァルトを叱る文句を飛ばした。普段ならば酒場に訪れ酒と料理を嗜む為に置かれているテーブルだったが、その上で数を数える為に十枚単位で積み重ねられた銀貨がグラグラと揺らぐ。

テーブルに置かれた金額は、銀貨が八百五十二枚のみだった。

銅貨と青銅貨は買い物をするものが大きな単位のもので、数には入れられていない。

これだけの枚数でも、一般人からすれば大金に相当するのだが……家を購入するとなれば事情はがらりと変わる。

王都でもある限られた土地しか無い街は、土地建物は他の地域よりも購入金額は格段に高くなる。普通に暮らしたとしても三年は楽に暮らせる程の金額でも、購入となれば外壁の外にある貧民街とさほど変わり無い程度の場所ですら、バラックに近い家を購入するのが精々だろう。

無論、家を借りるならば十分過ぎる金額なのだが——これは可能性すら残されていない案で、最初から二人の念頭に置かれていなかった。ヴァルトがただの一般市民なら問題は無い。だが、賞金が掛かっている以上、そんな厄介者に対し家賃を幾ら上げようが家を貸すような物好きな家賃しなど、街中何処を探してもいるわけが無い。

だからこそアンジェリカは日々頭を悩ませながらも、途方に暮れ

る羽目となっていた。

相手を威嚇する時の癖なのか、胸を強調する形で腕を組みアンジェリカはヴァルトを睨み付ける。そんな彼女に今は何を言っても無駄だと、諦めの表情を浮かべているヴァルトとの間に、気まづく重い空気が漂う。

外と酒場を区切る分厚いドアが開かれると、一人の男がゆっくりとした足取りで娼館の中へ入ってきた。

「あら……ごめんなさい。女なら夜の眠鐘から営業よ。酒場はもう少し早いけど、今はまだ営業はしていないのよ。折角来て頂いたのに、本当にごめんなさいね？」

アンジェリカは渋面を作っていた表情を一転させ、営業用の笑顔を浮かべる。嫌味どころか好感さえ抱きかねない澄んだ声で、扉から大股でこちらへと近付いてくる男へアンジェリカは言葉を放った。時間を間違えて娼館へと訪れる者はそう少なくは無い。目の前にいる男もきつとその類なのだろうと思っていたアンジェリカだったが、男から帰ってきた返事は意外なものだった。

「いや、余……俺は今日、そちらの男に用があつて来たのだ」

歳の頃は四十前後か、日除けに被っていたフードを下ろした顔は精悍な顔立ちだった。顎に少し蓄えられた髭は丁寧に整っており、細い灰色の目と相成って鋭さを漂わせている。

男が睥睨しながら落ち着き払った低い声で告げた言葉に、アンジェリカは明らかにムツとした顔を浮かべる。

何か一言位は言い返さないと気が済まないのか、アンジェリカが口を開くが……それよりも早くに、別の場所から穏やかな声があった。

「クリス。随分と遅かったじゃないですか？　僕は待ちくたびれちゃいましたよ」

場にそぐわない程にのんびりとした声は酒場の端、陽の光すら当たらず薄暗い闇が沈殿しているようなテーブルの方から聞こえてきた。アンジェリカとヴァルトが思わずそちらへと視線を向ける。

そこには一人の銀髪の青年が椅子に腰掛けており、クリスと呼ばれた男に対してにこやかな笑顔を浮かべながら手を振っていた。

「え、嘘……何時の間に……あの子何なの？　……どうして？」

忽然と現れたにも関わらず、まるで長時間くつろいでいたかのような素振りを見せる青年の姿に、戸惑いを隠し切れないのだろう。アンジェリカは自身の目が信じられず、何度も瞬きを繰り返し、手の甲で目を擦って青年を再び見た。

「……幻覚でも幽霊でも無い。気持ち悪い奴だろ？　下手な憶測をしたって無駄らしい。アイツはそういう“モノ”だと思っておいた方が、大分気も紛れる」

「だから……僕は、ラズーロですってば！」

再び大きく瞬きを繰り返すアンジェリカに向かって、ヴァルトが苦笑混じりに言葉を告げる。即座にヴァルトの言葉に異議を唱える青年——ラズーロと、それを無視して嫌そうな表情を即座に浮かべるヴァルトを交互に見比べた後、アンジェリカはヴァルトに問い掛けた。

「し……知り合いなの？」

「知り合いたくも無かった奴だ。アレはどうせ放っておけば、朝靄みたく勝手にどっかへ消えるさ。それよりもだ……問題は、アンタだ」

先程から濃密な殺気を込めてヴァルトが睨んでいるにも関わらず、未だに自分から視線を外そうとしない男を顎で差す。

そちらが先に下手な真似を仕掛けてきたら、即座に動く準備は出来ている。

そういった脅しも含めて込め放っていたヴァルトの殺気だったが――それを平然と受け止めた上で何ら動じる事無く佇む。

そんな眼前に立つ男の存在が、ヴァルトには突然現れたラズーロ以上に激しい興味を駆り立てられた。

並の一般人ならば、ヴァルトが放った濃密な殺気を受けた上で平然としていられる訳が無い。無論、暗殺者や賞金稼ぎも同様だ。それどころか殺気に慣れた者であればある程、平然としている事など有り得ない話だった。

荒事を専門としている者ならば、殺気を受ければ無意識にしる体が構えてしまうものだ。だが、今ヴァルトの前に立っている男には、その様な動きは一切伺え無い。

言葉も無く――無言で交わされるだけの視線の応酬は、長くは続かなかった。

座ったままのヴァルトを見下ろしていた男が唐突に口を上げ、笑みを浮かべて嬉しそうに低い声で短く笑う。

「フッ……やはり、貴様は面白いな。こうして正面から、不躰に殺気を当ててきおった奴は……お前で二人目だ。気に入ったぞ」

クリスが放った慇懃無礼な物言いに、ヴァルトの不機嫌な顔が更

に響められる。

「へえ……そいつはどうも。だが俺はアンタが気に食わねえな、どう見ても怪しげで……さらには偉そうな物言いの奴は特にな？」

「ふつくつく……まあ些細な事ではないか？ それにな……俺にとって、これが最も自然な態度なのだ。貴様こそ、そうあからさまに嫌わずとも良からう？ 俺はお前にとって、良い話を持ってきてやった客人なのだぞ？」

「はん！ そいつが果たして“いい話”かどうかは、俺が決める事だ！」

「ちよつと、ヴァルどうしたのよ？ 初対面の相手にそんなに絡んだりなんかして……」

ヴァルトはアンジェリカの言葉にも耳を貸さず、クリスと呼ばれた男を睨み付けるだけだ。態度といい、とうに収められた殺気といい……ヴァルトが敵対を覚えるに値する条件は整っている。クリスは“良い話を持ってきた”と言い切っていたが、それでも心に張り付く敵対心は拭い切れるものではない。

「ラズーロに聞いたのだが、貴様は今家を探しているそうだな？」
「……で？」

相変わらず鼻を鳴らして無然と放つヴァルトの言葉を聞いて、待っていたとばかりにクリスは目を細め——ヴァルトと同様、鼻を鳴らすと口に笑みを携えた。

「その家を俺が提供してやろうと言うのだ。どうだ？ 非常に有り難い話であろう？」

「はあ？ ふざけんな。そんなもんで……っが！」

小気味良い音と共にヴァルトの頭に激しい衝撃が襲う。

後頭部を押さえ、衝撃の元へとヴァルトは素早く視線を走らせる。すると何時の間にも回り込んだのか……右拳を振り抜いた体勢のアンジェリカが目には飛び込んできた。

「……ヴァル、貴方は少し黙っててくれないかしら？」

「アンジェ、てめっ……」

「私は“甲斐性無し”の貧乏人は黙ってろ”って言ってるのよ。い・わ・ね！」

「……チッ！」

鬼気迫るアンジェリカの様子に、ヴァルトは喉まで出掛かった文句を黙って飲み込む他無い。返事代わりに不貞腐れた様にテーブルへと足を投げ出して、ヴァルトは椅子に背を預けた。

「大変失礼しましたわ。ミスター・クリス。この馬鹿は黙らせましたので、続きを是非お願いしたいのですが宜しいでしょうか？」

「くっくくく……無敵無敗と謳われた拳帝も、女に掛ければ形無しだな」

目の前で行われたアンジェリカとヴァルトの掛け合いが余程気に入ったのか、クリスは喉を鳴らして笑う事を止めない。

「さて……面白い余興も拝めた事だ。今日は帰るとするか。ああ、そうだ……拳帝よりも気丈な娘よ、家の事ならば……そこで呑気に笑っている影の薄いのにでも聞け。単に今日は顔を見付いて来ただけだ。多忙な身ですまぬな。では拳帝、また会おう！」

「今度なんざねえよ！ 覚悟しておけ、次その面晒したら容赦無く潰すからね！」

「はっはっはっ！ それは楽しみにしておこう」

入ってきた時と同様大股で外へと出る間際に掛けられたヴァルト

の言葉に対し、クリスは余裕のある笑みを浮かべて言葉を返すと、笑い声を響かせながら悠々と扉を閉めた。

「……おい」

「……ねえ、君」

唐突に訪れた来訪者が嵐の様に吹き荒れるだけ吹き荒れ、颯爽と去っていった後には沈黙が酒場を覆った。

ヴァルトは先程のやり取りが後を引いているのか、険しい横目でラズーロを睨みつけている。その隣ではアンジェリカが期待に満ちた目で、同じくラズーロを見つめていた。

「えっと……あんなに楽しそうなクリスを見たのは、僕も久し振りでよかった……です？」

いつの間にか自分へと集中している二人の視線に対し、気まずさを誤魔化すようにラズーロは苦笑を浮かべて呟くと、視線を扉から二人へと移した。

「てめえの気持ちなんざ聞いてねえんだよ。いいから話せよカマ野郎」

「ちょっとヴァル！ 確かにこの子、やたらソレっぽいけど……だからといって、面と向かって言っちゃ駄目じゃない！」

「お二人とも流石に口が悪いですねえ。もう、帰ろうかな……僕」
始終笑顔を浮かべた様なラズーロの顔にも暗雲が僅かに差込み、ポツリと漏らした言葉にアンジェリカが慌てて駆け寄ると弁明を始める。

「嘘……嘘ですわ！ ミスター・ラズーロ！ 良くお顔を拝見すれば、とても男らしい方ですわね？」

「何が“男らしい方ですわね”だ！　なよなよしてて、見るからにカマっぱいから“カマ野郎”でいいんだよ。ほらとつとと話せよ、カマ野郎」

「ヴァル！　いい加減にしなさいよ！　ヘソを曲げられたらどうするのよ……」

遠慮の欠片など全く無い言葉で、無然と言い放ったヴァルトの耳傍まで寄ってアンジェリカは小声で嗜める。小声といっても、客の姿が無い静かな酒場ではラズーロの耳まで充分届く声量である。ラズーロは苦笑を浮かべて、おどけた様子で肩を竦めた。

「ハハッ、もういいですよ。そういう事を言われるのには、慣れてますから……。えっと、家の事ですが……言葉で説明するよりも、現物を見ていただいたほうが話が早いと思うんですが。お二人は、既に何か御予定がございますか？　今日これから向かって大丈夫でしようか？」

「大丈夫じ……」

「大丈夫です！」

嫌がらせの如く、当然拒否しようとしたヴァルトの声をアンジェリカが無理矢理に遮った。その際、ヴァルトをきつく睨みつける事は勿論忘れない。

発言を遮られたヴァルトよりも、今度はラズーロの方が戸惑いを見せた。だが、アンジェリカの浮かべる笑顔に含まれた無言の催促には勝てなかったらしい。

「そ……そうですか……それは良かったです。それでは、家まで僕が御案内したいと思いますので……どうせなら二人の姉妹さんもお連れになつては如何ですか？」

「そうね、あの子達が住む家だものね……」

「おい！ 俺を無視して話を進めるんじゃない……」

「急いであの子達も準備させなきゃ……ああ、急がしい急がしい……」

ヴァルトは今度こそ異論を放つために口を開く。だがそれも当然予想していたアンジェリカの言葉によって遮られ、またもや虚空へと霧散してゆく結果となった。

アンジェリカは苦渋の表情を浮かべるヴァルトに気付かぬ振りをして、二人の幼い姉妹が寝起きしている。娼館の一室を目指して駆け出していた。

「……本当に、女性に対しては形無しですね……ヴァルトさん」

「うるせえよ！ それよりも俺は出かけるからな。案内するならアンジェ達を連れて行け」

「えっ？ 一緒には来られないのですか？」

ヴァルトの口から飛び出した予想外の言葉を聞いた、ラズーロが初めて見せた驚きの表情を他所に、ヴァルトは大きく舌打ちをする。

「ああ！ 家を見に行くなんて面倒臭え！ 所詮家なんてのは……寝て起きて、雨風凌げりゃどんなのだっていいんだよ！」

最後にそれだけを言い放つと、ヴァルトは椅子から乱暴に立ち上がった。椅子も直さず、不機嫌さが滲み出ている足つきで外へと続く扉へと向かう。

その姿を暫くは黙って見ていたラズーロだったが、やがて『いい事を思い浮ついた』とばかりに顔を輝かせて、邪悪な笑みを浮かべた。すぐさま、ヴァルトを試すような口調で口を開く。

「ヴァルトさん、いいんですか？ 本当は家なんて嘘で、実は三人を人質に取る為の芝居かもしれませんよ？」

その言葉に、ヴァルトは何も反論を返さない。ただ無言で横目でじろりとラズローを睨み、鼻を一つ鳴らすだけで何も言わず、扉を乱暴に開けると外へと出て行った。

「はああ……全く。何で……あの人もこの人も……本当、勝手ばかりなんですから。少しは人の身になると言う事を考えて欲しいものです……」

酒場に一人残されたラズローは、自身の目論見が外れたことを知り深く溜息を吐く。

開いているのか閉じているのか解らないほどの糸目を更に細めると、困ったように人差し指で頬を掻いた。

(119) 優しい拳・後編

ヴァルトは特に当ても無く通りを歩く。

当然の事ながらは用事などありはしなかったのだが……出て行った理由は至極単純なものだった。

訳も解らぬ内に自分が知らない人から施しのように家を与えて貰う行為など、ヴァルトの男として僅かな自尊心が許さなかったただけだ。

だが、実際のところは家を買う金など持ち合わせておらず。要は立場も無く、そして何より——情け無い自分を認める事を拒否して、単に拗ねて飛び出しただけに過ぎない。

「……くそ、どいつもこいつも物欲に塗れやがって……」

ぶつぶつと不機嫌さ露に毒づきながらも、ヴァルトは歩き続ける。無意識のうちにヴァルトは数日前、串焼き屋の店主や名も知らぬ奴等と馬鹿騒ぎをしていた通りにまで足が向かっていた。

半ば無理矢理に腹を意識して、串肉でも食って帰れば時間も稼げるかもしれない。暫く時間を潰し、娼館に戻ったら既に三人は出掛けているだろう。

ヴァルトは自分にそう提案するも、ふとある事を思い出し足を止めた。数日前に自分がまさに格好をつけた挙句、大金の入った袋を店主の息子にやった事を思い出す。さすがにその何日後かにひよっこりと顔を出すのも、どうにも気恥ずかしい。

結局は時間潰しは別の場所で行おうと思ひ留まり、ヴァルトは踵

を返そうとする。しかし、そう思った次の瞬間には――ヴァルトは、よく知った濁声に呼び止められる結果となった。

「おい……待ちな。どこへ行こうってんだ？　ヴァルト」

「よお！　宴会の時以来だな。もう怪我は大丈夫なのか？」

戸惑いながらも何とか返し、ヴァルトが振り返ったその時。

顔に大きな茶色いものが飛んできて、視界が不意に茶色で覆われた。飛んできたそれをヴァルトは無意識に払いのけるように受け止めると、開けた視界に今度は硬い拳骨が映った。

「……こんつの、馬鹿野郎がああ！」

怒声と共に、重い音がしそうな程の硬い拳骨がヴァルトの顔面を正面から捉える。

当然ヴァルトはそれを躲す事もできたのだが、拳骨の持ち主が誰かわかっているので、敢えてそれを受け止めた。

「つつ……随分といきなりだな……結構痛かったぞ」

「……ったりめえだ！　儂の拳骨は鋼よりも硬いことで有名だからな！」

「たく、これが……怪我也治ってねえ奴が振るう拳かよ」

「怪我の痛みなんぞ。儂の怒りで消し飛んだわ！　大馬鹿者がっ！」

咄嗟の拳骨を食らったことで忘れていたが、ヴァルトは最初に手で受け止めていた重いものを見る。それは、あの宴会が催された翌日にヴァルトが店主の息子であるダンに渡しておいてくれと頼んだ金が入った袋だった。

「これは……あんたのもんだろ？」

「知るか！　コイツはどこぞの馬鹿が勝手に置いて行った、迷惑極

まりないモノだ！ ……全く、骨があると惚れ込んでみたら、途端にこれだ！ 人を舐めるのもいい加減にしやがってんだ！ いいか……人と人との縁はな、金でどうこうって打算じゃないんだ！ 儂が人から金を恵まれて“はいそうですか、頂きます。ありがとうございます”なんて、汚ねえ人間に見えるのか？」

「それは……」

ヴァルトは“あれはそういうつもりでは無かった”と言おうとして、先の娼館でのやり取りを思い出してしまい口を噤む。

つい先程まで、ヴァルトも店主と同様の気持ちを抱き、“恵まれた側”としての不快感を抱いていたばかりであった。それが嫌になつて飛び出したにも関わらず、実際はラズーロやクリスといった奴等と自分もなんら変わりはないではないか。相手の気持ちも考えず、上から目線でいい事をしたと思っていた事に対して、今更否定も弁明すらも行える筈が無い。

ヴァルトはそう思うと、未だ怒り覚めやらぬ大声で説教をしている店主に向かい直る。

「オヤジ……すまなかった。俺が間違つてた。どうか許してくれ」

「ふ……ふん！ なんだ、急に神妙になりやがって……」

「いや……言い訳するだけ、馬鹿らしいほどに俺が悪い。俺はアンタの事を何一つ考えずに、金でものを見ていたようだ……。本当にすまなかった！」

「……分かればいいんだ。儂はな？ 歳は違えど、お前さんとは友達と思っっている。だから、こんな無粋な真似は二度とせんでくれよ。だがもし……儂に心から申し訳ないと思うのなら、また今度串肉でも食いに来い。ダン坊に焼かせた、とても食えたもんじゃない串肉を口に詰め込んで許してやる！」

さっきまでの激昂はどこへやら、店主は大声で怒鳴っていた事が恥ずかしくなったのか。自分達に注目する通行人を見回した後、苦い笑みを浮かべて頭を下げるヴァルトの肩を叩いた。

いらぬ後腐れは無し、とばかりの店主に対しヴァルトも口端を上げて笑ってそれに答える。

「そうだ、オヤジ。これから屋台に寄ろうとしてたところだったが、今はもうやってるのか？」

「ああ、その事なんだがな……」

互いに顔を見合わせ、ひとしきり笑い終えた後。ヴァルトが店主に向かって、店の様子を尋ねる。その言葉を聞いた店主は笑顔から一転、目を伏せ気まずそうな面持ちで言葉尻を濁す。

「……屋台は、もう辞めにした」

「畳んだってのか？ 屋台を？」

店主の口から出た言葉に、ヴァルトは心底驚いた顔を浮かべる。対して店主は暗い面持ちから一転、ニヤリと笑みを漏らすと通りにある建物の中で一軒家を指差した。

指し示された木製の一軒家は改装中らしく、大工達が慌しく動き回っていた。

「“屋台は”もう終わりだ。実はお前が最初にくれた金貨と、溜め込んでおいた金でな……家を改築していっそ店にしちまおうって思い立ったわけよ！」

「おいおい！ 屋台のオヤジから、いっぱしの店主様に鞍替えって訳かよ！」

店主が意地悪く浮かべた笑みの意味を察したヴァルトが、笑いながら店主の肩を叩く。だがつい怪我をしている方の肩を叩いてしま

い、店主は痛そうに顔を歪めるも、浮かべた笑みは絶やさなかった。

「ああ。儂の若い頃からの夢だったもんが、これでようやく叶う。……てな訳だからよ、今は坊主を修行中って訳だ。焼いてやれなくてすまねえな……」

「いや、構わねえよ。だったら、店が出来たら教えてくれ。俺が最初の客になってやる！ そうだ……今度は真っ向からこれを受け取ってくれないか？」

ヴァルトは腰に吊ってある財布の皮袋をあけると、中へと手を突っ込む。そして銀貨を十枚程握り、店主へと差し出した。

「ヴァルト……さっきも言ったが……」

「違う違う、こいつは純粹な祝いの金だ。だから、ほら……俺の財布から出しただろ？ これ位は受け取ってくれ。そうじゃないと、今度は俺の気が済まねえ！」

「全く、お前さんという奴は……ああ、そうだな。有り難く受け取っておくよ」

店主はそう言うのと照れくさそうに顔を逸らしながらも、ヴァルトが差し出した銀貨を受け取った。

今度は店主が自分の金を快く受け取ってくれた事により、軽い安堵と心の中で何かが落ち着く感触を味わう。その感触の正体をヴァルトが思案する前に、遠くの方から年若い大工が走り寄ってくる姿が目映った。

こちらへと駆け寄ってくる際に放つ言葉の内容から、大工はどうも作りで不明な点を聞きに店主を呼びに来たのだろう。ならばこれ以上、ヴァルトが店主を留めておくわけにもいかない。

「店が出来たら教えてくれ。そうだな……特別地区の二番通りにある、『魅惑の毒』っていう娼館の誰かに言伝してくれればいい。何を置いても食いに行くからよ？」

「店を開けるのは、順調にいけば十日後位だ！ 出来上がったら、ダン坊を使いに出すから来てくれ。肉と酒を用意して待ってるからな！」

「そいつは、楽しみだ！」

ヴァルトと店主はそれだけを言い合うと、再会の約束をして別れた。

「……しょうがねえ、戻るとするか」

再び一人になったヴァルトは、気を取り直す様に独り言を呟く。軽く溜息を一つ吐き踵を返すと、元来た道を戻って娼館を目指して歩き始めた。

ヴァルトが娼館に戻ると、意外な事に出迎えてくれた者達がいた。アンジェリカと明日から共に暮らす二人の姉妹、何時見ても全く捕らえ所の無いラズーロ。非常に奇妙な組み合わせの四人が、それぞれ並んで立っていた。

「……遅い！」

「お前達、もう見てきたのか？ 随分と早えな……」

「そんなわけではないでしょ！」

アンジェリカはヴァルトが呟いた言葉を聞くと、腰に手を当てて怒りの表情を浮かべ即座に反論を返す。

扉から入ってきたヴァルトの姿を見るなり、ソフィアは少し拙い足取りで駆け寄って来ていた。マリエラは危なっかしく走るソフィアを追い駆け、ラズーロは糸目をさらに細めて苦笑を浮かべている。

「ヴァル、貴方が帰ってくるのを待っていたんだからね！……本当、肝心な時にはいつも姿を消すんだから！」

「あのね、いえをみにいくの！ソフィとマリーとヴァルのおうちい！」

「こら、ソフィ危ないったら！走っちゃ駄目だって！」

「……と、いうわけでして。皆さんで貴方の帰りをこうして待っていたわけです」

三人がほぼ同時に、それぞれの言葉を告げるので今ひとつ状況が把握出来無い。

ヴァルトは最初、驚いて目を何度か瞬きをしているだけだったが――騒がしくも暖かい光景を前に、少しだけ頬が緩んでいる自分に気付いた。

「あー……その、すまん。少しの間、人に預けていた金を受け取りに行ってたんだ。何も言わずに出て行って、待たせちゃって悪かったな」

そう言っヴァルトは、一度は降ろした背負い袋の紐を再び肩へと掛け直す。苦笑を浮かべ、短く切った赤毛を掻き耂る。

白々しい言い訳にも程がある。と、自分を内心で自嘲しながらも――今度は自分の帰りを待っていてくれた彼等と共に、ヴァルトは再び陽の当たる通りへと足を踏み出した。

それは“屋敷”と呼んでもおかしく無い程の建物を、ヴァルトは呆然と見上げていた。

丁度通りを挟み、一般街と貴族街が隣接する場所だとは向かう途中で聞いていたので、ヴァルトは一般街に佇む素朴な家だとばかり思っていたヴァルトだったが……予想を大きく上回る建物を前に疑わしげに目を細める。

それもその筈だ。下級貴族か商会の建物にも見える二階建ての屋敷は、外見を見る限りかなりの年代を感じる。しかし建物もやや広めの庭園も良く手入れがされていて、今にでも玄関ホールから使用人が顔を出しそうだった。

「本当にここが……？」

ようやく言葉を発したヴァルトは、視線を建物から前で笑みを浮かべているラズーロへと移す。ラズーロは笑顔を崩さず、大きく一度だけ頷いた。

「ええ、此処が今日から貴方達の家になります」

「良い家じゃない……良かったわね？」

ヴァルトの隣に立っていたアンジェリカは、ヴァルトには無く、自分の横に手を繋いで並んでいたマリエラとソフィア姉妹に向かって優しく微笑み掛けた。

嬉しそうに顔を見つめて「家」へと走っているソフィアを、慌ててマリエラが制止の声を放ちながらも追いかける。だがマリエラの顔もソフィア同様、嬉しさと期待を隠しきれていなかった。

明るい笑い声を放ちながら、手入れのされた庭へと走ってゆく二人の姉妹を見てヴァルトは深い溜息を吐く。その顔に有り有りと浮かんでいた色を読み取ったのか、アンジェリカが小さく笑いながらヴァルトの腕を取って自身の身体を寄り掛からせた。

「ねえ、今、貴方が何を考えてるか……当ててあげましょうか？」
「……いや、当てられても結果は一緒だしな……」

ヴァルトが見せた心底嫌そうな反応に、もう一度アンジェリカはクスクスと笑う。

「変わらない結果なら、そんな嫌そうな顔しないの。全く、貴方って人は……」

言葉の端々から漂うアンジェリカの嬉々とした様子に、ヴァルトは溜息を吐く。

明日からのヴァルト、マリエラ、ソフィアの三人で暮らす事を再び想像してしまうと——ヴァルトは人知れず、もう一度大きく深い溜息を吐くのだった。

思い出の中にある掌

娼館へと現れたクリスと名乗る男性からヴァルト達に貸し与えられた家は、思った以上の広さだった。

外見同様、中の構造や設備も時代を感じさせるもので、頑丈に作られた屋敷はその年月を物ともしない風情を醸し出していた。

二階建ての屋敷の内部は、一般的な屋敷と造りは大体一緒だ。入り口からすぐ前の玄関ホールは広く、ちょっとした立食パーティすら開けそうである。二階が住人の居室となっており、日当たりも非常に良い。一階は玄関ホールの他は、調理場や食堂を除いて使用人室まで兼ね備えている。

一通り、貴族が構える屋敷として最低限の機能を持つこの屋敷を売りに出すとならば……ヴァルトには幾らになるのか見当が付かない。

但し、それは洗練された調度品や家具があれば、絢爛さに目を眩んだことだろう。

ヴァルト達が貰ったのは、厳密に言えば……言葉通り“屋敷”だけだった。

足を一步踏み入れれば、屋敷の中はがらんどうで、何も無い部屋達は見えていて寂しいものがある。全部の部屋を回っても、今はクロ―ゼットはおろかベッドですら持ち運ばれた形跡のみを残しているだけだ。

ヴァルトはバルコニーから外を眺めて、やり切れない感情と共に疲れた溜息を吐く。

昨日、屋敷の様子を伺った際に目に付いた、家具や調度品を運び出した後に残されていた“あるもの”の始末を考えるだけでうんざりしていた。

それは――長年に渡り、溜まりに溜まった埃や、家具の所為で前の住人には見えなかった頑固な汚れである。

ヴァルトは別に汚れ位は構わなかったのだが、構う人間が二人ほど傍にいたのが災いとなった。

今こうして、ヴァルトが深い溜息を吐く原因は……アンジェリカとマリエラの二人にある。

足を踏み入れ屋敷の惨状を見るなり、つい今しがたまで外観を見上げて喜んでいた様子など関係無いとばかりに、二人は抗議の声をラズーロにぶつけた。しかし稲穂に北風の如く、ラズーロは予想していたのか……のらりくらりと、風に吹かれた稲穂のように抗議の嵐をいとも簡単に受け流しただけだった。

ラズーロには何を言っても無駄、と解った二人が次に取った手段はそう……

四人全員で行う“大掃除”である。

「あーっ！ ダメオヤジ！ またサボってる！ アンジェさんに言いつけるよ！」

「うるせえなあ……ちよつと外の空気を吸いたかっただけだ」

その声にヴァルトは心底面倒くさそうに頭を掻きながらも振り返り、言い訳を口にする。見ると、開放たれたバルコニーのドアから白いエプロンを汚れて黒くしたマリエラが顔を覗かせていた。御丁寧小さな頬を膨らまし、怒った様子をより強調させている。

マリエラが身に纏っているエプロンはアンジェリカの娼館から借りたものだ。しかし、大人用のそれは大き過ぎたようで、肩紐を絞って小さくはしているが、まるで服の様にも見える。頬だけでは物足りないと感じたのか、子供なりに威圧感を出そうと上目遣いでヴァルトを睨み付け、肩を怒らせて近付いて来た。

「キチンとしないと、いつまで経ってもお掃除が終わらないでしょ！ ほら、さっさと仕事して！」

「そうガミガミ怒鳴るなよ。今からそんなんじゃ……直ぐに老けちゃうぞ」

ヴァルトは子供ながらの甲高い怒鳴り声に片耳を塞いで、顔を顰めて肩を竦めた。

「そ……そんなことないもんっ！」

まだ十歳を過ぎたばかりだというのに“老ける”という単語に過敏な反応を見せたマリエラを見て、ヴァルトはもう一度肩を竦めて視線を外す。そしてバルコニーにある青銅製の手摺に背を預けながら空を見上げると、ヴァルトは背後にある手摺の外へと親指を立て、マリエラに声を掛けた。

「あーわかったわかった。そう怒鳴るな……、ほれ、見てみろよ。今日もいい天気だぞ」

ヴァルトの言葉に対する返事は、予想外の方角から返ってきた。「確かにいい天気ねえ？」

ヴァルトの言葉に同意を示したのは、目の前にいるマリエラからでは無く……手摺の下から響いてきた声だった。

調子こそ穏やかながらも言葉には表せぬ迫力が籠もったその声に、ヴァルトの喉から短く呻きが漏れる。慌ててしがみ付くように柵の下、丁度玄関がある位置へと視線を下ろすと、そこには左手をソフィアと繋ぎ、空いた右手を腰に当てたアンジェリカの姿があった。

「随分と余裕があるのね……？ 頼んでおいた掃除は終わったのかしら？」

「おわったのかしらあ？」

眼光鋭く見上げるアンジェリカに、ヴァルトは声も出ない。

アンジェリカがの笑みを見て、隣にいるソフィアは楽しい事だと勘違いしているようだ。満面の笑みを浮かべながらもアンジェリカの言葉を真似ている。

「あっ！ アンジェさんおかえりなさい」

「はい、ただいま。マリエラちゃん」

「ねえたん。ただいまあ！」

固まったヴァルトを無視するかのようなやり取りをマリエラと行いながらも、アンジェリカはにっこりと微笑みを浮かべていた。腰に当てていた右手をヴァルトへと向けて、アンジェリカは人差し指を曲げ、無言で『降りて来い』とヴァルトに命じる。

それを見たヴァルトは片手で顔を覆って溜息を吐き、対照的にマリエラは『ざまあみろ』とばかりにクスクスと笑い声をあげるのだった。

ヴァルトが足取り重く階下へと降りると、玄関ホールの中央で腕を前に組んだ“魔王”がいた。隣には天使の様な笑みを浮かべたソフィアが、降りてきたヴァルトの姿を見てにこやかに手を振っている。

「ヴァル、一つ確認したいのだけど」

「……ああ？」

「私は頼んだはずよね？ “自分の家なんだから、きちんと掃除をして” って？」

「……ああ……」

「そしてヴァルはこう言ったわ。『分かった分かった。子供じゃねえんだからよ』 って？」

「……ああ……」

“魔王”ことアンジェリカは、ヴァルトが過去に言った言葉を器用にも声色を用いて真似をする。それが余りにも似ていたので笑いを堪えきれず、ヴァルトの隣に立っていたマリエラが噴出した。

「……あ・な・たは子供じゃないんだから！ 何度も同じ事を言わせないで頂戴！」

「いや……さっきのはな……その、休憩っーか。湿っぽい室内に居過ぎて、つい外の空気を吸いたくなっただけっっーか……」

「三回掃除をサボってましたあ！」

「ちょっ！ てめっ！」

唐突に上がったマリエラの告げ口の声に、ヴァルトは怒った顔をマリエラに向けた。だが当のマリエラは、どこ吹く風とばかりにあらぬ方向を向いて、吹けない口笛を吹くフリをする。

そんな二人のやり取りを前に、アンジェリカは深々と溜息は吐い

て、がつくりと首を落とした。

「ヴァル……子供を相手にそんなムキになってどうするのよ……はあ……ともかく、今からでもいいから掃除位はちゃんとして！ 明日には家具が届く筈なんだから、それまでに終わらせること！ そうじゃないと、いつまで経っても住む事が出来無いわよ！ いい？」

「へえ……よくそんなに早く家具が届くように手配できたな」

「まあ、そこはそれ。コネってやつよ。私の仕事柄……ね？ それはそうと、掃除をちゃんと済ませて。取り合えず用事が終わったし、また私も手伝ってあげるから」

話題を上手く逸らしたか、とヴァルトが思ったのも束の間だった。すぐさまアンジェリカはそう言う自分より頭一つ高いヴァルトを見上げて、厚い胸板を軽く叩いた。

「へいへい……ったく、住めりゃいいだろうに……」

「……何か言ったかしら？」

「よっしゃ！ 気合入れて掃除するかあ！」

最後の抵抗ですら、アンジェリカの気迫に押され最後まで言う事が出来無い。

ヴァルトは白々しく棒読みでアンジェリカの指示に返答すると、自分に割り当てられた二階部分の掃除へと戻るのだった。

刈り取りの季節に入った今の時期は、陽が傾くのも若干早い。ほんの少し前に昼の終鐘が鳴ったばかりだというのに、既に陽は斜陽となっていた。

「あー……だりい」

二階の掃除もあらかたは終りを迎えていた。ヴァルトは腰を曲げていた体を起こし、手に持っていた雑巾を木桶へと放り込む。雑巾同様、木桶に汲んでいた水も汚れに染まっており、これまでに何度水を汲み替えたかは考えたくも無い。

「……掃除なんて何年ぶりだ？」

独り言を漏らしながらヴァルトはその場で腰を回したりと、同じ姿勢で固まった体をほぐす。

途中で食事をする以外はずっと屈んだ姿勢のままで雑巾掛けをしていたのだから、体が固まるのも仕方が無かった。

一つ大きく伸びをすると、ヴァルトは部屋を出て玄関ホールへと降りてゆく。

そこには柱を磨くアンジェリカと、大声で彼女に纏わり付くソフィアの姿があった。

「あんじえー……あそぼーよ！」

「もう少しだけ待ってね？　ここを磨いたら終りだから」

「……ソフィーつまんない」

忙しく掃除を行うアンジェリカの周りを歩きながら誘いの文句を口にするソフィアと、一言ずつ苦笑混じりにも丁寧に戻すアンジェリカ。その姿は傍から見るとまるで、家事と子育てに追われる主婦のようだった。

ヴァルトは巻き込まれまいと、気配を殺しながら階段を下りる。幸いにもアンジェリカとソフィアには気付かれてはいなかったのだが……丁度、倉庫だった部屋の掃除を終えたのだろう。段を降り切った時に、階段下の扉から出てきたマリエラと目が合った。

マリエラはヴァルトと視線が重なった瞬間には、ヴァルトを指差しながら口を開いていた。

「あっ！ ダメオヤジがまたサボってる！」

「……サボってねえよ。二階が終わったから降りてきたただけだ！」

「ヴァルー！ おわったの？ あそんで！ あそんで！」

マリエラとのやり取りでヴァルトの姿を捉えたソフィアは、こちらに標的を変えて走ってきた。足元に子犬のように纏わり付きながら、何度も「あそんで」と催促を始める。ヴァルトの腰辺りまでの小さな身体は元気良く飛び跳ね、その度に肩まで伸びた金色の髪が揺れていた。

「はああ……あー今度な？ 今度」

ヴァルトは自分の前ではしゃぐソフィアの姿を前に苦笑を浮かべ、埃で汚れきった頭を搔く。それでも懲りる事無く、同じ単語を繰り返すソフィアには諦める気配が伺えない。一体、何と言えば目の前にいるソフィアに諦めさせる事が出来るのだろう、とヴァルトが思案していると横から声が掛かった。

「あらあら、ソフィアちゃん。そんなに我儘言っちゃ駄目よ？ ヴアルはおじさんだから、今日はきつと掃除で疲れてるのよ」

ヴァルトに助け舟を出したアンジェリカは口に手を当てて、笑みを隠しながらソフィアを注意する。だがこちらから見れば元々隠す気などは無く、その口に意地悪な笑みを浮かべているのが丸解りだ。

「そおなの？」

アンジェリカの浮かべている笑みなど気付く筈も無いソフィアは、ヴァルトの顔を見上げながら可愛らしい頭を傾げさせる。

「ヴァルはおじさんだから、あそべないの？」

「俺はそこまでオッサンじゃねえよ！」

「嫌ねえ……自分の年齢や衰えを認めないなんて、おじさんのいい証拠じゃない。将来はきつと偏屈ジジイになるんだわ。ああ、やだやだ！」

ヴァルトは少し狼狽しながらも否定するが、その言葉は例の如くアンジェリカによって一笑に伏される。口では勝て無い、と充分知っているヴァルトは恨みがましく睨むだけだ。対して自分の勝ちを悟ったアンジェリカは、悪戯っぽく笑う。

「嘘、冗談だってば。貴方の無尽蔵な体力は、私が身を以って“知って”いるから……ね？」

「……おい……」

赤く紅の塗られたぼってりとした唇を誘うように小さく舐めた後で、子供には分からない意味を込めた流し目をヴァルトへと送った。アンジェリカの浮かべる表情から、何に關しての体力を言っているのか刹那に気付くと、ヴァルトは視線に少しだけ陰を込めて睨みつける。

マリエラとソフィアは二人のやり取りの意味が分からずにきょとんとした表情を浮かべて、ヴァルトは慥然とした表情を浮かべていた。

アンジェリカは三人の様子があまりにも可笑しかったのか、ケラケラと声を上げて笑う。

「……っふふふ。あー、本当におかしいっ！ 冗談よ。そうね……もう少ししたら終わるから、ソフィアちゃんは私と遊びましょうか？ マリエラちゃんとヴァルは、仕立て屋さんから昨日仕立てるように頼んだ服を取りに行つて頂戴。セレスおば様は仕事が早いから、

もう出来ている筈よ？」

一頻り笑った後でアンジェリカが三人に向かってそう言うと、マリエラとソフィアの両姉妹は即座に目を輝かせた。まだ子供とはいえども、やはり女性には変わりないのだ。採寸を行い、生まれて初めて仕立ててもらった洋服が嬉しくてしょうがないのだろう。

「仕立ての割には、えらく早えんだな？　普通、四日位は掛かるだろう」

「うちのお店で利用してる仕立て屋さんだからね？　腕は私が保証するわ」

アンジェリカは店で着ている扇情的なドレスではなく。洒落た街娘が着るような服のスカートを少し持ち上げて、それをヒラヒラと振って仕立て屋の腕の良さを見せる。

赤いスカートに青い刺繍の施されたその服は、下級貴族の娘が着ていても違和感が無い程にまで綺麗な仕上がりをしていた。

「それだけなら、わざわざ俺が行かなくても……マリエラだけで大丈夫じゃねえのか？」

素直に抱いた疑問をヴァルトが口に出すと、アンジェリカから即座に否定の言葉が返ってきた。

「何を言ってるのよ！　もう直ぐ夜の初鐘じゃない！　この季節は直ぐに暗くなるんだから、女の子に一人歩きさせるなんて危ないでしょ？」

「へいへい……しかし、こんな色気も無いチビ助に何かしようなんて変態がそういるもんかね？　……まあ、いいけどよ」

「誰がチビ助よ！　ダメオヤジ！　私は一人でもいけるわ。ね、アンジェさん？」

見下すように細めた目だけで見下ろすヴァルトに、マリエラは抗議の声をあげてから、アンジェリカの方へと向き直る。胸を張って一人でも大丈夫だと訴えるが、アンジェリカは口に笑みを浮かべ、首を横に振ってから答えを返した。

「それは駄目。この街は貴女が思っているほど安全じゃないのよ？……それに、昨日は採寸でセレスお婆様がこちらに来てくれたけれど……お婆様の仕立て屋はガラの悪い特別区に近いから、余計に危ないわ」

「……わかりました……」

頬に手を当てて心配げな表情を浮かべるアンジェリカに、マリエラは素直に頷く事しか出来無かった。

マリエラは代わりに、これ見よがしに大きく溜息を吐いて自分と同行するダメオヤジこと、ヴァルトを見上げる。ヴァルトはヴァルトで、面倒臭そうにマリエラに負けじと盛大な溜息を吐いていた。

「なによ……」

「何でもねえよ。……それよりいいから、早く行くぞ。チビ助」

「チビ助って言わないで！　ダメオヤジ！」

二人はそれぞれ文句を口に載せて、玄関から外に出て街へと向かうのだった。

目の前には色とりどりの布地が高く積みまれ、唯一整っているカウンターから奥を覗くと、年配の女性から若い娘に至るまで、様々な針子達が慣れた手付きで服を仕立てていた。

ヴァルトは女性しかない店の中で、居心地の悪さを誤魔化すよ

うに店のあちこちを所在無さげに見回していた。反面、マリエラは展示されている服が珍しいのか店に入った瞬間から目を輝かせて、何度も視線を端から端へと往復を繰り返している。

そんな対照的な二人に向かって、声が掛けられた。

「はい、お待ちませ。こっちが小さいお嬢ちゃんの方で……こっちがアンタの分になるね」

「ふわあああ……ありがとうございます！」

針子達の中から所々白髪になっているも、上品な雰囲気を漂わせた壮年の女性が奥から姿を見せた。手には二つの洋服を持ち、カウンターのうへとそれを丁寧に載せる。

顔を輝かせてカウンターを覗き込むマリエラを見て笑顔を浮かべると、女性は一つ一つ仕立て上がった服をその場で広げていった。胸を張り自慢するように裏返したりして、出来栄えを披露する。その度にマリエラは頷き、蒼い瞳で食い入る様に出来たばかりの服を眺めていた。

「これ、私の服なんですよね？ はあ……すごいなあ……」

「そう喜んでもらえると、仕立て屋冥利に尽きるってもんさ。アンジェ嬢ちゃんの知り合いだし、この帯もつけてあげようかねえ」

マリエラとソフィアに仕立てられた洋服は大きさと色こそ違いはあれど、お揃いの服となっていた。マリエラは確認の為に手渡された自分の服を広げて、あちこちを見回しては頬を緩ませている。

青い布地で仕立て上げられた服は、スカート部分に薄い緑で刺繍が施され鮮やかなものだった。ヴァルトの目から見ても、とても一日で仕立てられた物だとは思えない出来栄えだ。

因みに——ソフィアの洋服はよく汚すだろうということで、赤い布地が使われていたが、これにもまた緑の刺繍が丁寧に施されてい

る。

「どうだい？ いい出来だろう。なんなら、着て帰ってみるかい？」

マリエラの喜ぶ様を、まるで孫娘でも眺める様な瞳で見つめていた仕立て屋のセレスは、マリエラに対して問い掛ける。セレスの申し出に対し、マリエラはたつぷりと時間を掛けて迷ってみせる。やがて、にっこりと微笑むと首を横に振った。

「ううん。アンジェさんに最初に見せるって決めてるから……それに汚すといけないし……」

「あっはっはっはっ！ アンジェ嬢ちゃんも、随分と可愛らしい子を見つけてきたもんだ。本当は服の汚れなんて気にしなくてもいいんだよ？ 子供の服は汚れるって相場が決まってるものさ。まあ、いいさね。それなら早く帰って、アンジェ嬢ちゃんに來ている所を見せて驚かせてあげな。贈った者にとっては、それが何よりのお返しになるからね？」

「はい！ 有難うございます！」

「いいかい、アンタもこんな可愛い子が危険な目に合わない様に、ちゃんと守るんだよ！」

「はっ？ あ……ああ……」

会話に入る事も出来ずにただ成り行きを見ていたヴァルトは、突然振られたセレスの言葉に戸惑い、言葉少なめに返事をするしかできなかった。

二着の服をなめし皮に包んで貰い、二人は店を後にする。

店を出て暫く歩いていると、言葉数が少なめだったヴァルトが口を開いた。

「別に着て帰っても、よかったんじゃないのか？」

「うん……でも、ソフィと一緒に着たかったから……」

「へっ、可愛いところもあるんだな！」

「うるさい！ デリカシーも無い駄目オヤジ！」

二人は茜色に染まった通りを、それぞれ悪態をつきながら歩く。それ以外は何の問題も無く、足を進めていたが……屋敷まで丁度中間に差し掛かった頃に、ヴァルトは急に足を止めた。

「なによ……」

「あ……いや、ちっと用事を思い出しちゃってな？ ここからは、もう一人でも大丈夫だろ？」

急に立ち止まったヴァルトへと振り返って、マリエラは眉を顰める。こちらと目を合わさず、横を向いて短い赤毛を掻くヴァルトの前に、マリエラは呆れて溜息を一つ吐いた。

「……また、サボる気なんだ……もう、アンジェさんに叱られても知らないんだからね！」

「直ぐに帰るって……アンジェには、その……上手く言っというてくれ！」

ヴァルトはそれだけを言い残すと、その場にマリエラを残してどこかへ走り去っていった。

その行動は余りにも素早く、マリエラに引き止めさせる間も与え無い。反撃の言葉をマリエラが思い浮かんだ頃には、既にヴァルトの姿は無く。通りを歩く人込みへと消えてしまっていた。

「何よ！ ほんつとに勝手なんだから！ ダメオヤジ！ べえーっだ！」

罵声を浴びせかける相手が既にも関わらず、怒りと呆れが収まらないマリエラはヴァルトが消えていった方角へ向かって大声で叫ぶ。

その時、遠くの方から一度だけ鐘の音が大きく響き渡ってきた。夜の始まりを告げる初鐘の音だ。

アリユテーマの街では時刻を知らせる鐘が日に七度、街が管理する塔から鳴らされる。

朝に二回、昼に三回、夜に二回の合計七度だ。

夜に鳴らされる最初の鐘を聞きながら、マリエラは空を見上げた。既に陽は大きく傾き、次の眠鐘が鳴らされる頃には完全に暗くなってしまうだろう。

しかし、マリエラは足早に屋敷とは違う方向へ歩き出した。足取りには迷いが無く、目的地があることが傍目にも分かる。

幾つかの通りと路地を抜けて、マリエラは特別区の程近く——大工などの職人が住む城壁近くまで来ていた。

「確か……この辺りのハズだったけど……」

陽も殆ど暮れかけ薄暗くなった城壁の傍で目を凝らし、マリエラは懸命に何かを探していた。短い距離を数回ほど往復した後、目的の物を見つけると、目を輝かせて走り寄る。

「……あっ！ あったあ！」

マリエラが懸命に探していたものは、城壁傍に生えている一本の木だった。見上げて一つ大きく頷いた。

そしてアンジェリカから貰った服に汚れがつかない様に腕まくり

をして、おもむろにその木の根元を近くにあった木の枝で掘り返し始める。

マリエラが額に汗を浮かべて掘り返し続けていると、手に土とは違う柔らかい感触が枝を通して伝わってきた。訪れた感触に思わず笑顔を浮かべると枝を放り投げ、汚れるのも構わずに手で穴を広げると小さな安堵の笑みを浮かべた。

——よかったあ……ちゃんとあった……

土の中から姿を見せたものは、かなり汚れて薄汚くなったなめし皮の包みだった。

なるべくそつと持ち上げ、マリエラは包みの表面に付いた土汚れを丁寧に落とす。そして、それを胸に抱えると、素早く元来た路地へと戻っていった。

マリエラは仕立ててもらった服と、今しがた掘った二つの包みを胸に抱いて、すっかり陽の落ちた裏路地を通り抜ける。

顔には笑みを浮かべ、胸に抱いた荷物に何度も目を落とし、知らず知らずのうちに屋敷へと向かう足取りは速くなっていた。

今まで何度も通った事のある道だからという自信と、胸に抱く荷物を早くソフィアに見せたいという思いで気が急いていたのだろう。普段は人通りが無い小さな通りにマリエラが出た時には、周囲に気を付ける事などすっかりと忘れてしまっていた。

マリエラの小柄な身体に衝撃が走ったのは、その時だった。

不意の出来事と包みを抱いていた事もあり、マリエラは軽い身体を石畳に転がってしまう。その拍子に抱いていた包みが小さな腕から落ちた。

「……ってえーな！ このクソガキ！ どこ見て歩いてやがる！」

マリエラは痛む体を起して、ぶつかった相手を見上げた。自分に向かつて罵りの言葉を吐く男を前に、マリエラの表情が固まる。

そこにいたのは……外見からして、いかにもガラの悪さが伺える職人崩れの男であった。

「あ……ごめ……」

「ガキが何をそんなに……お！ これは……」

謝ろうとしたマリエラの言葉は、男の視線が追った先を見て最後まで続かない。

通りに落とした際に梱包していたなめし皮が緩み、仕立ててもらったばかりの服が少し見えていたのだ。石畳の上で栄える色を目敏く見つけた男は、それを拾い上げると目の前で広げて、卑しい笑みを浮かべる。

「おお、こいつは丁度いい！ うちのガキにぴったりじゃねえか！ ぶつかった慰謝料だ。こいつは貰っておいてやるぜ」

「それは……っ！」

男が手にしていたのはマリエラの服ではなく、ソフィアが着る筈の服だった。

「それは駄目っ！ 返してっ！」

「うるせえ！ てめえからぶつかってきたんだろうが！ こいつで勘弁してやろうってんだ感謝しやがれってんだ」

「謝りますからっ！ お願いします！ それだけは駄目なのっ！」

取り上げられた服を何としても取り返そうと、男の足にマリエラは必死にしがみつく。だが、それが気に食わないのか、男が怒声と共に開いている方の手でマリエラを殴ろうと拳を振り上げた。

「うるせえって言ってるんだよ！」

「ひっ！」

振り上げられた拳を見て、マリエラの喉から小さな悲鳴が漏れる。だが男は手を止める事無く、勢いをつけマリエラへと向かってそれを振り降ろす。

だが――、男の拳がマリエラへと振り降ろされる事はなかった。

「俺の連れに何か用か？」

瞼を硬く閉じたマリエラの耳に、低く太い声が入る。

訪れる筈の衝撃は、何時までたっても訪れない。マリエラへ向かって振り下ろされようとしていた拳は、それよりもさらに大きく硬い手で受け止められていた。

マリエラが殴られる恐さから目を閉じていた瞳を開けて、目の前に立つ人物を呆然と見る。そこにいたのは、マリエラが普段“ダメオヤジ”と呼んでいる男の姿だった。

「おとう……」

恐怖から開放されたのと、聞きなれた声に思わず父と呼びそうになり、マリエラは口を噤む。

そんなマリエラの胸中など関係無いとばかりに、目の前ではヴァルトと男のやり取りが行われていた。

「いててえいでえ！ 離せっ！ 離してくれ！」

「離してください” だろうか？」

「は……離して下さい……うぐうつ」

“お願いします” は？」

「くっそ……いであだあ！ おねがいします！」

「やだね」

万力のような馬鹿力で男の腕を締め上げ、ヴァルトは不機嫌そうに淡々と言葉を述べる。対して男は、余りの痛みに持っていた服を地面へと落として悲鳴と懇願を上げ続けるだけだった。

男の口から漏れる懇願の文句を聞いてなお、ヴァルトは意地の悪い笑みを浮かべて、更に絞める力を強めてゆく。

「い……いぎぎぎぎ……ぎああ……」

「情けねえな……ほら、もっと抵抗してみろよ」

「はなじで……ぐだし………へプウツ!？」

もう少しで腕が折れると思った瞬間に、男の口から突然奇妙な悲鳴が上がり、直後に男は泡を吹きながらヴァルトに握られている腕を支点にして、身体をぐったりとさせて気を失ってしまった。

「……お前、いつの間に……」

ヴァルトが訝しげに見ると、男が突然気を失った原因を把握して呆れた声を漏らす。男の背後には――股間を蹴り上げた体勢で止まった、マリエラの姿があった。

「この人にも子供いるから、怪我させちゃ駄目！」

「おいおい……お前がやられそうになってたんだろうが……それに……そこを蹴り上げるのは、女としてどうかと思うぞ？」

マリエラの合致していない言動に、ヴァルトは苦笑を浮かべて返

す。

「私は怪我をさせていないもん！」

「いや、そうじゃなくて……あのな、そこは男にとって……もういい……」

気絶した男を軽く路地の脇へと放り投げた後に、ヴァルトは肩を落として溜息を吐いた。マリエラはそんなヴァルトには目もくれず、石畳の上へと落ちたソフィアの服を拾い上げ汚れていないか確認を行いながらも愚痴を続ける。

「そもそも、ダメオヤジが勝手にどっかへ行っちゃうから悪いんじゃない！」

「それは……俺が悪かった。だがお前こそ、どうしてこんな所にいるんだ？ 先に帰ったんじゃないかったのか？」

「それは……その……私も用事があって……」

マリエラは服から汚れを落とすと綺麗に畳み直した後で、それを胸に抱いた姿勢で口籠る。その様子から、聞いて欲しく無い内容なのだと悟ったヴァルトは幾度か目を宙に彷徨わせた。

「まあ、別に俺は何だっていいんだけどよ。それより……怪我はねえか？」

「何よ。気持ち悪い……私を心配するなんて……」

「ばっ、馬鹿！ ちげえよ！ お前にもしも怪我なんてさせたら……俺がアンジェの奴に説教されるからだろうが！」

「……ふうん」

半眼で睨むマリエラの視線にヴァルトは慌てて言い訳を口にしなからも、表情を誤魔化す為か地面へと転がっている荷物を拾い集めてゆく。

石畳に落ちた衝撃からか、もしくはぶつかった拍子にか……服と同様、マリエラが掘り出した包みも地面へと広がってしまった事に、今更ながらマリエラは顔を赤らめる。

マリエラが掘り出した包みの中身……それは木で出来た玩具や人形、髪飾りといった幾つかの小物だった。使い古されたそれらをヴァルト一人に拾わせる事に抵抗を覚え、慌ててマリエラも地面へとしゃがみ込む。

「べっ、別に私一人で拾うから……いいのに」

「一人でするよか、二人の方が早いだろう……ん？」

「あ……それはっ！」

ヴァルトの声に含まれた疑問の色に、マリエラは慌てて顔を上げる。屈み込んだヴァルトの手には木で出来た人形があった。それを持ち上げて、興味深げに見ているヴァルトの姿にマリエラが慌てた声を出す。

「これは……お前達の父親……グレンが？」

「……うん……私の家はお母さんを早くに死んじゃったから……働くお父さんが寂しくないように……作ってくれたの。無くしたり、盗まれたりしたら困るから埋めて隠してたんだ」

俯きながらも言葉を告げるマリエラは、頬がさらに熱を帯び赤くなるのが自分でも分かった。言った後で必ずからかわれると思い、目を合わす事が出来ない。

だが、ヴァルトが見せた反応は、マリエラが想像していたものは違うものだった。

「……そうか……器用なもんだな。……大事にしるよ」

ヴァルトは手に持っていた人形を、壊れ物でも扱うかのように丁寧にマリエラへと手渡して小さく呟くだけだった。

「……え？」

渡す時の丁寧な扱いと、一瞬だけ見せた優しい眼差しにマリエラは驚きを隠せない。一瞬見惚れてしまった事を無意識に恥ずかしく思い、気付いた時にはつい憎まれ口を叩いてしまっていた。

「ダメオヤジは何をやったのよ！ ど……どうせ、またお酒でも買いに行ってたんでしょ！」

マリエラはヴァルトの背中に、膨らんだ大きな皮袋を見つけて咎めるように指を差す。ヴァルトも罰が悪そうに頭を掻いた後で、あらぬ方向を向いた。

「ん……まあ、そんな所だな。アンジェには内緒にしとけよ？ あいつの説教は長えからな……」

「うん、分かった。その言葉も報告するね」

「んなっ！ てめえ、この裏切りもんが！」

「あはははっ！ 仲間になった覚えなんかありませんよーだ！」

マリエラは服の包みと、父が作ってくれた小物が入った包みを大切に胸に抱くと、怒りの声を上げたヴァルトから逃げ出すように通りを走り始めた。

ヴァルトも小さく溜息を一つ漏らすと、マリエラを追いかけるべく背中の荷物を背負い直して、ゆっくりとマリエラの後を追うのだった。

屋敷に戻ると、アンジェリカという魔王が再び屋敷の扉前で降臨を果たしていた。

「ヴァル……貴方はいい歳して、ちゃんとお使いすら出来無いのか

しらね……？」

元々追いつく気のなかったヴァルトは、マリエラが走って帰った後を悠々とした足取りで歩いて帰ってきたのだが……到着した頃にはマリエラがアンジェリカに告げ口、もとい“報告”を終えており、今の状況に至っていた。

「あ……う……」

「どうやら、お馬鹿さんは言葉も話せなくなってしまったようね？」

短い付き合いながらもアンジェリカが一度こうなれば、何を言っても無駄だとは身を以って体感しているヴァルトだったが、それでも何とか言い訳をしようと口を開く。だが今回ばかりは余りの気迫に押され、言葉が何一つ浮かんではこなかった。

恨みがましくアンジェリカの横に立つマリエラを見つめるも、マリエラはどこ吹く風とばかりに横を向いている。

「大体、貴方には責任感というものが欠けているのよ！ あれだけ危険だと言っておいた筈でしょう！　なのに、小さい子供を放っておいて……」

ヴァルトが何も反論を行えない事が分かっているアンジェリカは、滝水の如く説教という水を容赦無く浴びせかける。

一体どれぐらい頭の上を打っては、霧散する言葉を聞いていたのだろうか？

説教が降り注ぐ滝の終りは、突然に訪れた。

「……アンジェさん、それ位でいいじゃないですか？　それよりも……遅くならないうちに、私とソフィーが着替えるのを見てくれませんか？　凄く良い服だったんですよ！」

唐突に隣から放たれたマリエラの言葉を聞いて、アンジェリカの表情が一変する。マリエラと手を繋いで黙っていたソフィアも、姉の言葉を聞いて即座に反応すると嬉しそうに同意を示した。

「あ……あら、そうね。おば様があれだけの仕立てをしてくれたんだもの、きつと凄く似合うと思うわ！ マリエラちゃん、ソフィアちゃん……責任感のない大人は放って、一緒にお着替えしましょうか？」

「はい！」

「うん！！！」

アンジェリカの言葉に、マリエラが元気良く返事を返して、それに追いかけるようにソフィアが満面の笑みを浮かべて頷く。

一方、背を向けたアンジェリカを前に漸く説教も終わりかと、ヴァルトは安堵の表情と溜息をアンジェリカに気付かれない様に吐いた。ふとその視界に――屋敷へと入るアンジェリカと、悪戯っ子の笑みを浮かべて指を一本立てるマリエラの姿が映る。マリエラの浮かべる笑みと、指の意味を汲み取ったヴァルトは鼻を鳴らした。

――“貸し一つ”ってか？ いい根性してるぜ……全くよ。

ヴァルトはその姿に苦い笑みを浮かべて、手をヒラヒラさせてマリエラに返事をする。マリエラは思いつきり舌を出してそれに答えようと、アンジェリカの後を追って屋敷の中へと姿を消した。

「さて……と」

三人が屋敷の中へと入って行った後――つい先程まで、痛烈な説教を受けた事すら忘れたかの様にヴァルトは口端を上げて笑みを浮かべる。

「さっさと済ませちまうか……」
そう言ってヴァルトは庭にある大きな木の元へと向かうと、背負った荷物を広げたのであった。

屋敷の中で賑やかに騒ぎながら、服を着替え終えた三人が屋敷の外に出る頃には……夜の訪れを告げる二回目の鐘が鳴り響き、冷たい空気が外に流れていた。

新しい服を身に纏い、はしゃぐ二人の姉妹とは別にアンジェリカは夜風に身体を軽く震わせる。軽く露出した肩を擦りながらも、アンジェリカは辺りを見回していた。

「やっぱり……ヴァルの姿が見えないわね。家にも入らなかった様だし……拗ねて先にお店へ帰っちゃったのかしら？」

アンジェリカがしょうがない男だとばかりに苦笑を浮かべるも、その目には『先程は少し言い過ぎたかもしれない』という色が漂っている。

丁度その時、アンジェリカの心境に答えるかの如く、屋敷の角から当のヴァルト本人がひょっこりと姿を現した。

「おせえよ！ 一体着替えにどれだけ時間を掛ける気なんだ？」

「あら？ いたの。女の支度には時間が掛かるものよ？ ……それにしても、中にも入らず何をしていたのよ？」

アンジェリカが放った言葉にヴァルトはニヤリと笑みを浮かべると、それ以上は何も言わず屋敷の角へと再び姿を消してしまった。
ヴァルトが浮かべた笑みの理由が分からないまま、ヴァルトを追い掛けるソフィアについてマリエラとアンジェリカも後を追う。ヴ

アルトが消えた屋敷の角を曲がったアンジェリカ達は、そこで変なものを見つけて立ち止まった。

敷地内にある屋敷の庭に大きな木が一本生えているのだが、昼間に見た時とは明らかな変化を見つける。その太い枝にロープが二本結わり垂らされて、地面へと垂れた先端に見るからに頑丈な一枚板が結ばれていた。

一見するとそれは椅子にも見えるが、椅子にしては不安定で使い物になるとは思えない。

「なにこれ？ 椅子？」

「ははっ！ アンジェも知らねえか？ こいつは東方の国にある“揺り椅子”ってヤツだ」

木の横で自慢気に腕を組んで立っていたヴァルトに、アンジェリカが尋ねる。その問いにヴァルトは嬉しそうに犬歯を覗かせ笑ってみせる。

揺り椅子と呼ばれた物は微かに吹く夜風に当たり、名前の通り小さくゆっくりと揺られている。

「ソフィア。こっちに来てみな」

「う……うん……」

初めて見るものに流石のソフィアも怖気づき、呼びかけにぎこちない返事で答えると、ヴァルトの元へとゆっくり近付いてゆく。少し身体を強張らせながらも、揺り椅子から目を離さないソフィアをヴァルトは正面から抱き上げる。

そして、宙に浮いた揺り椅子へゆっくりと座らせた。

「ほら、ここに座ってな？　しっかりとこのロープを握るんだ。そう、それでいい」

ソフィアの目線と合う様に屈み込みながら、ヴァルトは色々と説明してゆく。

良く理解しないまま頷く姿を見て、やってみた方が早いかな。と苦笑を漏らし、ソフィアが座る揺り椅子の後ろへと回り込む。

ソフィアが落ちない様に心掛けながら、ヴァルトはロープをゆっくり前後へと揺らし始めた。

「ほら、こうやって遊ぶんだ」

「……うわぁ！」

最初は恐怖に身を竦ませたソフィアも、揺れを繰り返すうちに慣れてきたのか――最後は楽しげな声を上げて、一人で振り子の様に揺らし始めた。

楽しげに宙を往復するソフィアの姿を見て、アンジェリカとマリエラも驚きと感嘆の声を漏らす。

「すごい！　ゆらゆらぁ！　ゆらゆらぁ！」

「なにこれ、すごい！」

「これは確かに……こう、何ていうか。うん。楽しいわ」

三人が代わる代わる揺り椅子に座りながら、三者三様の喜びを表現する。

「……でも、良くこんな珍しいものを知っていたわね？」

暫くして子供の様に姉妹と共に遊んでいたアンジェリカも、今はヴァルトの横に並んで楽しげに遊ぶ二人の姉妹の様子を見て微笑ん

でいた。

ヴァルトも二人が自分の作った遊具で遊ぶ姿をまんざらでも無い様子で眺めながら、アンジェリカの言葉に返答する。

「傭兵時代だった頃にな、東方出の奴に聞いた事があって思い出したんだよ」

「それにしたってどうして急に……」

「ああ、ソフィアが一人で寂しそうにしていたからな。こいつでなら一人の時でも遊べるだろ？」

「へえ……やっぱり優しいのね？ それとヴァルは昔は傭兵だったんだ……」

「……っ!？」

ヴァルトはうつかり口が滑った自分の言葉に、しまったという表情を浮かべる。一瞬険しい顔を浮かべるも、その表情は既に消え、代わりに口を真一文字に結んだ。

アンジェリカは唐突に様子の変わったヴァルトに対し、怪訝そうに眉を顰める。どうしたのかと尋ねようと口を開く前に、その声はソフィアによって遮られた。

「ヴァルー！ ヴァルー！ ありがとうね！」

「ああ……気にしなくていい」

先程までの様子はどこへやら、ヴァルトはソフィアの言葉にも無愛想に答える。

しかしヴァルトが浮かべる無表情な仮面も、次に発したソフィアの言葉によって打ち砕かれる事となった。

「あのね……あのね！ ヴァルはソフィーのおとうさんみたいなの！」

無邪気に発せられたその言葉を聞いた瞬間、ヴァルトの細く鋭い目が大きく見開かれた。

ヴァルトが僅かに見せた変化に全く気付く様子も無く、笑いながら駆け寄ってきたソフィアの頭を一撫でする。

アンジェリカだけが変化に気付き、声を掛けようとするも……突然ヴァルトは踵を返し、三人に背を向けた。

「……すまんが、先に帰る。後は好きにしてくれ……」
たった一言それだけを告げて、ヴァルトは大きな歩調でその場を後にした。

「何よ？ あのダメオヤジ……急に帰ったりなんかして？」
代わる代わる遊んでいた揺り椅子に夢中で話を聞いていなかったのか、ヴァルトが帰ってゆく姿を見て無然とマリエラが呟いた。

「ヴァル……おこちゃったのかなあ？」
マリエラとは対照的に、俯きながら沈んだ声でつぶやきを漏らすソフィアの頭を、アンジェリカがそっと撫でる。

「きつと照れてるのよ。こんなに素敵なモノを作ってくれたのよ？
怒ってなんかいないから、安心するといいわ」

「うん……でもね……ヴァル、すごく……さみしそうなかおしてたの……」

「そう……」

ソフィアの言葉にアンジェリカはただ、一言だけしか答えられなかった。

広い屋敷の庭に、暫しの沈黙が訪れる。

それぞれが口を噤む中で、良く晴れた夜空に浮かぶ一際明るい月が――揺り椅子と、その周囲にいる三人を優しく照らすだけであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7490y/>

我が慟哭ハ、拳ト成リテ

2012年1月7日05時50分発行